野尻町文化財調査報告書第４集

新村遺跡・高山遺跡
東城原第１・２・３遺跡
紙屋城址遺跡

漆野原県営ほ場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1990. 3

宮崎県西諸県郡
野尻町教育委員会

新村遺跡・高山遺跡
東城原第1・2・3遺跡
紙屋城址遺跡

漆野原県営ほ場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1990. 3

宮崎県西諸県郡
野尻町教育委員会

序

漆野原ほ場整備事業にともなう遺跡発掘調査を、昭和60．61．62年度の３ケ年にわたって、野尻町教育委員会は実施してまいりました。

発掘調査にともなう困難な問題が各年度にありましたが、結果としてはこれらを克服して、大きな成果を得たと安堵しています。

初年度は県指定文化財（一里塚）と工事の関係や発掘調査期間と、ほ場整備工期をめぐっての調整に腐心いたしました。

次年度は、生産業者（さといも・ごぼう）の理解をいただく難問題が発生しました。

最終年度は、土地改良区の設計変更（紙屋城二の堀）と、保存のための町財産取得の努力が必要でありました。

これらの重要問題解決なしには、３年間の遺跡発掘調査を完了させることはできませんでしたが、難問題の続出を突破できたのは、文化財に対する関係者のご理解とご協力であったと感謝の気持がいっぱいであります。

漆野原土地改良区・大淀川下流土地改良事務所の皆様や農作物生産者の地域住民各位にあらためてお礼を申し上げます。

さらに、猛暑や寒風に耐えて調査を担当いただきました県文化課の職員各位・発掘作業に従事してくださいました皆様のご苦労にも深甚の謝意を表明させていただきます。

３年間の調査は大きな成果をあげました。永い間眠り続けていた遺跡・遺物に、学術的なメスを加え、科学的な解明と保存措置を講ずることができました。

旧石器・縄文・弥生時代の土器・石器・住居址から中世の山城で島津・伊東争奪最終戦（天正５年）の拠点となった紙屋城の空堀・土塁・遺物まで、広大な調査区域であげた成果を報告書にまとめる時を迎えました。

この報告書が広く活用されることを念願し、関係の皆様全員にお礼を申し上げまして、序文といたします。ありがとうございました。

野尻町教育委員会
教育長　今　吉　忠　義

例　　言

1，本書は、漆野原県営ほ場整備事業に伴い野尻町教育委員会が、実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2，各遺跡の発掘調査は、次の期間実施した。

新村遺跡・高山遺跡	昭和６０年１０月１７日～１２月２０日
東城原遺跡群	昭和６１年１０月　６日～１２月２０日
紙屋城跡遺跡	昭和６２年　９月　９日～１２月２５日

3，調査関係者は次のとおりである。

調査主体	野尻町教育委員会	教　育　長	今吉忠義
		社会教育課長	梯　長弘（昭和61年度まで）
			吉田哲幸（昭和62年度から）
		同　課長補佐	国武正広（昭和61年６月まで）
			長瀬道大（昭和62年１月まで）
			前田昌重（昭和63年度まで）
			川野昭夫（平成１年度から）
		文化財担当	脇村一也（昭和63年７月まで）
			吉野貴弘（昭和63年８月から）
調査員	新村遺跡・高山遺跡	面高哲郎（当時・県教育庁文化課主任主事）	
		日高孝治（当時・　同　主事）	
	東城原遺跡群	北郷泰道（当時・　同　主事）	
	紙屋城跡遺跡	近藤　協（当時・　同　主事）	

4，本書の執筆・編集は次のとおりである。

新村遺跡・高山遺跡	日高孝治
東城原遺跡群	北郷泰道
紙屋城跡遺跡	近藤　協

5，本報告の方位は磁北である。またレベルは海抜絶対高である。

6，出土遺物は、野尻町教育委員会で保管している。

7，本書を作成するにあたり、下記の諸氏に協力をうけた。記して感謝したい。
市川　米太氏（奈良教育大学教授）、西村　進（京都大学理学部地質学鉱物学教室）、有村玄洋氏（宮崎県総合農業試験場）、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）。

総　目　次

○　調査に至る経緯 …… 1

○　歴史的環境 …… 3

○　新村遺跡・高山遺跡 …… 7

○　東城原第１・２・３遺跡 …… 55

○　紙屋城址遺跡 …… 105

調査に至る経緯

宮崎県大淀川下流土地改良事務所では、昭和56年より野尻町大字紙屋・漆野原地区において圃場整備事業を実施している。昭和59年度工事が実施されていた地区内に東日本系の弥生土器、長頸の壷形土器が出土したと伝えられる漆野原遺跡が所在していたので分布調査を実施したが、その確認は出来なかった。漆野原地区は、標高200m前後の台地上に在り、その周辺は侵蝕谷となっており、地区内で遺跡地図に記された遺跡は、漆野原遺跡の外、縄文後期の黒色磨研土器、弥生中期の亀の甲タイプの甕等を出土した秋社洞穴、中世の紙屋城跡であった。地形上、その地の遺跡が存在する可能性があったので、実施前年度に予定地内の分布調査及び試掘調査を行った。新村遺跡の分布調査では、60年度実施地内では遺物等の散布は確認出来なかったが、予定地外の南縁の養豚場ののり面のアカホヤ層の下10cm、黒褐色土の層で集石遺構が確認され、山形押型文土器の小片が採集された。試掘調査はアカホヤ、黒褐色土の残存状況と焼石、遺物等の出土の確認を目的として調査を実施した。焼石等は南縁を中心とした場所で出土し、その深さは、地表下１m程であった。また、高山遺跡は、丘状の地形でごぼう作付けのためトレンチャーによりアカホヤ層下まで深耕されていて焼石の散布が認められ、遺跡の東縁を走る農道ののり面のアカホヤ層下で焼石等の包含が確認されたので、特に試掘調査は実施していない。宮崎県大淀川下流土地改良事務所、土地改良区と遺跡の保存について協議を行った結果、工事は、水田となる部分の工事は包含層まで達しない設計であったので道路部分のみを発掘調査することになり、昭和60年10月17日から12月20日まで県文化課主事日高孝治（現県史編さん室）の担当で実施した。

東城原は国道の南側に展開する台地で、昭和61年度工事予定地である東半部を分布調査を実施したところ、トレンチャーで深耕された箇所やアカホヤ層下の黒褐色土まで下げられ耕作されている箇所で焼石等の散布がみられ、試掘調査により、３ケ所の縄文早期の遺跡が確認された。遺跡は、いずれも台地縁辺部の丘状の地形の場所に立地しており、工事施工により影響を受けるため発掘調査を実施した。調査は、昭和61年10月６日から12月20日までの間県文化課主事北郷泰道の担当で実施した。

昭和62年度の工事区は、昭和62年度工事区の西で中世の紙屋遺跡の一部が含まれ、城跡に伴う土塁、空堀が良く残存していた。予定地内の分布調査ではこの他B－1区で糸切りの土師器皿、B－2区では土器片が採集されたので試掘調査を実施した。その結果、B－1区では遺物等は出土しなかったが、アカホヤは良く残存し、柱穴と考えられるピットが検出された。B－2区では弥生後期の土器片が出土し、調査中も弥生土器片が周辺で採集された。遺跡は、1か所で時期不詳の焼土が黒色土で検出されたが、弥生の遺構は確認出来なかった。試掘調査の結果から遺構等の分布密度は小さいながらもB－1区は中世の遺構・遺物が、B－2区には弥生後期の遺構・遺物が存在すると推定された。遺跡の保存について大淀川下流土地改良事務所、土地改良区と協議を行った結果、遺構が良く残存している第2の空堀と土塁の部分の約1,000㎡は地区除外にして現状で保存し、他の部分については発掘調査を行うことになり、昭和62年9月9日から12月25日まで文化課主事近藤協の担当で調査を実施した。

なお、地区除外で現状保存した約1,000㎡については町教育委員会で買収している。

注(1)　石川恒太郎「宮崎県の考古学」吉川弘文館1968

歴史的環境

野尻町は、宮崎県のほぼ中央部に位置し、北を須木村・綾町、南を高原町・高城町、東を高岡町、西を小林市と接している。当町は、大淀川の支流である岩瀬川の北岸に広がっており、町域は南北に約６km、東西に約18kmと東西に細長い形を呈している。地形的には、九州山地の南端裾部に接する地点である。町内には沖積低地があまりなく、岩瀬川の支流によって開析された丘陵性台地と谷が入り組んだ複雑な地形を呈している。

町内には、「全国遺跡地図」[1]等によれば約30ケ所の遺跡が確認されている。

旧石器時代の遺跡については今まで確認されていなかったが、今回の発掘調査において新村遺跡でナイフ形石器が出土し、高山遺跡で集石遺構が確認され、東城原遺跡で細石器が出土しており、厚く堆積した火山灰層のために発見されずにいる遺跡が相当数存在すると思われる。また大平山付近の断面からも、旧石器時代の層と思われる所から焼石が出土することが確認されている。[2]

縄文時代において、今回調査された新村遺跡・高山遺跡・東城原遺跡のほか、早期の集石遺構の発掘調査が行なわれた梯遺跡[3]や県内で数少ない縄文時代前期の曽畑式土器が出土している柿川内遺跡[4]などが知られている。また、表面採集された資料の中にも各時期のものが含まれている。

弥生時代には、大萩遺跡において後期の竪穴住居跡や土壙墓群が発掘調査されており、免田式土器など貴重な資料が出土している。また間仕切りを有する竪穴住居跡が大萩遺跡に続き紙屋城跡においても確認されたことは注目されるものである。

古墳時代においては、竪穴住居跡など、生活跡の検出はないが、県指定史跡である大萩古墳や九塚古墳が存在しており、古墳の周辺には古墳時代の南九州独特の墓制である地下式横穴墓が存在しており、今までに数十基が発掘されている。[5]また、東麓切畑においても地下式横穴墓の発掘調査が行なわれている。[6]

古代においては、延喜式に記載されている日向国十六駅のうち野後駅の比定地であり、古代の官道が通っていたと考えられる。

中世には、伊東氏・島津氏の抗争の場として登場しており、町内には、伊東四十八城の１つである野尻城をはじめとしていくつかの山城が存在する。今回調査さた紙屋城においては、堀や土塁の構造などが調査され、当時の状況を知るうえで貴重

な資料になると思われる。このほか、有形文化財ではあるが、東麓の石窟物（県指定）なども当時の文化を知る上で貴重な資料である。

近世（江戸時代）のものでは、漆野原一里塚（県指定史跡）や紙屋関所跡などがあり、古代以来の交通の要所としての野尻町の存在が感じられ、同時にその頃の遺跡も多く存在しているものと思われる。

1．新村遺跡	**2．高山遺跡**	**3．東城原遺跡**
4．堀切遺跡	5．清野原遺跡	6．真幸田遺跡
7．秋社洞窟遺跡	8．神立遺跡	9．星柳遺跡
10．池ノ原遺跡	11．今別府遺跡	12．萩ノ茶屋遺跡
13．天ケ谷遺跡	14．勝負遺跡	15．梯遺跡
16．平木場遺跡	17．吉村Ａ遺跡	18．吉村Ｂ遺跡
19．切畑遺跡	20．九塚古墳（県指定史跡）	
21．大笹遺跡	22．角内遺跡	23．大脇遺跡
24．猿瀬Ⅰ遺跡	25．猿瀬Ⅱ遺跡	26．釘松遺跡
27．三ケ野山遺跡	28．大沢津遺跡	29．柿川内遺跡
30．大萩古墳（県指定史跡）		**31．紙屋城跡**
32．紙屋今城跡	33．漆野城跡	34．高松城跡
35．戸崎城跡	36．野尻城跡	37．岩牟礼城跡

（註）

(1) 文化庁「全国遺跡地図 ― 宮崎県 ―」昭和52年。

(2) 大迫氏（野尻町文化財保護審議会委員）の御教示による。

(3) 面高哲郎「梯遺跡」『宮崎県文化財調査報告書第24集』昭和56年

(4) 宮崎県教育委員会「柿川内第Ⅰ・Ⅱ遺跡」1976

(5) 宮崎県教育委員会「大萩遺跡」1974

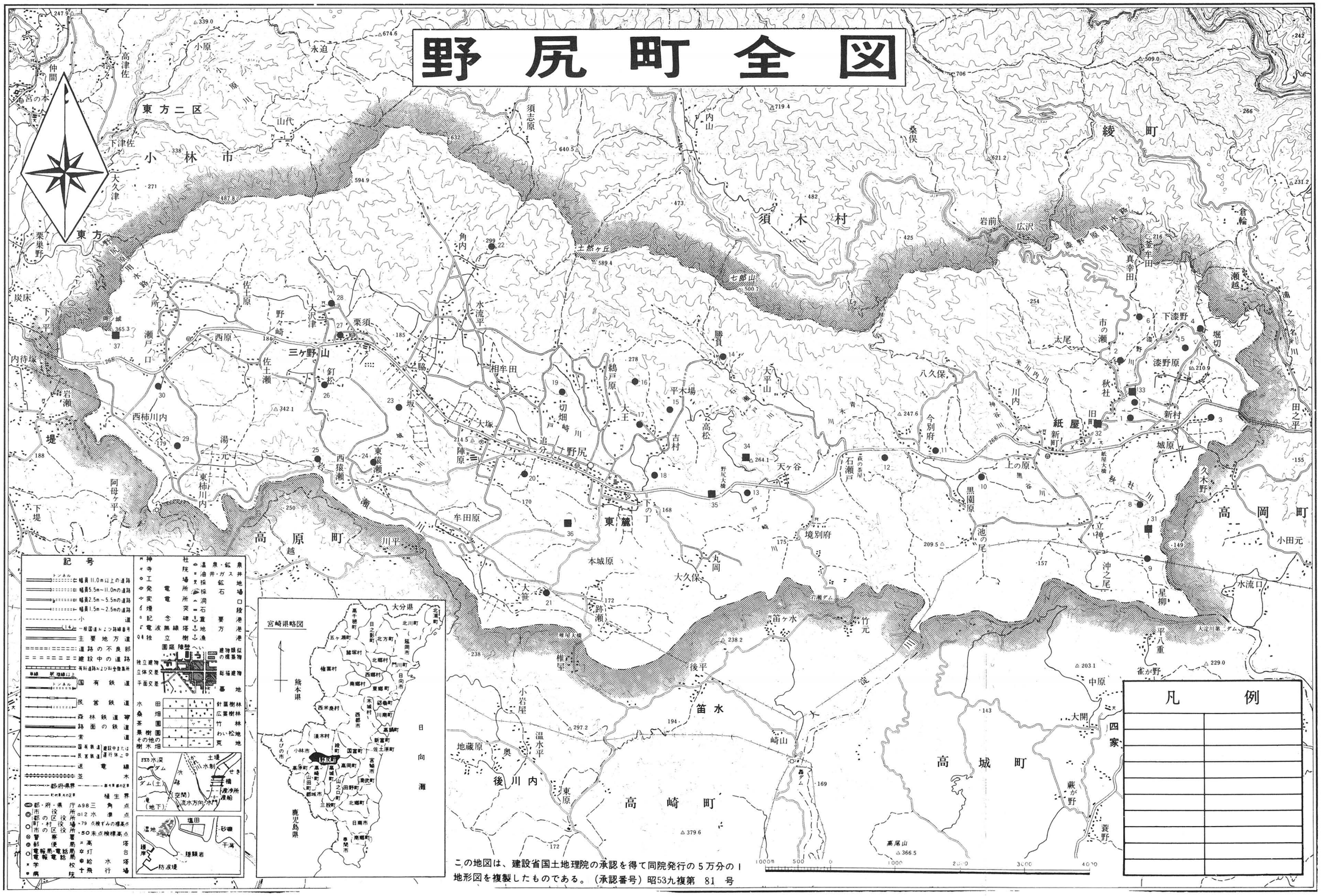
(6) 石川恒太郎「切畑地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書第20集』昭和53年

参考文献　日高次吉　「宮崎県の歴史」吉川弘文館　昭和45年

石川恒太郎「宮崎県の考古学」　〃　昭和43年

野尻町教育委員会「野尻町の文化財」　昭和57年

野尻町全図



野尻町内遺跡位置図

新村遺跡・高山遺跡

本　文　目　次

第１章　新村遺跡 …… 7
　第１節　調査の概要 …… 7
　　１．遺跡の立地と概要 …… 7
　　２．包含層の状態 …… 9
　第２節　遺構と遺物 …… 10
　　１．縄文時代の遺構と遺物 …… 10
　　２．旧石器時代遺構と遺物 …… 15

第２章　高山遺跡 …… 18
　第１節　調査の概要 …… 18
　　１．遺跡の立地と概要 …… 18
　　２．包含層の状態 …… 20
　第２節　遺構と遺物 …… 23
　　１．縄文時代の遺構と遺物 …… 23
　　２．旧石器時代遺構と遺物 …… 33

第３章　ま と め …… 34

図　面　目　次

第１図　新村遺跡位置図 …… 7
第２図　新村遺跡発掘区全図 …… 8
第３図　新村遺跡土層断面図 …… 9
第４図　新村遺跡集石遺構実測図 …… 10
第５図　新村遺跡遺構・遺物出土分布図（縄文時代） …… 11
第６図　新村遺跡出土土器 …… 13

第７図　新村遺跡出土土器・石器（縄文時代）…… 14
第８図　新村遺跡遺物出土分布図（旧石器時代）…… 16
第９図　新村遺跡出土石器　（　〃　）…… 17
第10図　高山遺跡位置図 …… 19
第11図　高山遺跡発掘区全図 …… 19
第12図　高山遺跡土層断面図 …… 20
第13図　高山遺跡遺構・遺物分布図（縄文時代）…… 21
第14図　高山遺跡出土土器分布図（種類別）…… 21
第15図　高山遺跡集石遺構 (1) …… 24
第16図　高山遺跡集石遺構 (2) …… 25
第17図　高山遺跡出土土器 (1) …… 26
第18図　高山遺跡出土土器 (2) …… 27
第19図　高山遺跡出土土器 (3) …… 28
第20図　高山遺跡出土土器・石器（縄文時代）…… 29
第21図　高山遺跡出土土器分布図（種類別）(2) …… 32
第22図　高山遺跡８号集石遺構（旧石器時代）…… 33

表　目　次

表１　新村遺跡出土土器観察表 …… 39
表２　高山遺跡出土土器観察表 …… 41

図　版　目　次

図版１　新村遺跡遠景（東から）…… 45
　　新村遺跡発掘区全景（北から）…… 45
図版２　新村遺跡土層断面 …… 46
　　新村遺跡１号集石遺構 …… 46

図版３　高山遺跡土層断面 …… 47
高山遺跡１号集石遺構 …… 47
図版４　高山遺跡３号集石遺構 …… 48
高山遺跡４号集石遺構 …… 48
図版５　高山遺跡５号集石遺構 …… 49
高山遺跡６号集石遺構 …… 49
図版６　高山遺跡７号集石遺構 …… 50
高山遺跡８号集石遺構 …… 50
図版７　新村遺跡出土土器 …… 51
図版８　高山遺跡出土土器 (1) …… 52
図版９　高山遺跡出土土器 (2) …… 53
図版10　新村遺跡・高山遺跡出土石器 …… 54

第１章　新　村　遺　跡

第１節　調査の概要

１．遺跡の立地と概要

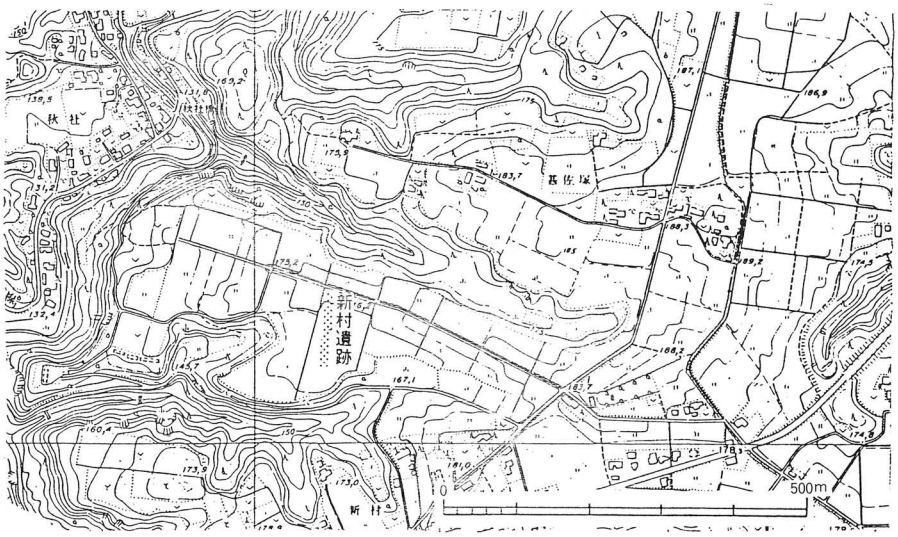
新村遺跡は、西諸県郡野尻町大字紙屋字新村に所在する。遺跡は、南九州特有のシラス台地が、大淀川の支流である秋社川の支流によって開析された台地の南側縁辺部に位置する。

遺跡の標高は175mで、川面からの比高差は約20mである。同時期に調査を行なった高山遺跡とは谷を挟んで南へ850mのところに位置する。

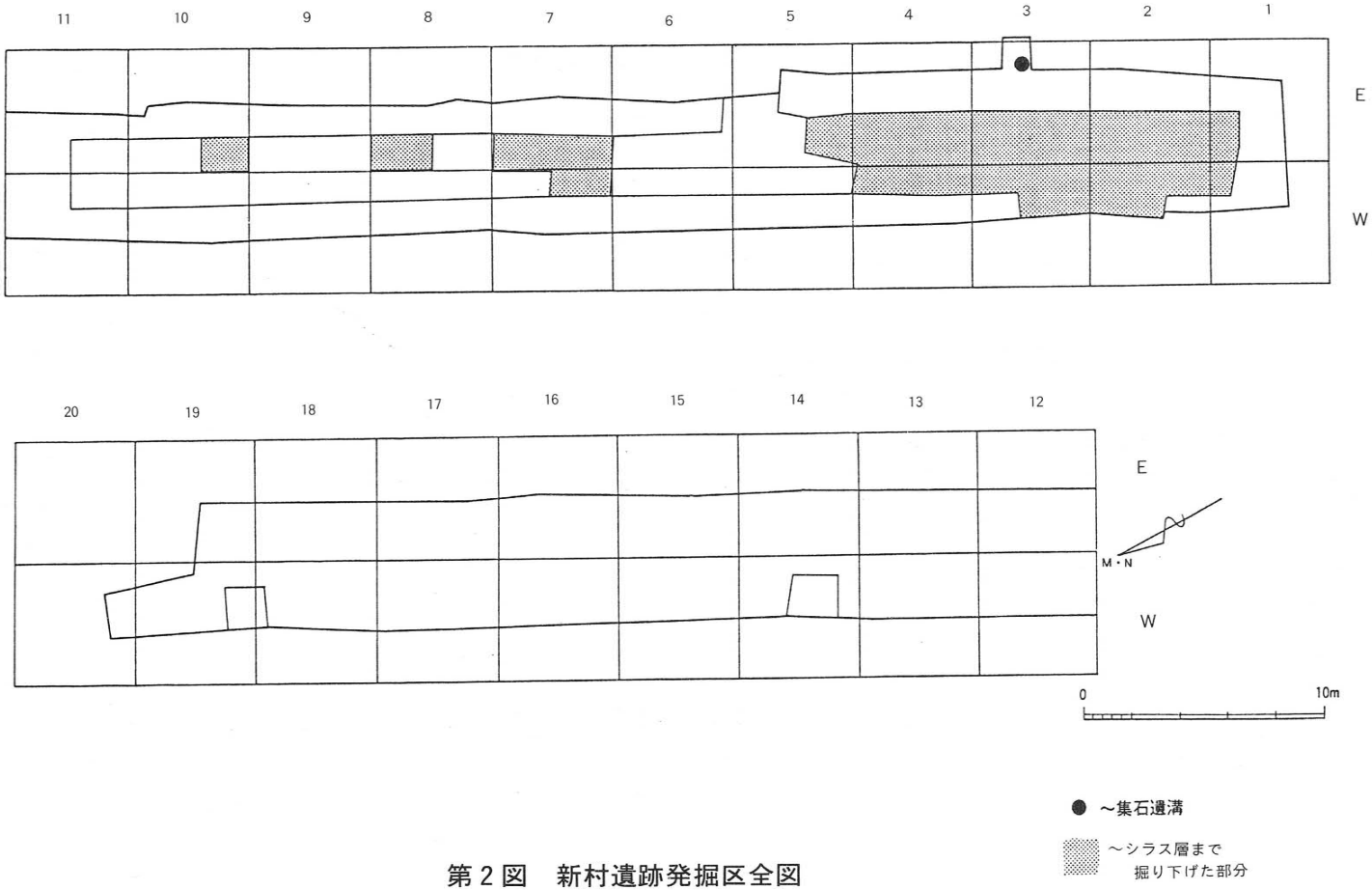
新村遺跡の調査区は、前年度の試掘調査の結果に基き協議を行ない、遺跡内を通る農道部分について行なわれることとなった。そのため、調査区は南北に約100m、東西に約５mの細長いものとなった。

調査は、試掘調査の結果に基き、まず最初に無遺物層と判断されるアカホヤ層の上面まで重機による掘り下げを行ない、遺構の確認を行なったところ遺構が確認されなかったので、再度アカホヤ層及びその直下の牛の脛ローム（通称・カシワバン）についてまで重機による掘り下げを行なった。

その後、調査区中央を縦断する形で、５m×５mのグリッドを設定し、南より1･2･3･･･12区とし、東側をＥ区、西側をW区として人力による掘り下げを行なった。



第１図　新村遺跡位置図



第２図　新村遺跡発掘区全図

その結果、調査区は西側からの谷部が入り込んできているため、中央部がやや低くなっており、南半部分に遺物の集中が見られた。そのため、遺跡の中心は台地の南側縁辺部に存在していると考えられる。

遺構としては、縄文時代早期の集石遺構が１基確認された。遺物としては、押型文土器や石鏃などが出土した。また、縄文時代の調査と並行して下層の状態を確認するため２ｍ×２ｍのトレンチを設定して掘り下げを行なったところ、シラス層（A.T.）の直上にやや黒褐色を帯びた土層が確認され、剥片・焼石が出土し、旧石器時代の包含層の存在が確認された。

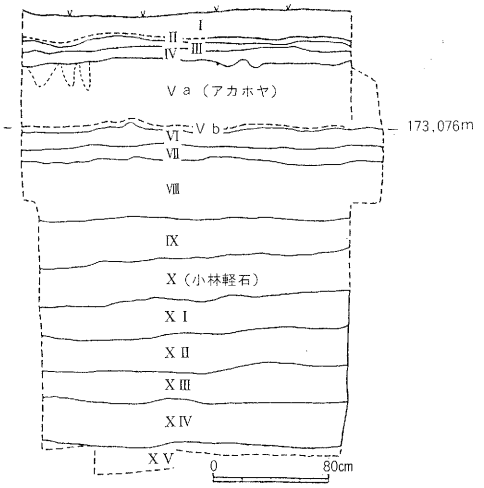
そのため、縄文時代包含層の調査終了後、遺跡の中心部があると思われる調査区南半部分について重機による掘り下げを行ない、旧石器時代包含層の調査を行なった。

その結果、１～３区に遺物の集中が見られ、ナイフ形石器・スクレイパーなどの石器とともに剥片・焼石が百数十点出土した。遺構は検出されなかった。

２．包含層の状態

新村遺跡の基本層序は第３図に示す通りである。第Ｉ層の耕作土（水田面）から第ＸＶ層のシラス層（A.T.）まで確認された。この中には、シラス（ＸＶ層）・小林軽石（Ｘ層）・アカホヤ（Ｖ層）の３種類の火山噴出物の堆積が見られた。

その中で、アカホヤと小林軽石の間の第Ⅷ層に縄文時代早期の包含層が確認され、また小林軽石とシラスの間の第ＸⅢ層下部から第ＸⅣ層上部にかけて旧石器時代の包含層の存在が確認された。



新村遺跡基本土層
Ｉ層～表土（耕作土）
Ⅱ層～水田面基盤層（鉄分を多く含む）
Ⅲ層～黒色土層
Ⅳ層～褐色硬質土層（ブロック状）
Ｖａ層～アカホヤ層
Ｖｂ層～アカホヤ層（粒子が粗い）
Ⅵ層～カシワバン（牛の脛ローム）
Ⅶ層～黒色土層
Ⅷ層～暗褐色硬質土層（縄文時代早期包含層）
Ⅸ層～褐色硬質土層
Ｘ層～小林軽石層
ＸＩ層～暗褐色土層（ブロックを含む）
ＸＩＩ層～暗褐色土層（ブロックを含まない）
ＸＩＩＩ層～褐色軟質土層
ＸＩＶ層～黒黄褐色土層
ＸＶ層～シラス層（やや黄味を帯びている）

第３図　新村遺跡土層断面図

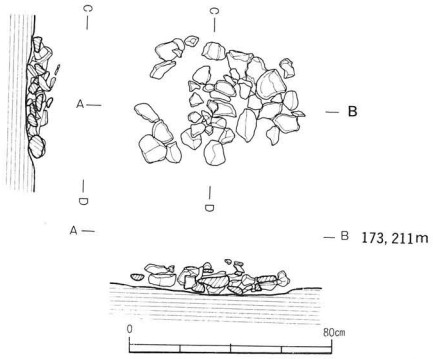
第２節　遺構と遺物

１．縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構・遺物は、全てアカホヤ層下位の第Ⅷ層を中心に検出・出土した。遺物の出土分布は第５図に見られるように、調査区の南半部分（１～11区）に集中しており、遺跡の中心は、この部分の周辺に広がるものと考えられる。

遺構（第４図）

遺構としては、３-Ｅ区において集石遺構が１基検出された。この集石遺構は、調査区に半分かかった状態で確認されたため、その部分だけ調査区を拡張して検出した。プランは、60cm×50cmでやや楕円形を呈し、火を受けたと思われる赤変した礫が集積されているだけで配石は確認されなかった。また、焼土面及び掘り込みも確認されなかった。



第４図　新村遺跡集石遺構実測図

集石遺構内より若干の炭化物と押型文土器が出土した。押型文土器は、山形押型文土器の胴部片で、ややくずれた山形押型文を横走させるタイプである。(第６図11)

遺物（第６・７図）

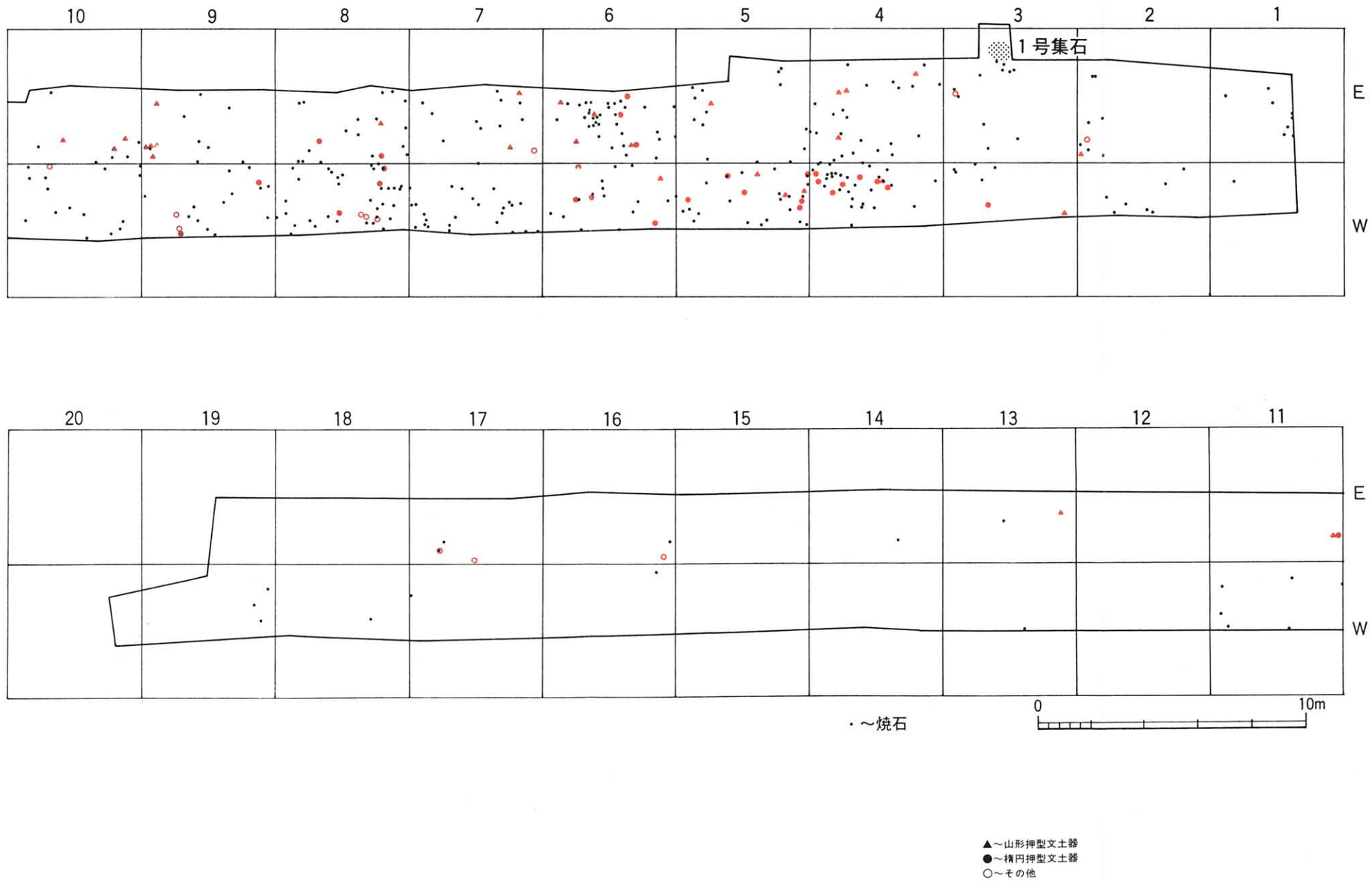
遺物としては、第５図で示すように焼石とともに、縄文土器及び石器が出土している。出土分布は集石遺構が検出された３区から11区にかけて集中がみられるが、その中でも４区から９区にかけていくつかのまとまりがみられ、集石遺構周辺にはまばらな状態である。

また、土器の接合関係については１のように４区と９区で接合するものも存在した。

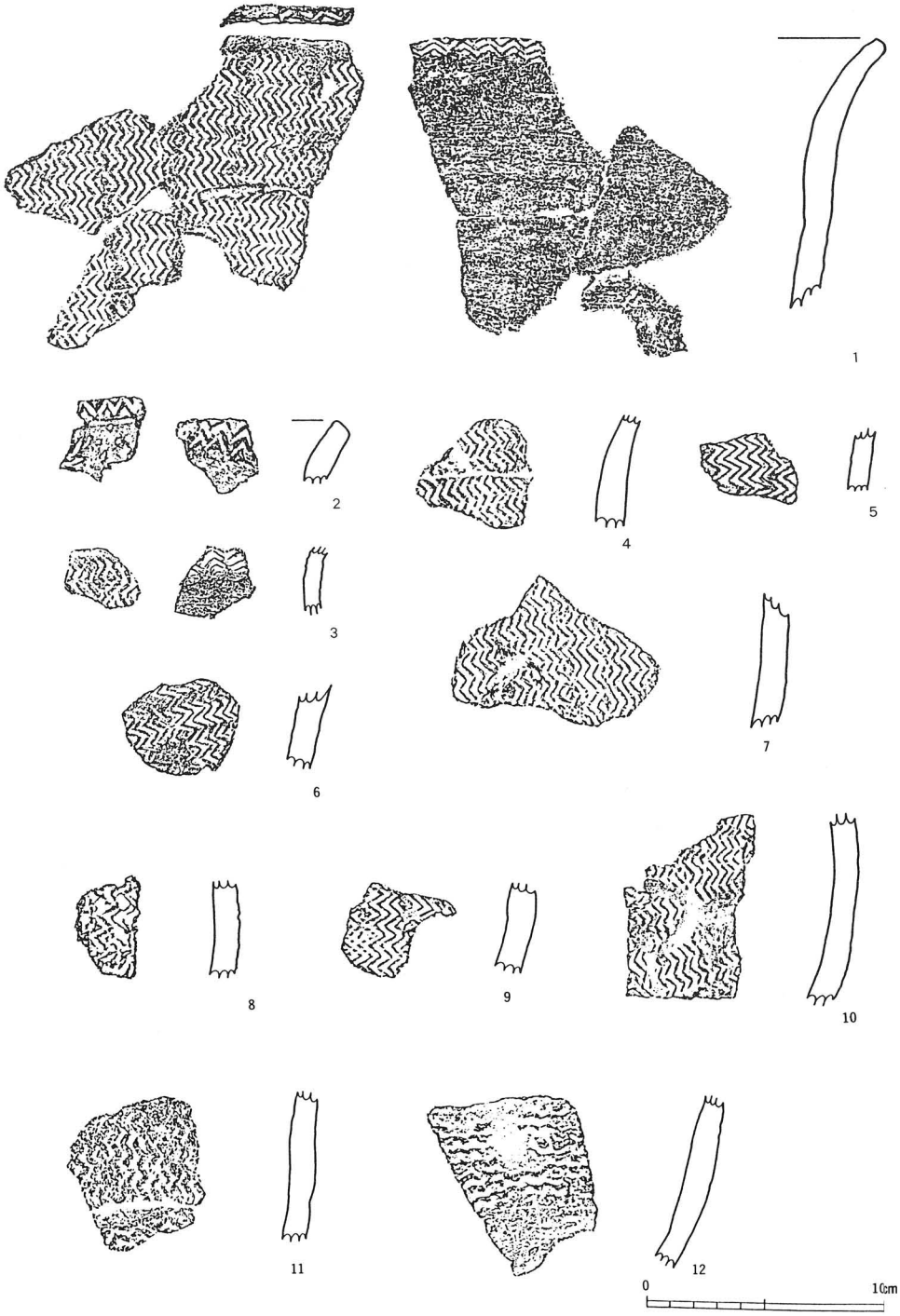
土器全体の出土量は多くなかったが、その大半は押型文土器で占められており、若干ではあるが撚糸文土器・貝殻文土器・細沈線文土器も出土している。

ここでは、出土土器の概要について記述し、個別には観察表を付した。

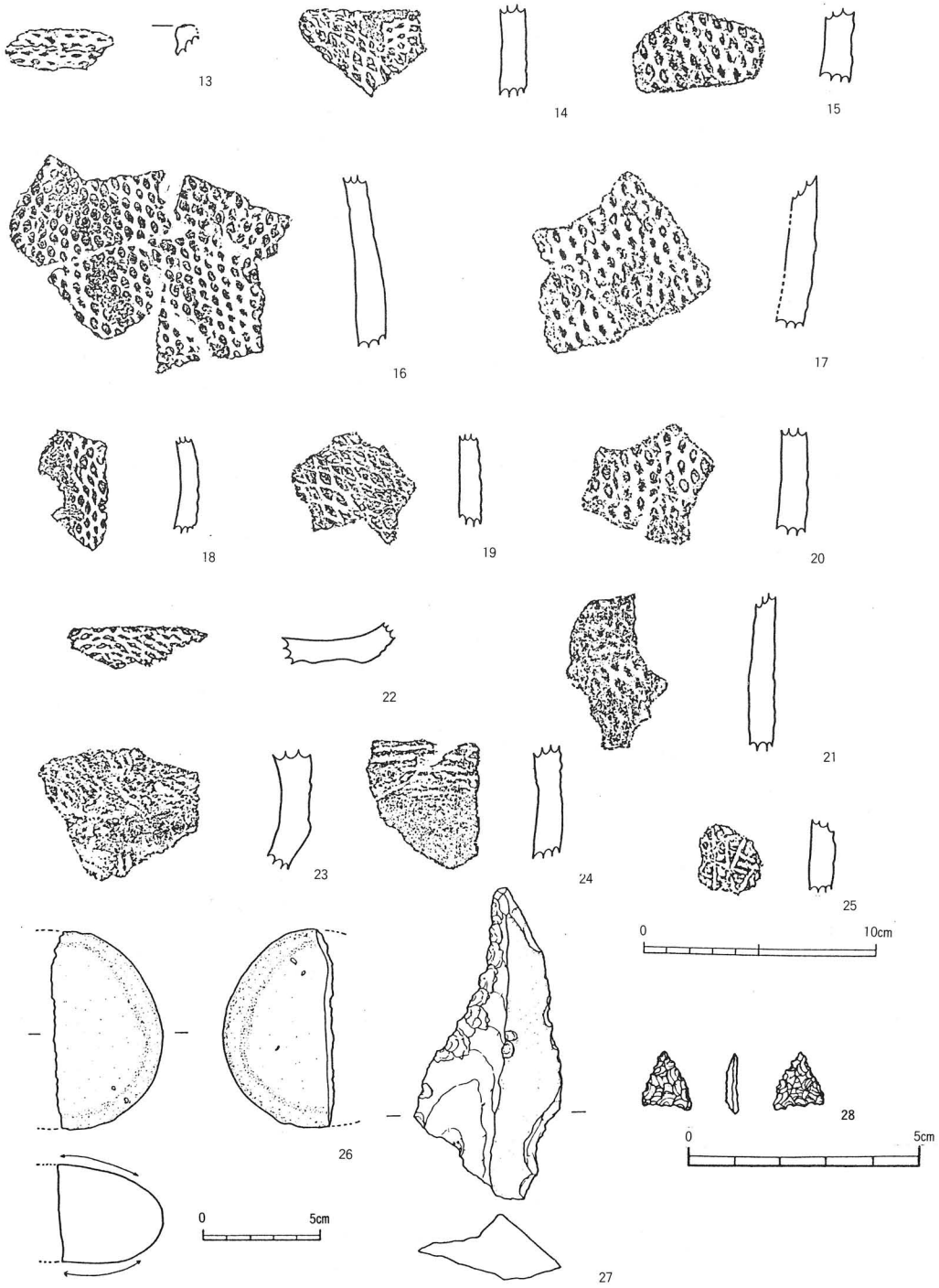
押型文土器は、山形押型文と楕円押型文に大別できる。山形押型文（１～12）は、４区・９区に多く出土し、特に１は４Ｅと９Ｅで接合し面的に広く分布している。口縁部は、外反し胴部は若干膨らむ器形を呈し(1)、口縁部の外側に狭い無文帯を持



第５図　新村遺跡図遺構・遺物分布図（縄文時代）



第６図　新村遺跡出土土器



第７図　新村遺跡出土土器・石器（縄文時代）

ち口唇部と口縁部の内面に山形押型文を横走するタイプである（1～3）。また、胴部外面の山形押型文はほとんど縦走させるタイプである（1･3～11）。なお、文様は概ね鋭意な山形押型文であるが、11・12のようにややくずれているものも見られた。

楕円押型文（13～22）は、４～６区と８・９区に主に出土している。口縁部（13）は、破片が小さく、形態までは判別できないが、口唇部及び口縁部内面に楕円押型文を施しており、山形押型文と同様の器形示す可能性も考えられる。

また、底部付近と思われる土器片（22）も出土している。外面が剥落しているため明確ではないが、内面の屈曲から考えて平底を呈すると思われる。

なお、文様は概ねしっかりと施文されており、数タイプに分類できるが、出土分布では明確に分類はできなかった。内面の調整にケズリを施しているものもある。焼成は良好でしっかりしている。

そのほか、撚糸文（23）・貝殻文（24）・沈線文（25）を施文している土器も出土しているが、破片であり、出土も少量であるため全体像は不明である。

石器（26～28）の出土量は少量である。

26は、磨石の破片である。直径8.5cm、厚さ4.2cmを計る。石材は、火成岩の１種と思われる。27は、尖頭状石器である。長さ14cm、厚さ2.8cmを計る。砂岩製の大型石器である。28は、黒曜石製の石鏃である。抉りは顕著ではなくほぼ三角形を呈している。長さは1.2cmを計る。

２．旧石器時代の遺構と遺物

旧石器時代の包含層は、シラス（A.T.）層の直上にあたる第XⅣ層を中心に確認された。

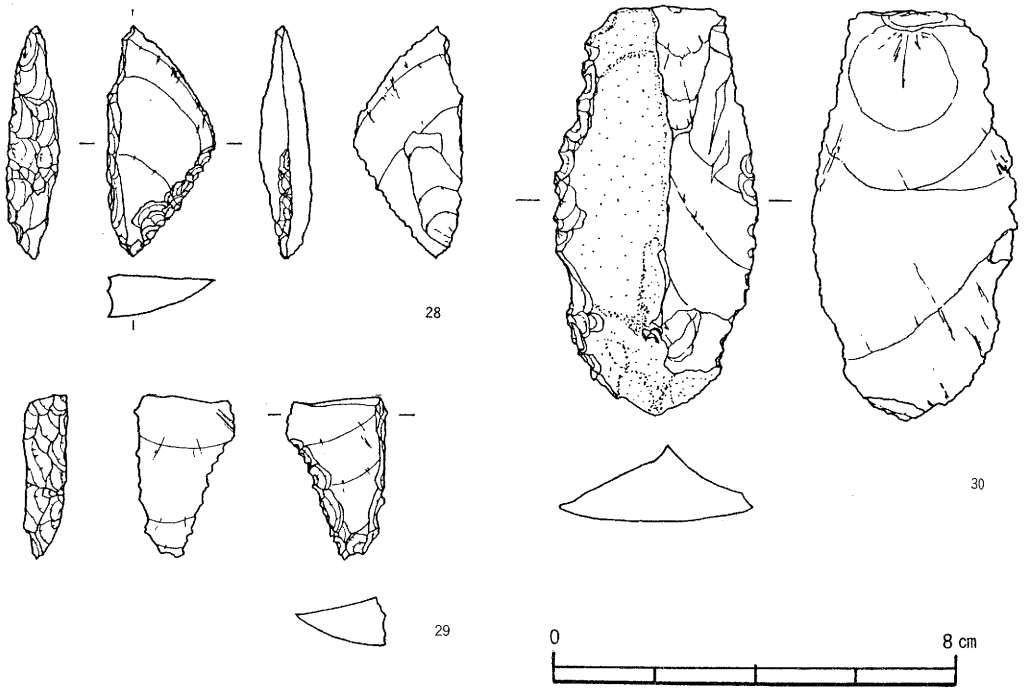
遺物としては、石器及び剥片・チップ等が出土した。遺物分布は、１～４区に集中が見られ、その中でも２・３-W区に集中が見られる。また、垂直分布では明確なレベル差は確認できず、ほぼ同一時期のものと考えられる。

なお、出土した剥片の大半の石材は頁岩であったが、その他流紋岩や砂岩や砂岩質ホルンフェルスなども少量ではあるが出土していることが確認された。

このように、石材や分布等から、いくつかのブロックが存在すると考えられるが、発掘範囲が限定されていたため、それらを明確に判別するには至らなかった。また、明確な遺構も検出されなかった。

石器は、ナイフ形石器及びスクレイパーが出土している。その他、剥片の中にも

第８図　新村遺跡遺物出土分布図（旧石器時代）　○～石器　●～剥片・チップ



第９図　新村遺跡出土石器（旧石器時代）

使用痕のある剥片や二次加工を施した剥片等も数点出土している。

１・２はナイフ形石器である。両者とも二側縁加工が施されているもので、１は２-W区の発掘区の壁面より出土したもので、長さ4.6cm、幅2.1cm、厚さ0.8cmを計る。２は３-W区出土のもので刃部が欠損しており、全長3.1cm、幅1.9cm、厚さ1.0cmを計る。幅と厚さより考えれば１とほぼ同じ大きさのものと思われる。

３は自然面を残した剥片に二次加工を施したスクレイパーである。４-W区出土で長さ8.2cm、幅3.9cm、厚さ1.5cmを計る。１～３ともに頁岩製である。

（注）石材について概報では、流紋岩として報告していたが、県文化課の宍戸章氏の御教示により頁岩であることが判明した。なお、剥片の中には流紋岩製のものも存在した。

第２章　高山遺跡

第１節　調査の概要

１．遺跡の立地と概要

高山遺跡は、西諸県郡野尻町大字紙屋字高山に所在する。遺跡は、前述の新村遺跡と同様に南九州特有のシラス台地が、大淀川の支流である秋社川の支流によって開析された台地の南側縁辺部に位置する。台地下の谷沿いには県道奈生木高岡線が走り須木村内山へと続いている。

遺跡の標高は約170mで川面からの比高は約15mである。遺跡は谷部から上る道が台地上に出たところに位置している。新村遺跡とは、谷を挟んで北へ約850mの所に位置している。

本遺跡は、前年度実施された分布調査の結果、周辺の畑から縄文土器等が表面採集されて遺跡であることが確認された。協議の結果、今回の調査区は現在道路として使用されている面と拡張予定の畑部分について設定し調査を開始した。

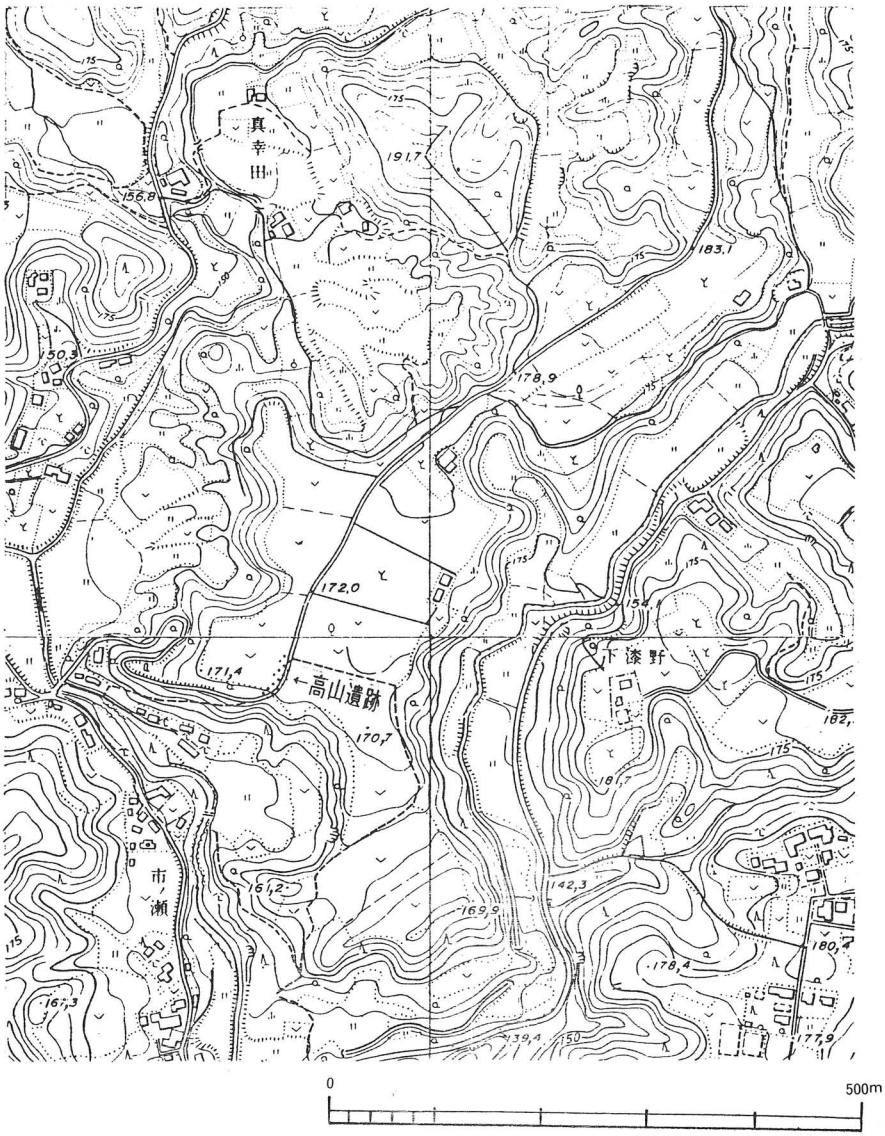
まず、２ｍ×５ｍのトレンチを設定し掘り下げを行なった所アカホヤ上層より遺物等が確認されず、また道路部分についてはアカホヤ層が存在していないことが判明したので、畑部分についてはアカホヤ層まで、道路部分については撹乱層について重機による掘り下げを行なった。

調査区は新村遺跡同様、南北に約50m、東西に約７ｍで南北に長いため調査区中央に杭を打ち５ｍ×５ｍのグリッドごとに掘り下げを行なった。

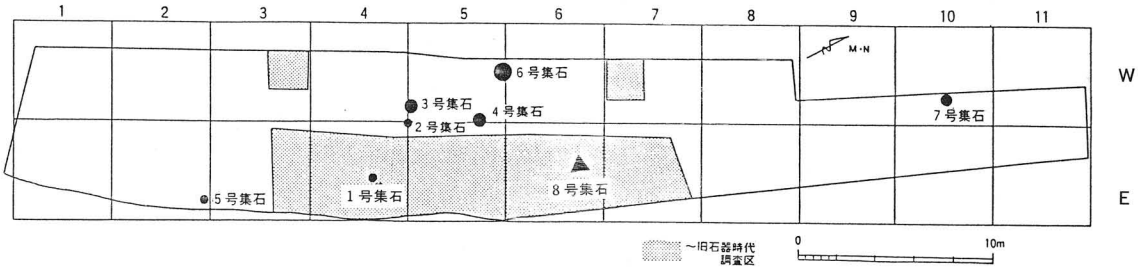
その結果、農道部分では若干削平を受けている部分も存在したが、アカホヤ層下層より焼石に伴って縄文時代早期の押型文土器を主体とする土器群や石器等が出土した。また、これらの遺物に伴なって集石遺構が７基検出された。

また、縄文時代の包含層の調査と並行して２ｍ×２ｍのトレンチを設定しシラス層までの確認を行なったところ、新村遺跡同様シラス層の上層よりの剥片が出土したので３～７-Ｅ区を重機による掘り下げを行なった後、手作業に切り換えて調査を行なった。

その結果、旧石器時代の集石遺構１基と剥片や少量ではあるが炭化物が出土した。



第10図　高山遺跡位置図

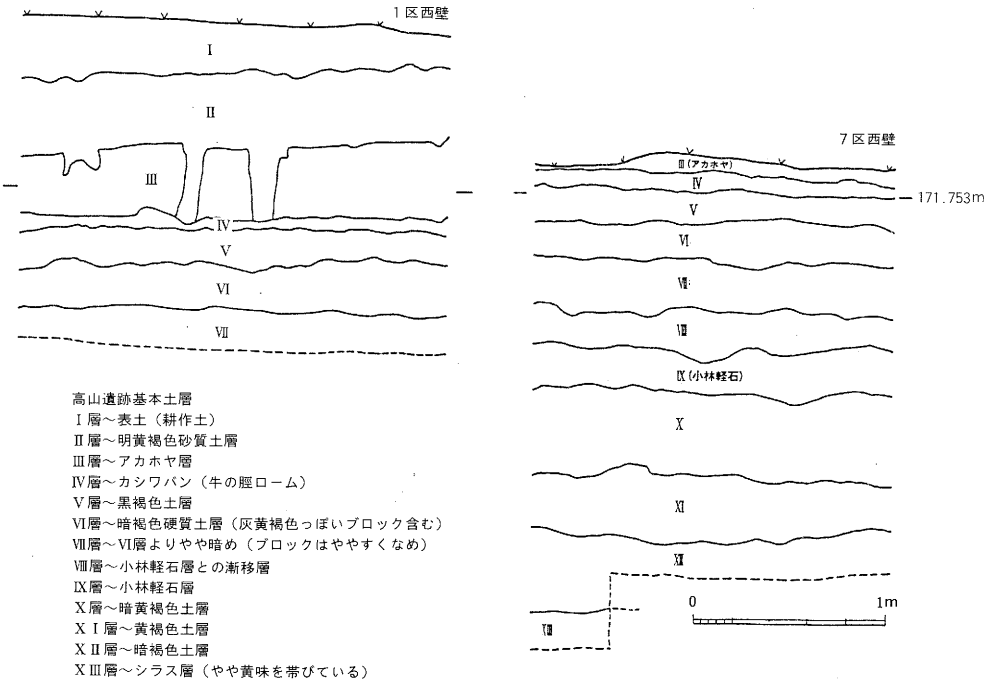


第11図　高山遺跡発掘区全図

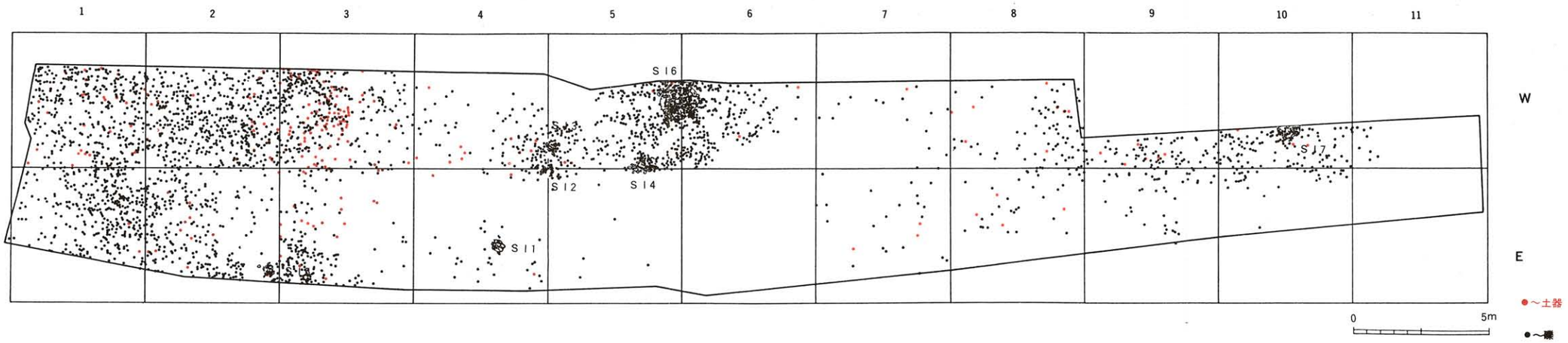
2．包含層の状態

高山遺跡の基本層序は第12図に示す通りである。Ⅰ層～耕作土、Ⅱ層～明黄褐色土層、Ⅲ層～アカホヤ層と続き、アカホヤ上層が新村遺跡とは若干異なるが、アカホヤ下層については堆積量の差があるほかは、ほぼ同一の層序を示しており、小林軽石・シラス（A.T.）の火山灰層も存在している。

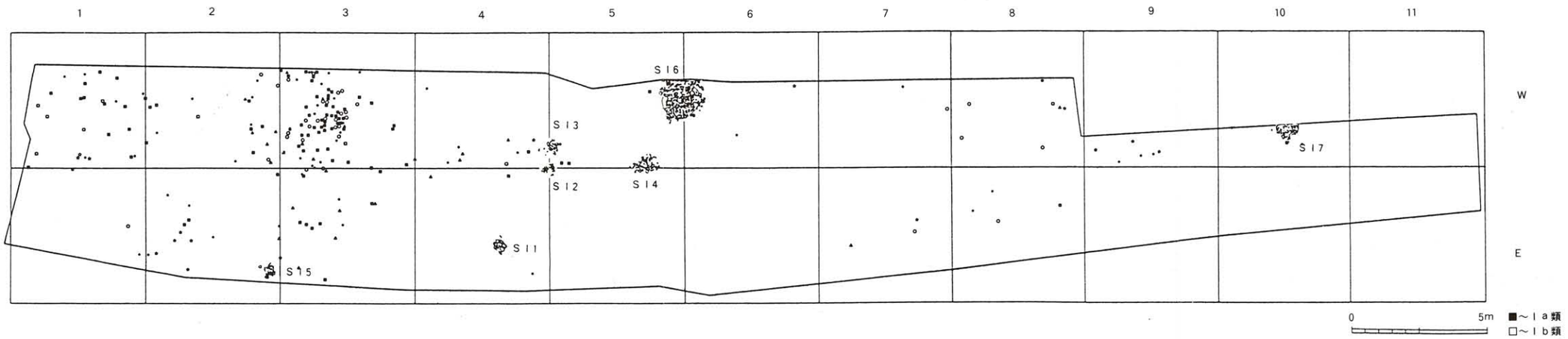
また、遺物包含層もアカホヤ層と小林軽石層の間の第Ⅴ層～第Ⅵ層にかけて縄文時代早期の包含層が存在しており、小林軽石層とシラス層の間の第ⅩⅠ層～第ⅩⅡ層にかけて旧石器時代の包含層の存在が確認された。



第12図　高山遺跡土層断面図



第13図　高山遺跡遺構・遺物分布図（縄文時代）



第14図　高山遺跡土器出土分布図（種類別）

第２節　遺構と遺物

１．縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構と遺物は、新村遺跡同様アカホヤ層下位の第Ⅴ層下部から第Ⅵ層にかけて焼石及び土器・石器が出土し、それらの遺物に伴ない集石遺構が７基確認された。

遺構（第15・16図）

集石遺構は５区を中心に１～４・６号集石が分布し、これらとやや離れた形で２-Ｅ区に５号集石、10-W区に７号集石が分布している。また、集石遺構のうち１・６・７号集石は掘り込みを有するが、その他の集石遺構では掘り込みや配石等の痕跡は見られなかった。

ＳＩ１（第15図）　４-Ｅ区で検出された集石遺構である。直径50cmの円形プランを呈し、掘り込みを有する。底面に１枚の扁平な人頭大の石を置き周辺に花弁状に石を配したものである。現在使用されている道路面の撹乱層直下に存在していたため集石遺構の直上まで削平を受けており、上部に焼石の集積が存在していた可能性も考えられる。

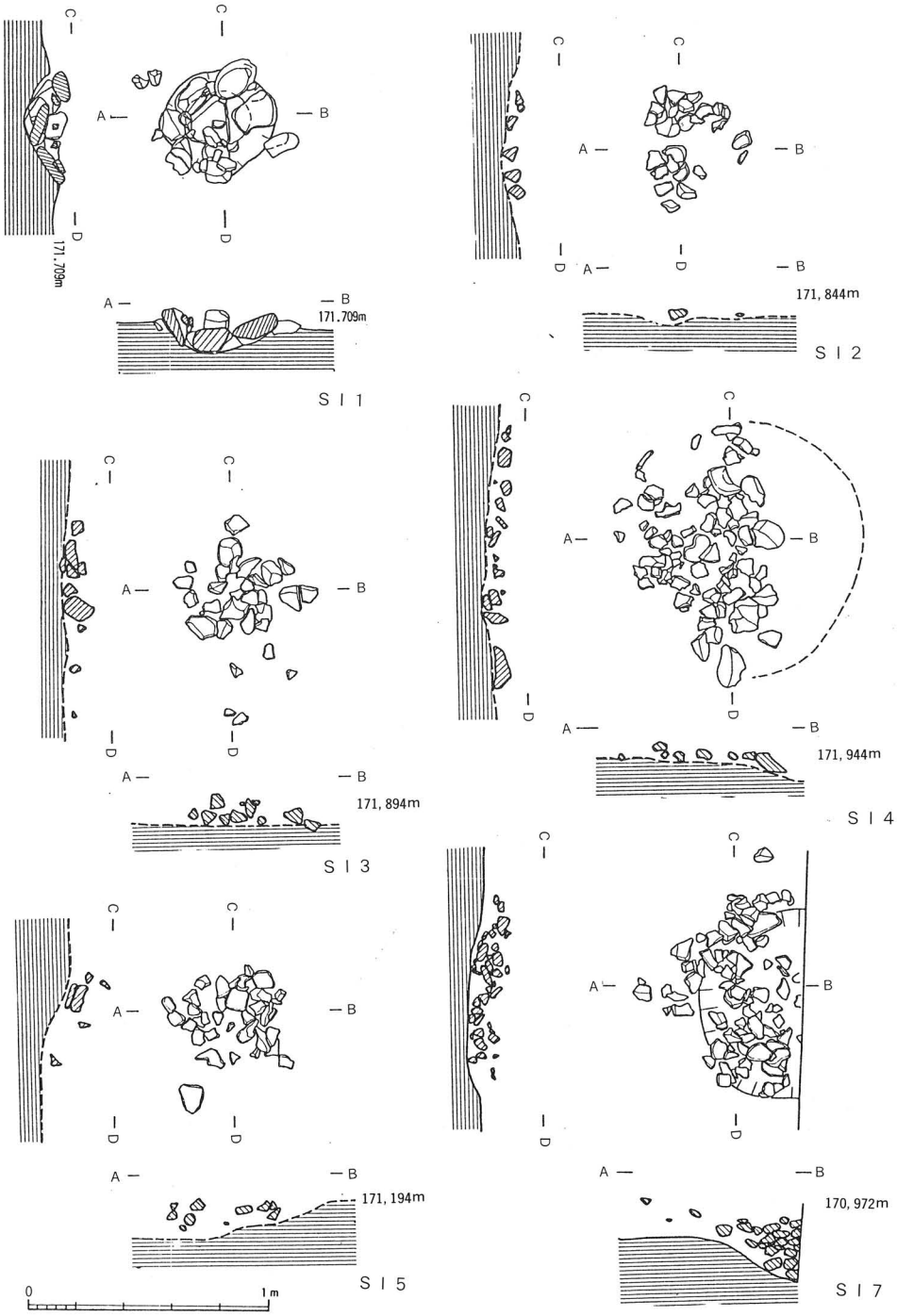
ＳＩ２（第15図）　４・５-Ｅ・W区の接点で検出された集石遺構である。全長50cmの略三角形状に拳大程度の石を集積したものである。掘り込みなどは確認されなかった。

ＳＩ３（第15図）　４・５-W区の境目で検出された集石遺構である。ＳＩ２に近接して存在するが、ＳＩ２よりやや大きめの石を集積したもので直径70cmの円形プランを呈する。石も重なりあった状態ではあったが掘り込みなどは確認されなかった。

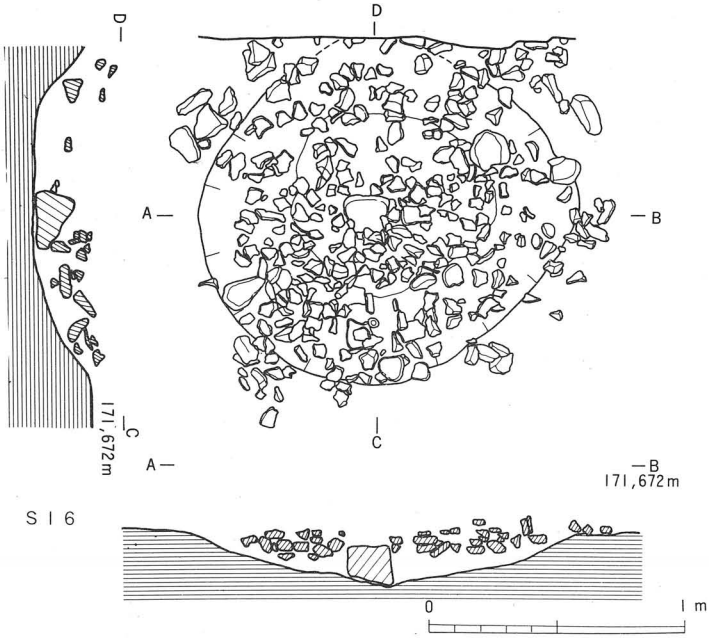
ＳＩ４（第15図）　５-W区で検出された集石遺構である。直径110cmの半円形状に石が集積したものである。道路部分に東半分がかかっているため削平されたと思われる。石は中心部にやや大きめの石が存在するものであるが、掘り込みなどは確認されなかった。

ＳＩ５（第15図）　２-Ｅ区で検出された集石遺構である。直径50cmを計る円形プランの中に、石がやや立体的に集積しているものである。明確な掘り込み等は確認されなかった。

ＳＩ６（第16図）　５・６-W区の境界部分で検出された集石遺構である。直径150cmの円形プランを呈するもので、本遺跡の集石遺構の中では最大規模のものである。



第15図　高山遺跡集石遺構 (1)



第16図　高山遺跡集石遺構 (2)

確認面からの深さ20cmを計る掘り込みを有する。掘り込み内には小型の石が集積されており、その中央底面には大型の石が１個確認された。なお、周辺の石の集積状態に規則性は認められなかった。

ＳＩ７（第15図）　10-W区で検出された集石遺構である。発掘区の境界に位置するため西半分は未発掘である。直径80cmの円形プランを呈しており、確認面からの深さ20cmを計る掘り込みを有する。拳大程度の扁平な石が集積されており、配石は確認されなかった。

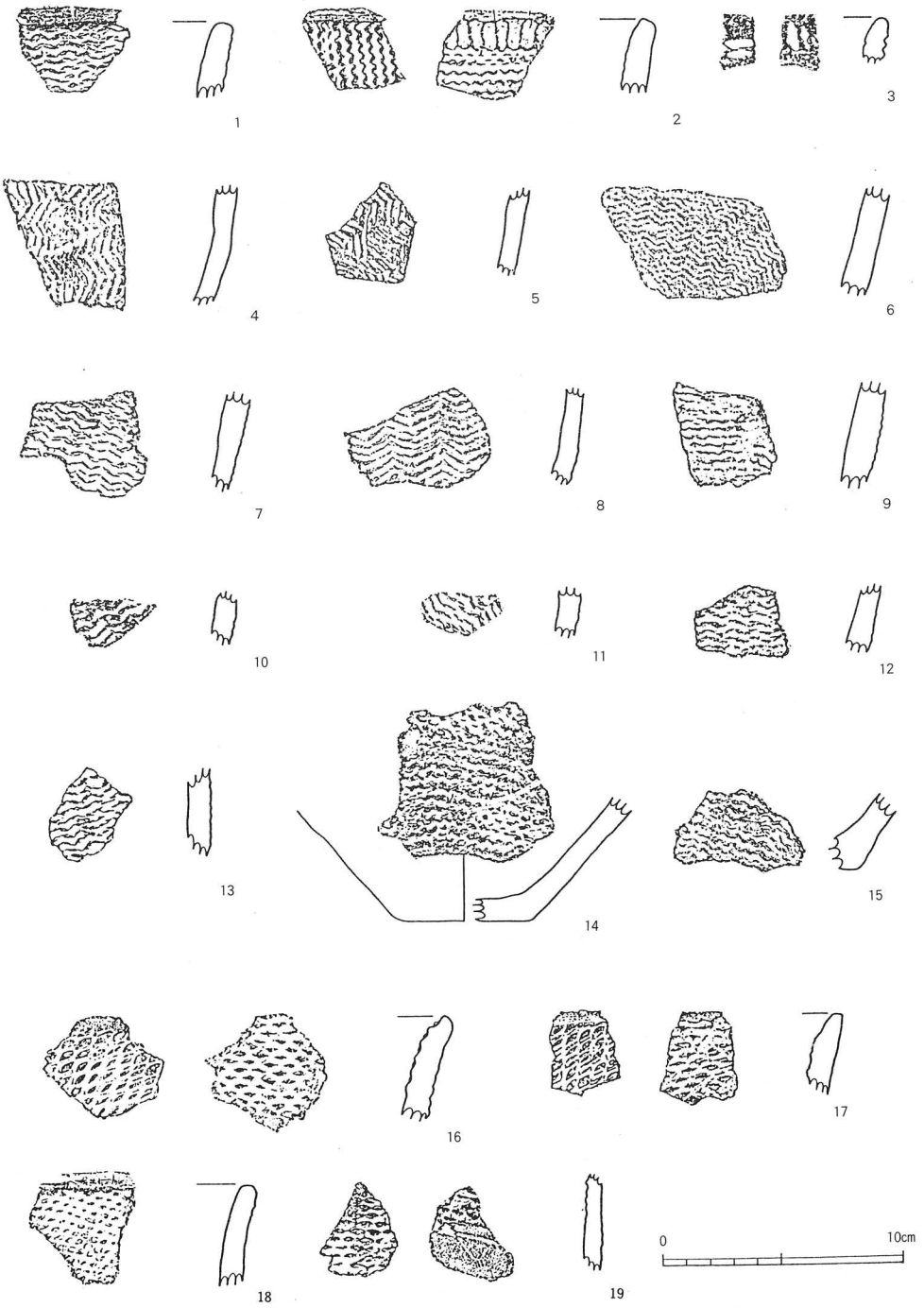
遺物（第17～20図）

遺物としては第13図で示すように焼石とともに縄文土器及び石器が出土している。

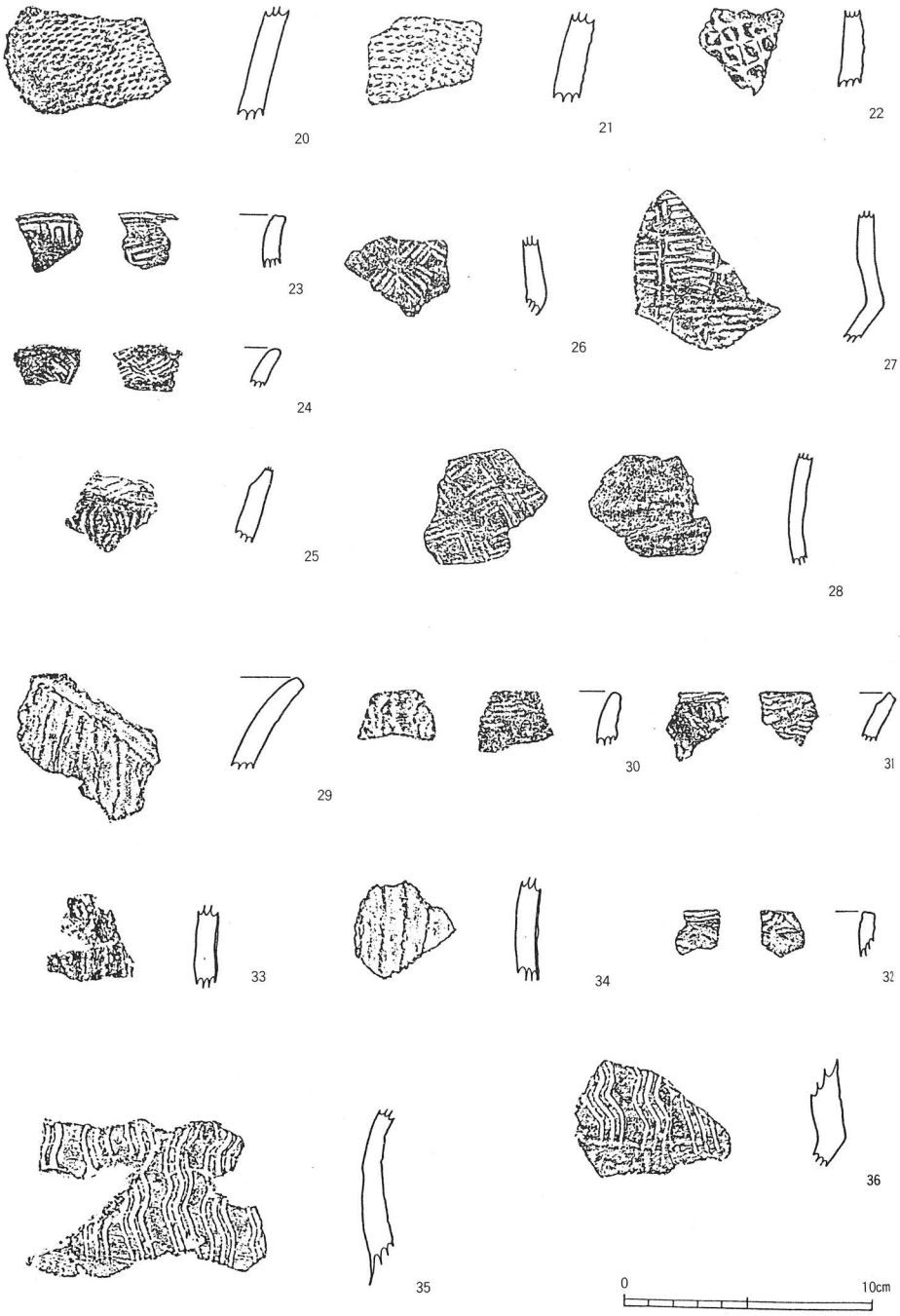
焼石の分布は集石遺構周辺と１～３区の台地縁辺に向かってやや傾斜している部分に特に集中が見られた。なお、５・６-Ｅ区は現道路面にあたり削平を受けていたため焼石が散在する程度であった。

これらの焼石の分布の中で、土器は全体的に出土したが、集石遺構からやや離れた１～３区の南側部分に集中が見られ、特に３-W区に集中が見られた。出土量は、焼石の約５％程度であった。

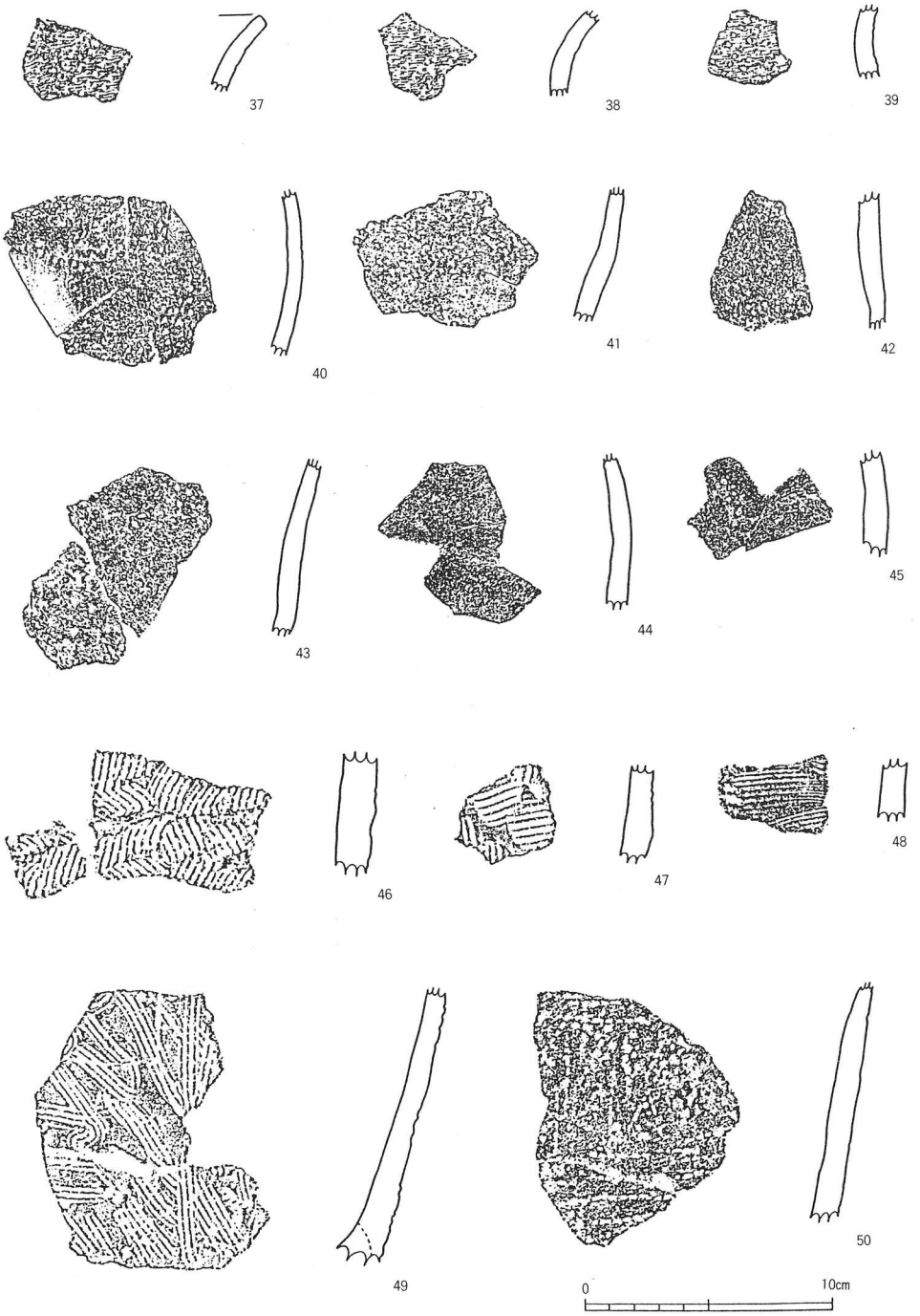
これらの土器は、概ね押型文土器と貝殻文土器に大別できるが、そのほかみみず腫れ状の突帯を有するものや縄文や撚糸文を施文するものも出土している。ここでは、出土土器を種類ごとに分類し、その概要についての記述を行ない、個々には別に観察表を付した。



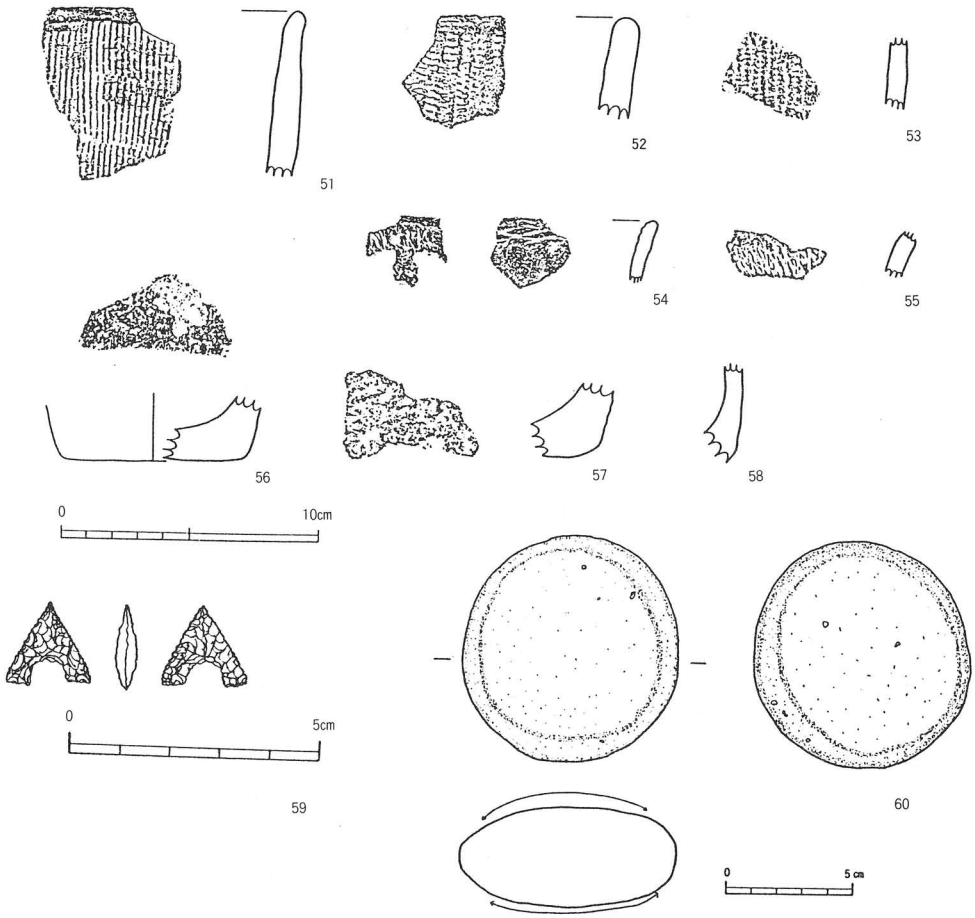
第17図　高山遺跡出土土器（1）



第18図　高山遺跡出土土器 (2)



第19図　高山遺跡出土土器 (3)



第20図　高山遺跡出土土器・石器（縄文時代）

Ⅰ類（1～28）

押型文土器である。文様の種類により細分した。

Ⅰａ類（1～15）

山形押型文を施文するものである。発掘区全体に出土するが、特に1区と3区に分布の中心が見られる。1～3は口縁部である。1・3は横方向、2は縦方向に山形文を施文するものである。2・3は口縁部内面に短い原体刻文を有し、2ではその下部に山形押型文が施文されている。14・15は底部で平底を呈するタイプである。

また、文様では、やや長い単位の山形文（4・5・8・10～13）と短い単位の山形文（2・14）など数種類が存在しているようである。

Ⅰｂ類（16～22）

楕円押型文を施文するものである。1～3区で出土しているが、特に1-E区に分布の中心が見られる。16・17は口縁部で、内面に楕円押型文を施文するタイプである。原体刻文を施すものは確認されていない。文様的には、小型の楕円文を施すタイプが多いが、大型のものも少量ではあるが出土している。

Ⅰc類（23～28）

菱形及び長方形の押型文を施文するものである。2～4区で出土しているが、特に2・3-W区の土器集中部分に分布の中心が見られる。23・24は口縁部である。口縁部内面に外面と同様の押型文が施されている。27で見られるように胴部中半で屈曲するタイプである。全体的に薄手で調整も丁寧である。また、押型文は浅く施文されている。

Ⅱ類（29～34）

土器の外面にみみず腫れ状の突帯を施文するものである。2～4区と7・8区で出土しているが、2～4区に分布の中心が見られる。29～32は口縁部である。31・32のように口縁部内面に突帯や押型文を施文するものもある。器形は口縁部が外反し胴部中半で屈曲するタイプと思われる。

Ⅲ類（35・36）

土器の外面に3本単位の櫛描き状の沈線文を施文するものである。口縁部及び底部は出土していないが、胴部上半は外反し、胴部中半で屈曲するタイプである。

Ⅳ類（37～52）

貝殻により施文するものである。文様により細分した。

Ⅳa類（37～45）

貝殻による浅い押圧ないしは押し引き状の条痕を施文するものである。1～4区と7・8区で出土しているが、3-W区と7・8区に分布の中心が見られる。37は口縁部であり、外反するものである。底部片は出土していない。全体的に薄手で調整も丁寧である。

Ⅳb類（46～49）

貝殻による条痕で文様を施文するものである。遺跡全体に分布しているが、2-E区、8・9-W区に若干の集中が見られた。46～48は短い条痕を矢羽根状に施文するもので、46・47は厚手で内面の調整も粗い。49は長い条痕を流水状に施文したものである。底部付近でありやや直線的に外反する円筒形状の器形を呈すると思われる。

Ⅳｃ類（50）

貝殻刺突により連点文を施文するものである。1-W区より出土している。横方向の連点文の間に縦方向の鋸歯状の連点文を施文するものである。円筒形の器形を呈すると考えられる。

Ⅳｄ類（51・52）

貝殻による刺突文を施したものである。どちらも口縁部で、円筒形の器形を呈するものと思われる。出土量は少量である。

Ⅴ類（53）

縄文を施文するものである。4-W区の出土である。胴部の小片であるため全体形は不明であるが、色調はにぶい黄橙色を示し焼成は良好である。

Ⅵ類（54・55）

撚糸文を施文するものである。3・4区で出土しているが、出土量は少量である。54は口縁部であり、口縁部内面にも撚糸文が施されている。

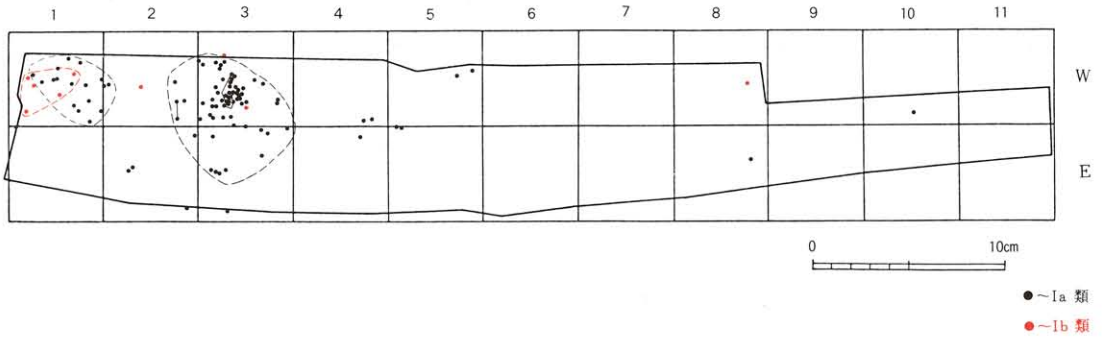
その他56～58は、底部片である。いずれも平底を呈するものである。

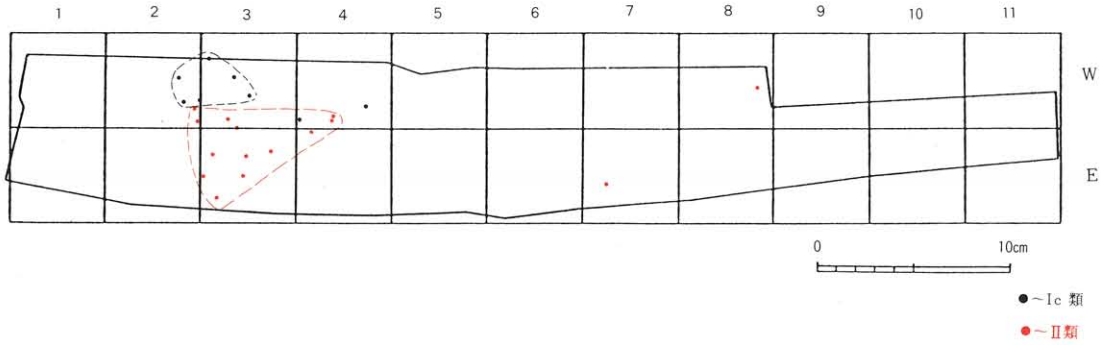
また、これらの分類した土器の他にも無文や器面の風化が著しく分類できない土器片も多数存在した。

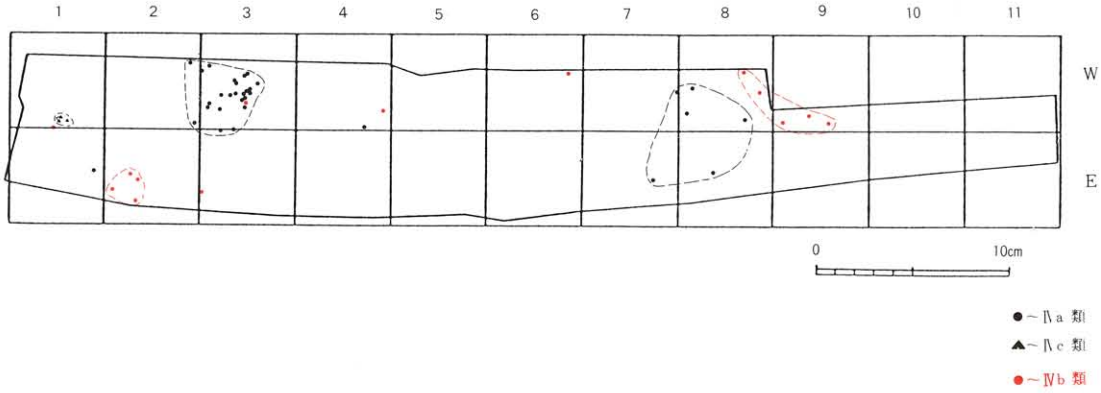
石器（59・60）

石器は土器に較べると出土量は少ない。59は石鏃である。正三角形を基調にした抉りの大きい鍬形鏃である。漆黒で良質の黒曜石製である。1-W区出土で、長さ1.6cm、幅1.7cm、厚さ0.4cmを計る。60は磨石である。1-W区出土で、直径8.5cm、厚さ4cmを計る円形の扁平なタイプである。石材は遺跡内に多く見られる砂岩ではなく火成岩の1種であろうと思われる。このほかチャート製の石鏃の残欠や剥片・チップ等も出土している。

（注）51については、概報で押型文土器として報告していたが、類例等を検討した結果今回貝殻文土器として分類した。







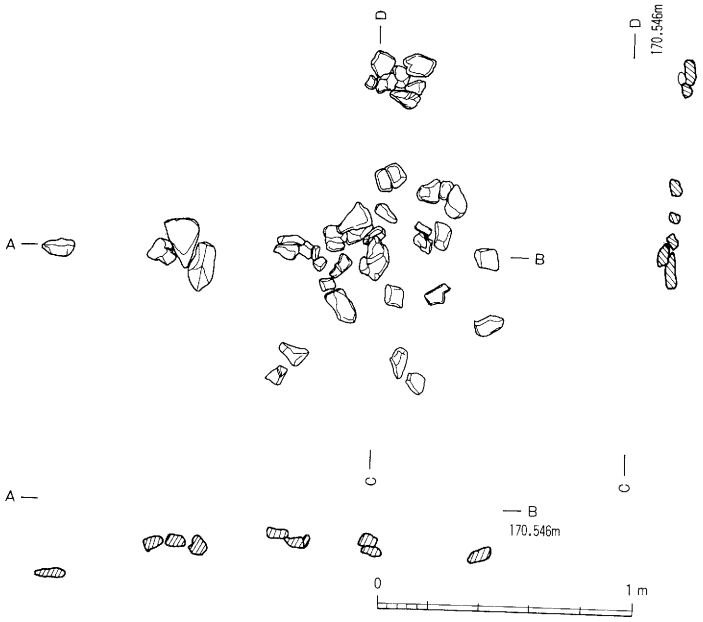
第21図　高山遺跡出土土器分布図（種類別）(2)

2．旧石器時代の遺構と遺物

旧石器時代の遺構と遺物は新村遺跡同様シラス（A.T.）層（XⅢ層）直上の第XⅠ～XⅡ層で確認された。

遺構としては、6-E区で集石遺構（SⅠ8）が検出された。シラス層直上で検出されたもので、1m×1.5mの範囲の中に赤変した扁平な石が集中している状態であり、掘り込みや配石等は認められなかった。構成礫は縄文時代の集石遺構の構成礫に比べるとかなり赤変しており表面の風化も著しかった。

遺物としては、剥片やチップが数点と炭化物が数カ所で出土した。石器は確認できなかった。



第22図　高山遺跡8号集石遺構（旧石器時代）

第3章　ま　と　め

今回の新村遺跡・高山遺跡の調査では、両遺跡ともシラス層上層において旧石器時代の集石遺構や石器等が確認され、アカホヤ層下層において縄文時代早期の集石遺構とそれに伴なう押型文土器等が確認された。

旧石器時代

旧石器時代の遺構・遺物については、特に新村遺跡において、南九州特有の厚く堆積した火山灰層の中でシラス（A.T.約22,000前）層直上の安定した土層の中から二側縁加工のナイフ形石器を中心とする石器群が確認された。この石器群については、県南西部の諸県地方では初めての出土例であり、また限定された面積のため石器類の出土が少なく比較検討はむずかしいが出土層位やナイフ形石器の形態等から考えて赤木遺跡[1]（延岡市）等との比較検討が期待されるところである。なお、石材の大半は頁岩であったが、流紋岩等も若干含まれており、いくつかのブロックが存在すると考えられる[2]。

また、高山遺跡においては、新村遺跡と同様のシラス層直上より集石遺構が確認されている。旧石器時代の集石遺構は船野遺跡[3]（佐土原町）・堂地西遺跡[4]（宮崎市）などをはじめとして近年では百町原地区遺跡[5]（日向市）・地蔵ケ森遺跡[6]（延岡市）などで確認されており、いずれも掘り込み等をもたず、縄文時代早期の遺跡から検出される掘り込みをもつタイプとは異なることが指摘されているところである[7]。本遺跡の集石遺構も同様の傾向を示す。また、構成礫も縄文時代早期のものに比べると赤変・風化が著しく、この点についても今後検討していく必要があると考えられる。

なお、県内の旧石器時代遺跡の発掘調査は、近年かなり増加している傾向にあるが、堂地西遺跡[8]・金剛寺原遺跡[9]（宮崎市）・百町原地区遺跡[10]（日向市）・赤木遺跡[11]・地蔵ケ森遺跡[12]（延岡市）など県北部～県中部にかけての調査が中心であり、県南部特に諸県地方においては、厚く堆積した火山灰層により遺跡の確認もできない状態であると指摘されている[13]。本遺跡においても、旧石器時代の包含層は地表面から約3mの深さであった。しかし、この間にはいくつかの火山灰層が確認でき[14]、時期を考える上で指標になるとも考えられる。また、今回調査した2遺跡においては、厚い間層を挟んで縄文時代早期と旧石器時代の遺跡が立地しており、当時の遺跡の立

地やそれに関連する生業等の問題についても今後の検討課題であるが、縄文時代早期の遺跡立地と旧石器時代の遺跡立地との関連性については、今後遺跡を確認していく際には考えておかなければならない問題であろうと思われる。

縄文時代

縄文時代の遺構・遺物については、新村遺跡・高山遺跡ともアカホヤ層下層に包含層が存在しており、出土遺物等から考えて縄文時代早期のものと考えられる。

遺構としては、集石遺構が新村遺跡で１基、高山遺跡で７基検出されている。そのうち、高山遺跡の１・６・７号集石遺構は掘り込みを有するもので、特に１号集石は底面に扁平な川原石を配列したもので炉としての機能を有するものと考えられる。この集石遺構は県内でも数多く検出されており、１遺跡の中で十数基から多いところでは芳ケ迫第１遺跡や札ノ元遺跡[15]（田野町）のように百基を超える所も確認されている。これらの集石遺構については、形態分類や周辺礫との関係などについて論考されているところである[16]。

今回の調査では、集石遺構と礫群との関係について追求するため集石遺構の上部礫群に対してもポイントを落す作業を行なったところである。新村遺跡については、遺物の分布が少なかったため明確な関連は見受けられなかったが、高山遺跡においては、第13図で見られるように集石遺構の周辺 ― 特に６号集石遺構を中心とするグループと７号集石遺構を中心とするグループ ― と１～３区の南側の台地縁辺に向かって若干傾斜する部分の３ケ所に集中が見受けられた。また、土器については、集石遺構の周辺には集中が見られず、１～３区の南側の部分と、６号集石遺構と７号集石遺構との間の８・９区に集中が見受けられ、礫の分布とは違いが見られた。この分布の違いや１～３区の南側部分での遺物の集中等については、廃棄を含めての生活空間の設定等を考える上で興味ある資料を提供しているものと思われ、今後検討を加えなければならない課題である。

次に土器に関して見てみると、新村遺跡では数点の条痕文土器や撚糸文土器以外は押型文土器が主体をなしている。また、高山遺跡でも、貝殻条痕文土器や貝殻連点文土器等が新村遺跡よりは多種類に確認できるが、半分以上が押型文土器で占められている状況である。

この押型文土器は西日本各地に広域な分布圏を持つ土器である。九州内における押型文土器の研究については、現在のところ編年作業が進んでいるのが大分県を中

心とした東九州地域である。それによると、外面と口縁部内面に整然とした押型文を巡らし、器形は尖底で口縁部に直線的に開く「稲荷山式」→器形はそのままで口縁部内面に短い原体刻文が施文される「早水台式」→口縁部がゆるく外反し、押型文が縦方向施文へ変わる「下菅生B式」→口縁部が大きく外反し、胴部が張り、尖底・丸底・平底も見られ、文様は粗大な楕円押型文の縦方向施文と口縁部内面の原体刻文の長大化が見られる「田村式」→口縁部内面の原体刻文が消え、器形が長胴の深鉢状になり平底が主体を占める「ヤトコロ式」→口縁部が大きく外反し、頸部でしまり、若干の稜線を有し、底部は上げ底気味の平底を呈し、文様は種々多様に亙り口縁部内面に数列の押型文を施文するものもあり、押型文土器の最終末とされる「手向山式土器」への変遷が考えられている[17]。したがって、この編年に沿って両遺跡の押型文土器について見てみると、その施文方法や器形等から考えて押型文土器の中でも新しい特徴を見出すことができる。新村遺跡の土器群については、概ね一種類の押型文土器として捉えられるが、高山遺跡の土器群は、新村遺跡に見られる押型文土器に加えて手向式土器や貝殻文土器等が出土しており多様性がみられる。

分類別に見ていくと、Ⅰc類・Ⅱ類・Ⅲ類としたものは概ね手向山式土器に比定される。特に、Ⅱ類については、県内では耳截遺跡[18]（高鍋町）出土の土器に類似しており、Ⅰc類の菱形押型文土器については、陣ノ内遺跡[19]（宮崎市）に類例が見られるようである。また、Ⅰc類の長方形押型文としたものは、新東晃一氏によって同心円文押型文土器の一種として論じられており[20]、細分の可能性も考えられる。

しかし、これらの押型文土器については、地域性 — 特に南九州の場合は貝殻文土器との関係 — を考えて論じなければならないところであり、県内の縄文時代早期の土器について論考されている岩永哲夫氏は、押型文土器の底部について注目され、一ツ瀬川付近に文化圏の境界を設定されている[21]。今後、これらのことに留意しつつ検討しなければならないと考えられる。

つぎに、貝殻文土器について見てみると、Ⅳa類は鹿児島県中尾田遺跡の91類に類例が求められ、中尾田遺跡においては手向山式土器の中で捉えられているものである[22]。Ⅳb類については、桑ノ丸Ⅲ類[23]とされる土器に比定できると考えられる。この土器は、県内では田野町出土の完形品[24]があり、近接する野尻町内の東城原第2遺跡[25]でも出土しているものである。また、Ⅳc類としたものは鹿児島県下剥峰遺跡[26]出土の土器に類例が求められる。

このように分類して土器の出土分布を見ていくと第21図で示すとおりであり、手向山式土器は３区を中心に出土しており、楕円文・山形文の押型文土器については１区に分布の中心が見られるようである。また、貝殻文土器についても、Ⅳａ類は３-W区と７・８区に分布の中心が見られ、Ⅳｂ類については２-E区と８・９区に分布の中心が見られ、それぞれの種類で分布域に若干の差異が見られるようである。

この分布の差異については、色々な角度から検討されるべきものであるが、ここでは従来の研究成果を踏まえて時期差として捉えられるのではないかと考えておきたい。

以上のように、新村遺跡・高山遺跡においては縄文時代早期の押型文土器を主体とした土器群が確認され、特に高山遺跡においては礫群の分布や土器群の分布に特徴がみられ、今後この時期の遺跡を考えるうえで良好な資料になると考えられるものである。

（註）

(1) 永友良典「赤木遺跡」『延岡市文化財調査報告書』Ⅲ　延岡市教育委員会 1987

(2) 石材については県文化課穴戸章氏、石器については埋蔵文化財センター永友良典氏・県文化課　長友郁子氏より御教示を得た。

(3) 橘　正信「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢』3 1975

(4) 永友良典「堂地西遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第２集　宮崎県教育委員会 1985

(5) 緒方博文「百町原地区遺跡」『昭和63年度県営ほ場整備事業百町原地区工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』日向市教育委員会 1989

(6) 谷口武範「地蔵ケ森遺跡発掘調査について」『第３回埋蔵文化財講座資料』宮崎県総合博物館埋蔵文化財センター　1989

(7) 永友良典「各県（地域）の動向 ― 宮崎県 ―」『九州旧石器』創刊号　九州旧石器研究会 1989

(8) 註(4)に同じ。

(9) 註(7)に同じ。

(10) 註(5)に同じ。

(11) 註(1)に同じ。

(12) 註(6)に同じ。

(13) 小野信彦「宮崎県の旧石器時代研究史」『宮崎考古　石川恒太郎先生米寿記念特集号』上巻　宮崎考古学会 1989

(14) 文化課宍戸章氏の御教示による。

(15) 面高哲郎・寺師雄二「芳ケ迫第１・２・３遺跡・札ノ元遺跡」『田野町文化財調査報告書』第３集　田野町教育委員会　1986

(16) 岩永哲夫・菅付和樹「宮崎県内の集石遺構(1)」『九州考古学』58　九州考古学会 1983
安部祥人他「縄文遺跡における『礫』の考古学的位置づけ」『古代文化』36-12
桒畑光博「宮崎県の縄文時代研究史」『宮崎考古　石川恒太郎先生米寿記念特集号』上巻　宮崎考古学会 1989

(17) 大分県『大分県史』先史編Ⅰ 1983

(18) 茂山　護「児湯郡高鍋町の縄文土器」『宮崎考古』第２号　宮崎考古学会　1977

(19) 永友良典「陣ノ内遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第４集　宮崎県教育委員会 1988

(20) 新東晃一「同心円文押型文土器」『南九州縄文研究通信』No.1　1987

(21) 岩永哲夫「九州東南部における縄文早期遺跡の概観 ― 出土土器を中心にして ―」『研究紀要』13　宮崎県総合博物館 1987

(22) 鹿児島県教育委員会「中尾田遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』15　1981

(23) 鹿児島県教育委員会「桑ノ丸遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』７　1977

(24) 茂山　護「宮崎郡田野町採集の貝殻条痕文土器」『宮崎考古』　第４号　宮崎考古学会 1978

(25) 北郷泰道「東城原第１・第２・第３遺跡」『野尻町文化財調査報告書』第２集　野尻町教育委員会　1987

(26) 新東晃一・立神次郎「下剥峰遺跡」『西之表市埋蔵文化財調査報告書』西之表市教育委員会　1978

（参考文献）

小林達雄編『縄文土器大観』１　草創期・早期・前期　小学館　1989
宮崎県　『宮崎県史』資料編　考古１　1989

表1　新村遺跡土器観察表

図面番号	遺物番号	地区名	器種	器部	文様および調整 外面	文様および調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
1	327 328 191	9-E 4-E	深鉢	口縁部	山形押型文	山形押型文、ナデ	良好	にぶい黄橙色（10YR7/3）	にぶい褐色（7.5YR5/3）	白、うす茶、茶、灰色の細砂粒を多く含む	
2	60	7-E	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい橙色（5YR6/4）	にぶい橙色（7.5YR6/4）	0.1～2mmの砂粒と石英を多く含む	
3	382	13-E	〃	口縁付近	〃	〃	〃	にぶい黄橙色（10YR7/3）	黄灰色（2.5Y5/1）	1mm大の白、うす茶の砂粒を含む	
4	371	5-E	〃	胴部	〃	ナデ	〃	黄橙色（10YR8/6）	黒褐色（10YR3/1）	1mm前後の白、うす茶、灰色の砂粒を多く含む石英を含む	
5	379	3-E	〃	〃	〃	〃	〃	橙色（7.5YR6/6）	黒褐色（7.5YR3/1）	1～3mm大の白、うす茶、灰色の砂粒を多く含む	
6	296	5-W	〃	〃	〃	風化の為不明	〃	橙色（5YR6/6）	にぶい褐色（7.5YR5/3）	1～2mmの白、うす茶、灰色の細砂粒を多く含む	
7	156	6-E	〃	〃	〃	ナデ	〃	にぶい黄橙色（10YR7/4）	にぶい黄褐色（10YR5/3）	1～3mm大の白、うす茶、灰色の細砂粒多く含む	スス付着
8	192	4-E	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙色（10YR7/2）	淡黄色（5Y8/3）	1～2mm大の白、茶、淡黄色の細砂粒を含む	
9	292	5-W	〃	〃	〃	風化の為不明	〃	橙色（7.5YR6/4）	にぶい褐色（7.5YR6/3）	1～2mm大の白、うす茶、灰色の細砂粒を多く含む	
10	320 321	10-E	〃	〃	〃	ナデ	〃	にぶい黄橙色（10YR7/4）	浅黄色（2.5Y7/3）	1.5～0.5mm大の白色、うす茶色の砂粒を多く含む	
11	299	5-W	〃	〃	〃	〃	〃	橙色（7.5YR7/6）	褐灰色（7.5YR4/1）	1～3mm大の茶、白、灰、うす茶の細砂粒を多く含む	
12	SI1	3-E	〃	〃	〃	〃	〃	橙色（5YR6/6）	黒褐色（5YR3/1）	1～4mm大の砂粒、石英、角閃石を含む	
13	146	6-W	〃	口縁部	楕円押型文	楕円押型文	〃	褐灰色（7.5YR5/1）	にぶい橙色（7.5YR7/4）	細砂粒、石英を含む	
14	300	5-W	〃	胴部	〃	ナデ	〃	橙色（7.5YR6/6）	灰褐色（7.5YR6/2）	1～2mm大の白、黒、茶色の砂粒を多く含む	
15	364	6-W	〃	〃	〃	〃	〃	橙色（7.5YR7/6）	浅黄橙色（10YR8/4）	1mm大の砂粒と石英・角閃石を多く含む	
16	291 294 208	4-W 5-W	〃	〃	〃	ケズリ	〃	にぶい赤褐色（5YR5/4）	黒褐色（10YR3/1）	細砂粒と1mm大の砂粒と石英を多く含む	
17	147 354	6-W	〃	〃	〃	ナデ	〃	にぶい橙色（7.5YR7/4）	浅黄橙色（10YR8/4）	細砂粒と石英を多く含む	
18	281	4-W	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙色（10YR6/3）	にぶい褐色（7.5YR6/3）	1～2mm大の白、灰色の砂粒を多く含む。雲母を含む	内面スス付着

新村遺跡土器観察表

図面番号	遺物番号	地区名	器種	器部	文様および調整 外面	文様および調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
19	221	3-W	深鉢	胴部	楕円押型文	ナデ	良好	浅黄橙色(10YR8/4)	灰褐色(7.5YR4/2)	1mm前後の白、黒、透明の砂粒を多く含む	
20	337	9-W	〃	〃	〃	〃	〃	橙色(7.5YR7/6)	浅黄橙色(10YR8/4)	1～2mm大の砂粒、石英を多く含む	
21	76	11-E	〃	〃	〃	〃	〃	黄色(2.5Y8/6)	黄色(2.5Y8/6)	1mm前後の白、黒、透明の砂粒を含む	
22	167	6-E	〃	底部付近	〃	〃	〃	浅黄橙色(7.5YR8/6)	浅黄橙色(7.5YR8/6)	1～2mm大の砂粒、石英、角閃石を含む	
23	92	9-W	〃	胴部	撚糸文	〃	〃	浅黄橙色(7.5YR8/4)	褐灰色(7.5YR4/1)	1～2mm大の砂粒、石英、角閃石を含む	
24	228	4-E	〃	〃	貝殻文	〃	〃	にぶい黄橙色(10YR7/4)	灰黄褐色(10YR5/2)	1～3mm大の白、黒、茶色の砂粒を多く含む	
25	14	8-W	〃	〃	沈線文	〃	〃	暗赤褐色(5YR5/6)	にぶい赤褐色(5YR4/4)	1～2mm大のうす茶、茶色の砂粒と石英を含む	

表2　高山遺跡土器観察表

図面番号	遺物番号	地区名	器種	器部	文様および調整 外面	文様および調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
1	2258	5-W	深鉢	口縁部	山形押型文	ナデ	良好	浅黄橙色(10YR8/4)	浅黄橙色(10YR8/4)	0.5㎜前後のうす茶、茶灰色黒の砂粒を含む	
2	2145	3-W	〃	〃	〃	原体刻文・山形押型文	〃	にぶい褐色(7.5YR5/3)	褐色(7.5YR4/3)	0.3㎜前後のうす茶、白、灰色の細砂粒を含む	
3	1418	2-W	〃	〃	〃	〃　〃	〃	橙色(5YR6/6)	にぶい橙色(5YR6/4)	細砂粒と石英、角閃石を含む	
4	1228	3-W	〃	胴部	〃	ナデ	〃	浅黄橙色(10YR8/3)	にぶい橙色(7.5YR7/3)	白、茶の細砂粒を含む	
5	3066	2-W	〃	〃	〃	〃	〃	浅黄橙色(10YR8/3)	淡黄色(2.5YR8/3)	0.5㎜大の白、灰色の細砂粒を含む	
6	3687	10-W	〃	〃	〃	〃	〃	浅黄橙色(7.5YR8/6)	灰褐色(7.5YR6/2)	0.3㎜大のうす茶、白、灰色の細砂粒を含む	
7	755	1-W	〃	〃	〃	〃	〃	浅黄橙色(10YR8/4)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	0.3㎜大のうす茶、灰色の細砂粒を含む	
8	1227	3-W	〃	〃	〃	〃	〃	浅黄橙色(10YR8/3)	にぶい褐色(7.5YR6/3)	0.5㎜大の灰色、白色の砂粒を含む	
9	676	6-W	〃	〃	〃	〃	〃	橙色(7.5YR7/6)	にぶい褐色(7.5YR5/4)	0.4～5㎜大の茶、灰色の細砂粒を含む	
10	209	1-W	〃	〃	〃	〃	〃	浅黄橙色(10YR8/4)	黄橙色(10YR8/6)	灰、茶色の細砂粒を含む	
11	1738	2-E	〃	〃	〃	〃	〃	灰黄褐色(10YR6/2)	浅黄橙色(10YR8/4)	うす茶、白色の細砂粒を含む	
12	3536	1-W	〃	〃	〃	〃	〃	浅黄橙色(10YR8/3)	浅黄橙色(10YR8/3)	茶、灰色の細砂粒を含む	
13	1739	2-E	〃	〃	〃	〃	〃	浅黄色(2.5Y7/4)	浅黄色(2.5Y7/4)	1～4㎜大の黒色、うす茶色の砂粒を含む	
14	310	3-E	〃	底部	〃	〃	〃	浅黄橙色(10YR8/4)	にぶい黄橙色(10YR6/3)	1～3㎜大のうす茶、灰色の砂粒を含む	
15	410	4-W	〃	〃	〃	〃	〃	橙色(7.5YR7/6)	橙色(7.5YR7/6)	1～5㎜前後のうす茶、灰色の砂粒を含む	
16	874	2-W	〃	口縁部	楕円押型文	楕円押型文	〃	赤褐色(2.5YR4/6)	にぶい赤褐色(2.5YR5/6)	石英、角閃石の細砂粒を含む	
17	706	1-W	〃	〃	〃	〃	〃	明赤褐色(5YR5/6)	明赤褐色(5YR5/8)	1㎜前後のうす茶、灰色の砂粒を含む	
18	712	1-W	〃	〃	〃	ナデ	〃	浅黄橙色(10YR8/3)	にぶい黄褐色(10YR6/3)	0.5㎜大のうす茶、灰色の細砂粒を含む	

高山遺跡土器観察表

図面番号	遺物番号	地区名	器種	器部	文様および調整 外面	文様および調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
19	2061	1-W	深鉢	口縁部付近	楕円押型文	楕円押型文、ナデ	良好	浅黄色（2.5Y7/4）	浅黄色（2.5Y7/4）	1mm大の白、透明、うす茶色の砂粒を含む	
20	3566	3-W	〃	胴部	〃	ナデ	〃	浅黄橙色（10YR8/4）	浅黄橙色（10YR8/4）	1～2mm大の砂粒と石英、角閃石を含む	
21	2098	1-W	〃	胴部	〃	〃	〃	橙色（5YR7/6）	浅黄橙色（7.5YR8/4）	石英、角閃石の細砂粒を含む	
22	2501	8-W	〃	〃	〃	〃	〃	浅黄橙色（10YR8/4）	黄橙色（10YR8/6）	2～3mm大の白、灰色、茶、黒色の砂粒を含む	
23	3325	3-W	〃	口縁部	菱形押型文	菱形押型文	〃	灰黄褐色（10YR4/2）	灰黄褐色（10YR4/2）	1mm大の白色、茶色の砂粒を含む	
24	1163 1966	2-W	〃	〃	〃	山形押型文・ナデ	〃	浅黄橙色（10YR8/3）	褐灰色（7.5YR5/1）	1～3mm大の白、灰色の砂粒を含む	
25	78	4-W	〃	胴部	〃	ナデ	〃	にぶい褐色（7.5YR6/3）	にぶい黄橙色（10YR7/2）	1mm大の白、灰色、黒色の砂粒を含む	
26	1255	3-W	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙色（10YR6/3）	灰黄褐色（10YR5/2）	0.5～1.5mmの白、透明、うす茶の砂粒を含む	
27	2170	4-W	〃	〃	〃	〃	〃	灰白色（10YR8/2）	にぶい黄橙色（10YR7/4）	1～5mm大の灰、白、うす茶色の砂粒を含む	
28	3563	3-W	〃	〃	〃	〃	〃	褐灰色（7.5YR4/1）	褐灰色（7.5YR4/1）	1～2mm大の雲母粒、うす茶色の砂粒を含む	
29	154	3-W	〃	口縁部	みみず膨れ状の突帯	〃	〃	灰黄褐色（10YR4/2）	淡黄色（2.5Y8/4）	1～5mm大の砂粒と石英、角閃石を含む	
30	33	2-W	〃	〃	〃	〃	〃	橙色（7.5YR7/6）	橙色（7.5YR7/6）	1mm大の茶、灰、白色の砂粒を含む	
31	1177	3-W	〃	〃	〃	山形押型文	〃	褐灰色（10YR4/1）	にぶい黄橙色（10YR7/3）	細砂粒と石英を含む	
32	2502	8-W	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙色（10YR7/4）	にぶい黄橙色（10YR7/4）	白色、透明の砂粒を含む	
33	2157	4-E	〃	胴部	〃	ナデ	〃	褐灰色（10YR4/1）	にぶい褐色（7.5YR5/4）	1～4mm大の砂粒を含む	
34	1194	3-E	〃	〃	〃	〃	〃	褐灰色（10YR4/1）	にぶい褐色（7.5YR5/4）	1～5mm大の砂粒を含む	
35	3369 3520	SI2	〃	〃	3本単位の沈線	〃	〃	にぶい黄橙色（10YR7/4）	褐灰色（10YR6/1）	1～3mm大の茶、白、灰色の細砂粒を含む	
36	3494	SI2	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい橙色（7.5YR6/4）	褐灰色（10YR5/1）	1～3mm大の茶、灰色の砂粒を含む	

高山遺跡土器観察表

図面番号	遺物番号	地区名	器種	器部	文様および調整 外面	文様および調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
37	182	7-E	深鉢	口縁部	貝殻による浅い押圧	ナデ	良好	橙色（5YR7/6）	橙色（7.5YR7/6）	1～3mm大の石英、角閃石の砂粒を含む	
38	3603	4-W	〃	胴部	〃	〃	〃	灰褐色（5YR4/2）	橙色（5YR6/6）	細砂粒及び石英を含む	
39	1045	8-W	〃	〃	〃	〃	〃	橙色（5YR7/6）	橙色（7.5YR7/6）	1～2mm大の茶色、透明、黒色の砂粒を含む	
40	159 1182 1254 1339	3-W 3-E	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい橙色（7.5YR7/4）	にぶい橙色（7.5YR7/4）	1～2mm大のうす茶、灰色の砂粒及び金色の粒子を含む	
41	1231	3-W	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい褐色（7.5YR6/3）	にぶい橙色（7.5YR6/4）	1～3mm大の白、灰色、茶、金色の砂粒を含む	
42	1266	3-W	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい橙色（7.5YR6/4）	にぶい橙色（7YR6/4）	1～3mm大の白、透明、金色の砂粒を含む	
43	1236 1237	3-W	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい褐色（7.5YR6/3）	にぶい橙色（7.5YR6/4）	1～4mm大の白、灰、茶、金色の砂粒を含む	
44	1049 2534	8-W	〃	〃	〃 ナデ	〃	〃	橙色（7.5YR7/6）	橙色（7.5YR6/6）	1～2mm大の白色、黒色、金色の砂粒を含む	
45	2497	8-W	〃	〃	〃 〃	〃	〃	橙色（7.5YR7/6）	にぶい橙色（7.5YR6/4）	1～2mm大の白、黒、金色の砂粒を含む	
46	1002 2570	9-W	〃	〃	貝殻による短条痕	〃	〃	橙色（5YR6/6）	にぶい黄橙色（10YR7/4）	1～5mm大の砂粒と石英、角閃石を含む	
47	1735	2-E	〃	〃	〃	〃	〃	淡橙色（5YR8/4）	浅黄橙色（10YR8/3）	1～3mm大の白色砂粒を含む	
48	183	7-E	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい橙色（7.5YR7/4）	にぶい橙色（7.5YR7/4）	1～3mm大の石英を多く含む	
49	1651 1779	2-E	〃	〃	貝殻条痕	〃	〃	にぶい橙色（7.5YR7/4）	にぶい黄橙色（10YR7/2）	細砂粒と石英を含む	
50	761 1481	1-W	〃	〃	貝殻刺突連点文	〃	〃	浅黄橙色（7.5YR8/4）	にぶい黄橙色（10YR7/3）	1～4mm大の白、茶、灰、黒色の砂粒を含む	
51	3543	2-W	〃	口縁部	貝殻刺突文	〃	〃	浅黄橙色（7.5YR8/6）	にぶい黄褐色（10YR7/3）	2～6mmの砂粒、石英を含む	押型文の可能性あり
52	3601	4-W	〃	〃	貝殻刺突文	〃	〃	浅黄橙色（7.5YR8/6）	浅黄橙色（7.5YR8/6）	1～3mm大の砂粒と角閃石を含む	
53	2169	4-W	〃	胴部	縄文	〃	〃	にぶい黄橙色（10YR7/3）	にぶい黄橙色（10YR7/2）	1～2mm大の白色、うす茶色の砂粒を含む	
54	303	3-E	〃	口縁部	撚糸文	撚糸文、ナデ	〃	にぶい黄橙色（10YR6/4）	にぶい黄橙色（10YR7/4）	1mm前後の灰、茶、白色の細砂粒を含む	

高山遺跡土器観察表

図面番号	遺物番号	地区名	器種	器部	文様および調整 外面	文様および調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
55	379	4-W	深鉢	胴部	撚糸文	ナデ	良好	にぶい黄橙色（10ＹＲ7/4）	灰黄褐色（10ＹＲ6/2）	1～4mm大の白、うす茶、灰色の砂粒を含む	
56	2936	1-W	〃	底部	ナデ	ナデ	〃	にぶい黄橙色（10ＹＲ6/3）	黄橙色（7.5ＹＲ7/8）	1～2mm大の砂粒と石英を多く含む	
57	3074	2-W	〃	〃	剥落が著しい	〃	〃	橙色（2.5ＹＲ7/8）	浅黄橙色（7.5ＹＲ8/4）	1～2mm大の砂粒と石英、角閃石を含む	外面～押型文の可能性あり
58	153	3-W	〃	〃	ナデ	〃	〃	にぶい褐色（7.5ＹＲ5/3）	にぶい黄褐色（10ＹＲ7/3）	1～2mm大の砂粒と雲母、石英を含む	

図　　版

図版１

新村遺跡遠景（東から）

新村遺跡発掘区全景（北から）

図版２

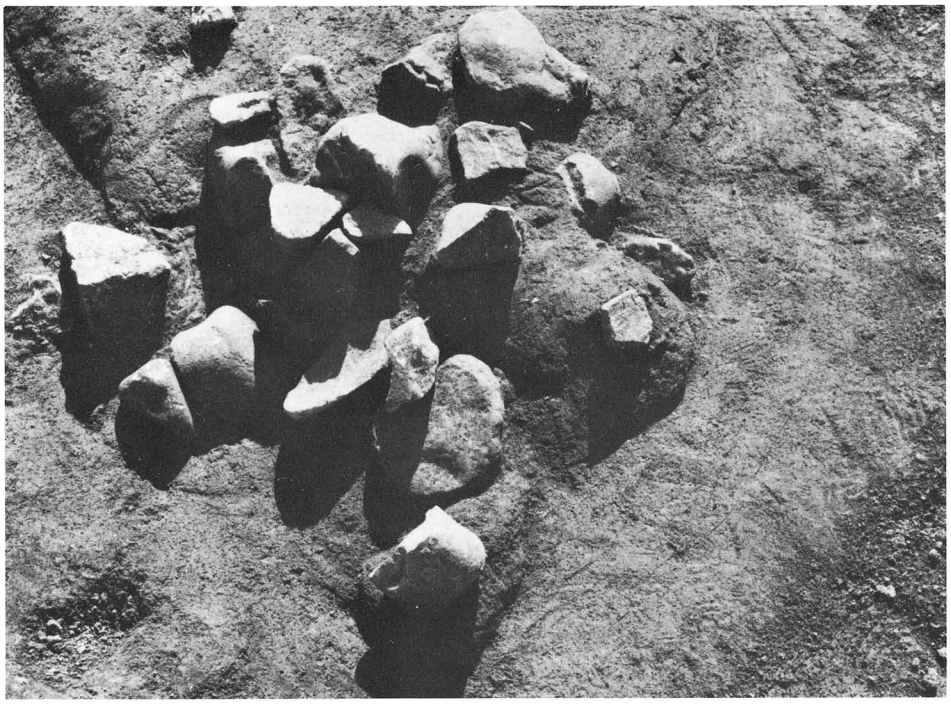
新村遺跡
土層断面

新村遺跡　１号集石遺構

図版３

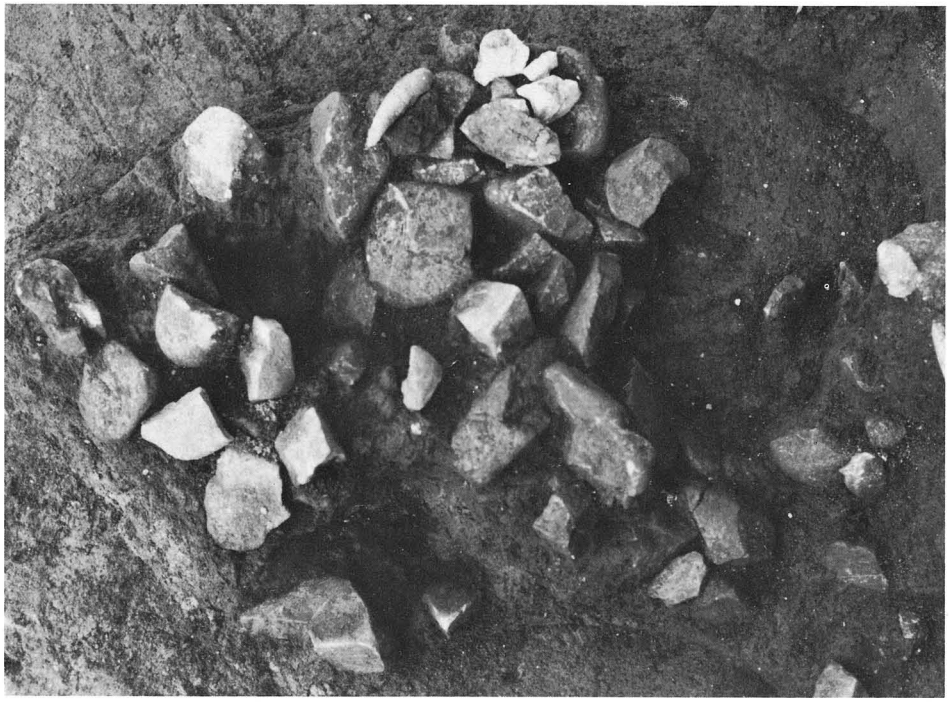
高山遺跡土層断面

高山遺跡　１号集石

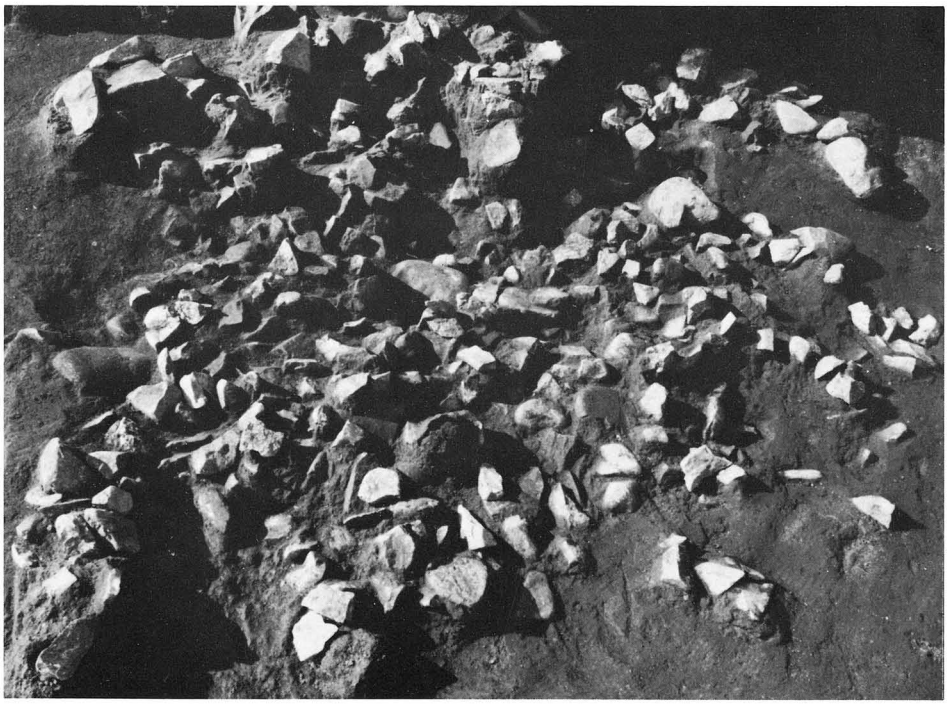


高山遺跡　3号集石遺構

高山遺跡　4号集石遺構

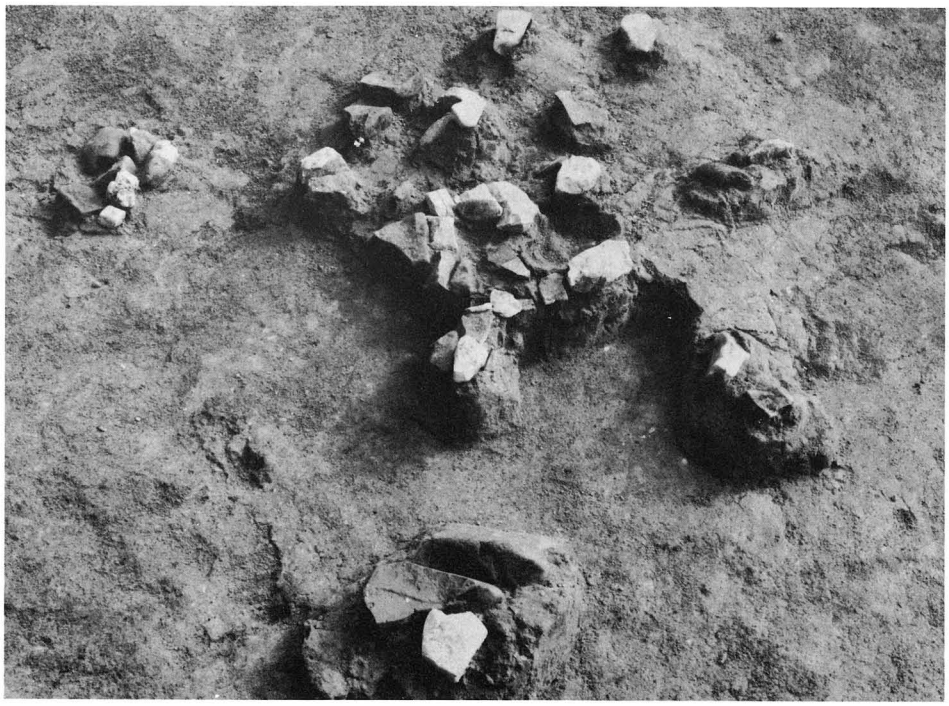


高山遺跡　5号集石遺構



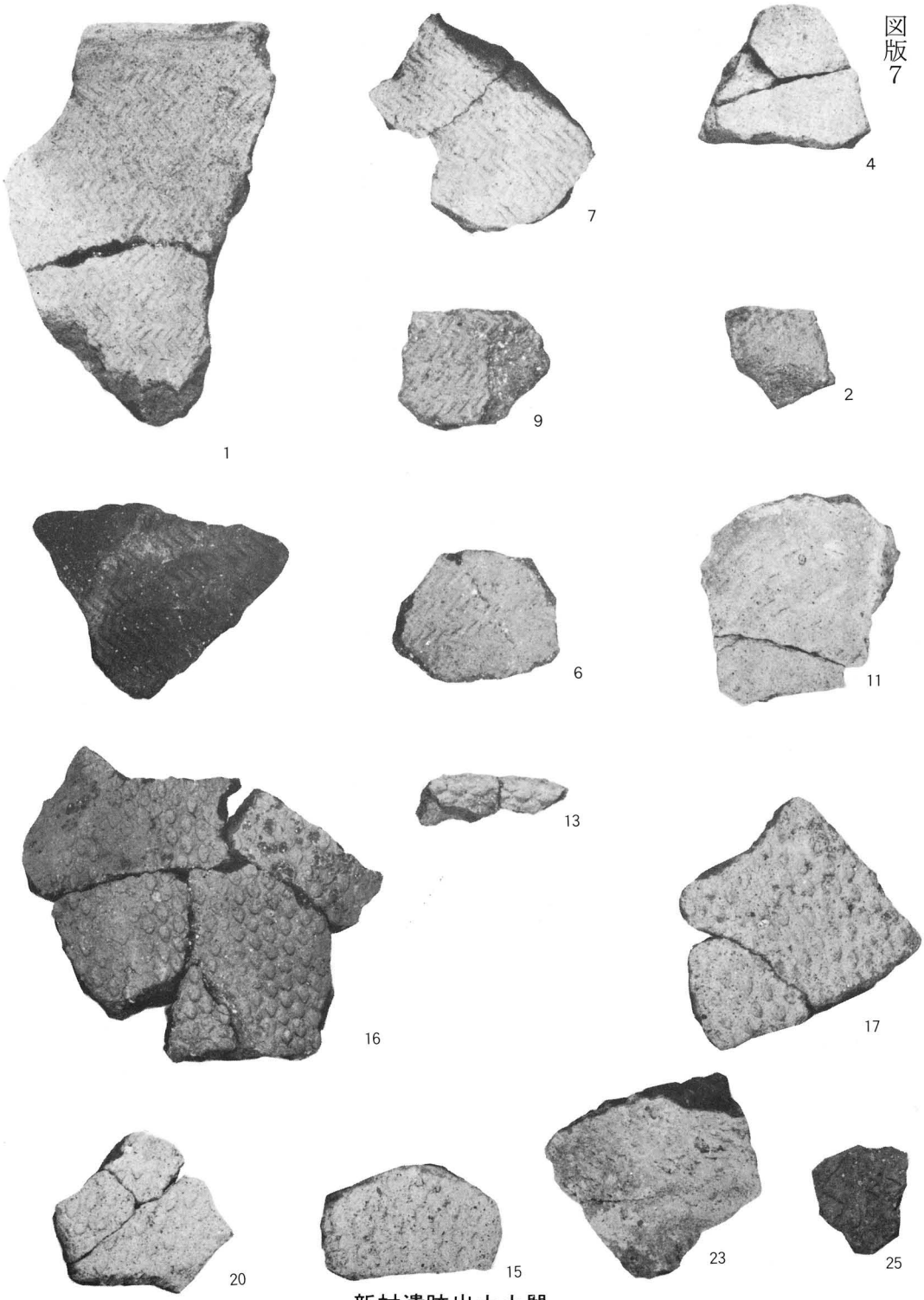
高山遺跡　6号集石遺構

高山遺跡　7号集石遺構

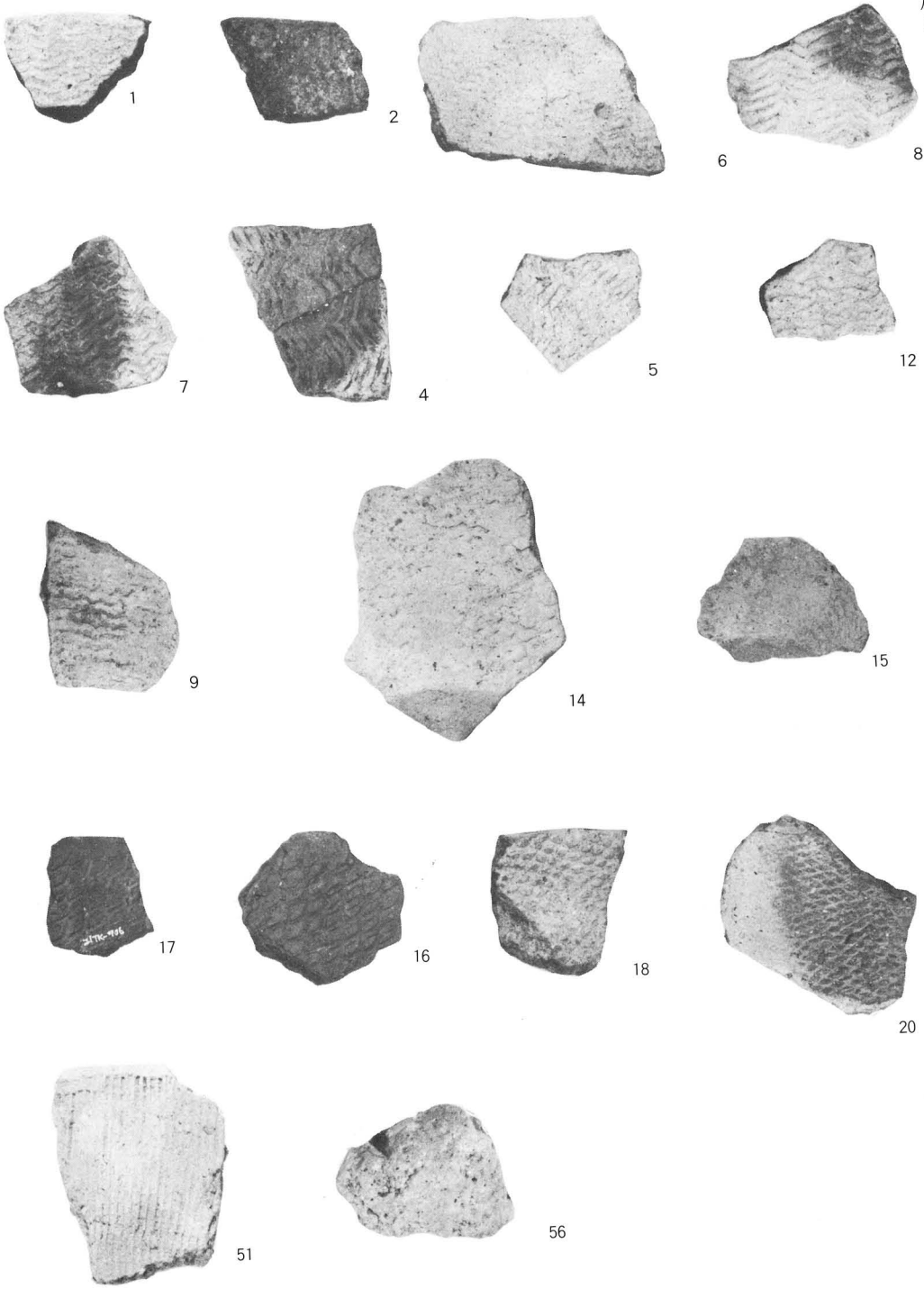


高山遺跡　8号集石遺構

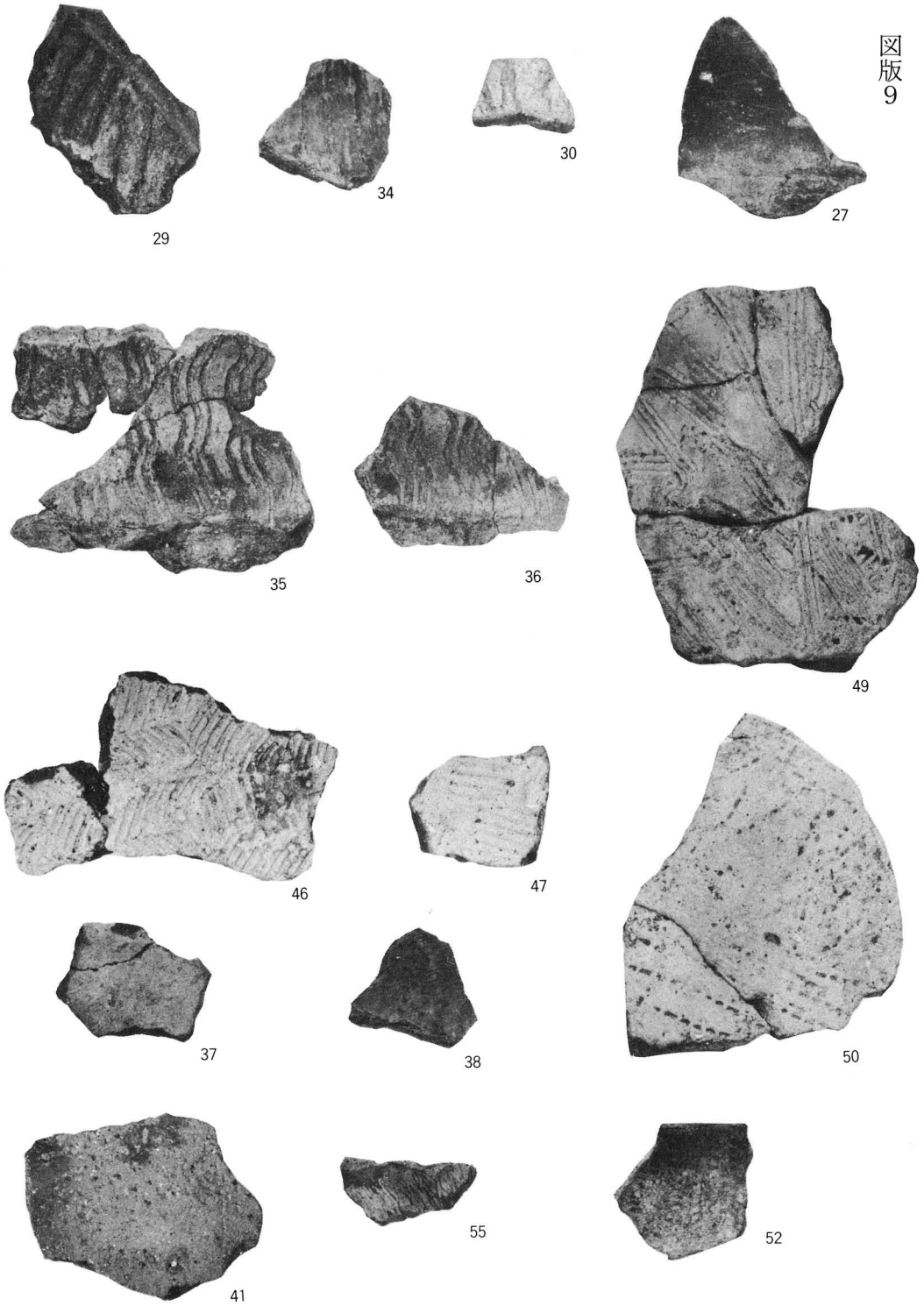
図版7



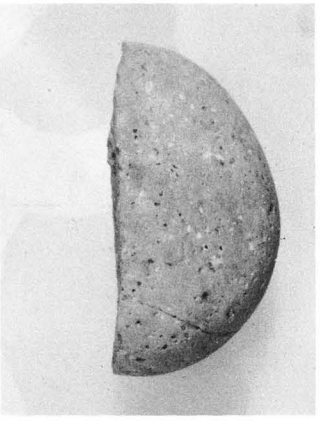
新村遺跡出土土器



高山遺跡出土土器 (1)

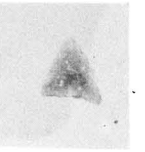


高山遺跡出土土器 (2)

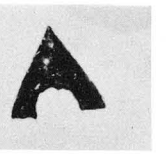


新村26

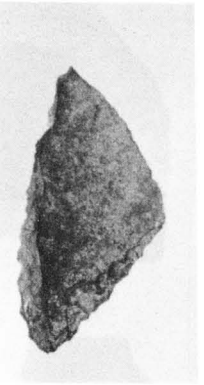
高山60



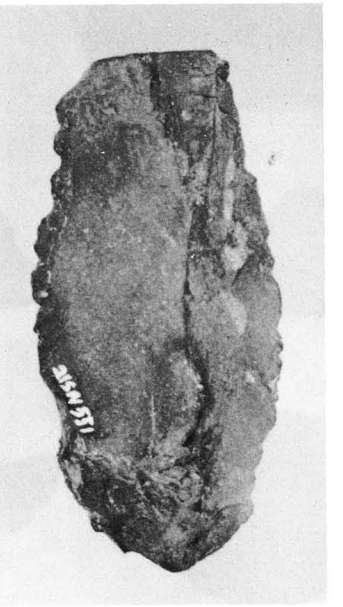
新村27



高山59



新村28



新村30

新村遺跡・高山遺跡　出土石器

東城原第1遺跡
東城原第2遺跡
東城原第3遺跡

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに
第１節　遺跡の位置と立地 …… 55
第２節　発掘調査の経過 …… 55
第３節　包含層の状態 …… 56
第Ⅱ章　調査の結果
第１節　東城原第１遺跡 …… 58
第２節　東城原第２遺跡 …… 62
第３節　東城原第３遺跡 …… 69
第Ⅲ章　考察
第１節　細石器の位置付け …… 73
第２節　土器類の様相 …… 73
第３節　石鏃の分類と傾向 …… 74

挿　図　目　次

第１図　東城原第１遺跡基本土層図 …… 56
第２図　東城原遺跡群位置図 …… 57
第３図　東城原第１遺跡遺物・遺構分布図 …… 59～60
第４図　東城原第１遺跡出土土器実測図 …… 61
第５図　東城原第１遺跡出土石器実測図 …… 62
第６図　東城原第２遺跡遺物・遺構分布図 …… 63～64
第７図　東城原第２遺跡出土土器実測図 (1) …… 66
第８図　東城原第２遺跡出土土器実測図 (2) …… 67
第９図　東城原第２遺跡出土土器実測図 (3) …… 68
第10図　東城原第３遺跡出土土器実測図 …… 70
第11図　東城原第３遺跡遺物・遺物分布図 …… 71～72

第12図　石鏃分類模式図 …… 75
第13図　集石遺構実測図 (1) …… 83
第14図　集石遺構実測図 (2) …… 84
第15図　集石遺構実測図 (3) …… 85
第16図　集石遺構及び縄文土器出土状態実測図 …… 86

表　目　次

表１　東城原第１遺跡出土土器観察表 …… 76
第２　東城原第２遺跡出土土器観察表 …… 76
第３　東城原第３遺跡出土土器観察表 …… 78
表４～７　石鏃計測表 …… 79

図　版　目　次

図版１　東城原遺跡群遠景 …… 87
東城原第１・第２遺跡遠景 …… 87
図版２　東城原第３遺跡遠景 …… 88
基本土層断面 …… 88
図版３　東城原第１・第２遺跡近・遠景 …… 89
東城原第１遺跡全景 …… 89
図版４　東城原第１遺跡西半分の状態 …… 90
東城原第１遺跡東半分の状態 …… 90
図版５　東城原第１遺跡１号集石遺構 …… 91
東城原第１遺跡２号集石遺構 …… 91
図版６　東城原第１遺跡３号集石遺構 …… 92
東城原第１遺跡４号集石遺構 …… 92
図版７　東城原第１遺跡縄文土器出土状態 …… 93

東城原第１遺跡細石核出土状態 …… 93
図版８　東城原第２遺跡近景 …… 94
東城原第２遺跡散石の状態 …… 94
図版９　散石除去後検出された集石の状態 …… 95
東城原第２遺跡２号集石遺構 …… 95
図版10　東城原第２遺跡１号集石遺構 …… 96
１号集石遺構礫除去後の掘り込み …… 96
図版11　東城原第３遺跡１号集石遺構 …… 97
東城原第２遺跡縄文土器出土状態と縄文土器 …… 97
図版12　出土遺物（土器１） …… 98
図版13　出土遺物（土器２） …… 99
図版14　出土遺物（土器３） …… 100
図版15　出土遺物（土器４） …… 101
図版16　出土遺物（土器５）・細石器 …… 102
図版17　出土遺物（石鏃１） …… 103
図版18　出土遺物（石鏃２） …… 104

第Ⅰ章　はじめに

第１節　遺跡の位置と立地

東城原遺跡群は、国道268号線を宮崎方面から野尻町に入って500m程の高岡町境に近い国道の南側に位置する。東城原第１遺跡は、国道建設の際遺跡の広がる台地が切断されたと思われるが、北向きの台地の標高178mの頂点付近に立地する。第２遺跡は、第１遺跡の東約200mの位置にあり、同一台地上であるが緩やかな南向きの標高180mからの傾斜地に立地する。第３遺跡は、第２遺跡と小さな谷を挟んだ約300m南の台地の先端部に当たる狭少な南向きの標高176mからの傾斜地に立地する。

第２節　発掘調査の経過

発掘調査の経過を日誌からの抜粋で記す。

10月６日　第１遺跡の調査に着手。重機による表土剥ぎ。焼石群検出。

10月８日　包含層の掘下げ。細石核出土。

10月13日　押型文土器、条痕文土器出土。チャート片多し。

10月14日　チャート製掻器出土。遺物分布図作成。

10月16日　細石核及び異形石器出土。

10月18日　集石遺構検出。

10月20日　第２遺跡、表土剥ぎ。

10月22日　第３遺跡、表土剥ぎ。

10月28日　第１遺跡、縄文時代早期層について検出完了。

11月１日　第２遺跡、焼石検出。

11月４日　遺物分布図作成。

11月12日　第２・第３遺跡ともゴボウ耕作のためのトレンチャーによる撹乱が著しい。

11月14日　第１遺跡、二回目の掘下げ。第２遺跡、遺物分布図作成。

11月19日　第１遺跡、集石遺構実測。第２遺跡、土器集中出土。

11月27日　第２遺跡、遺物分布図作成。

12月９日　第２遺跡、整った集石遺構検出。第３遺跡、遺物分布図作成。

12月10日　第２遺跡、集石遺構写真撮影。

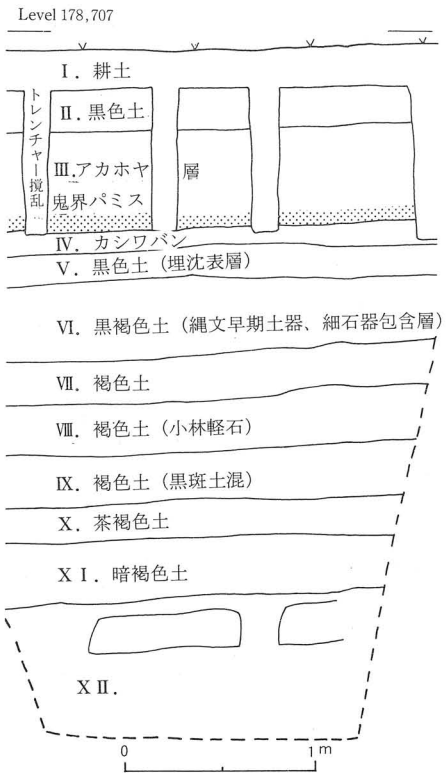
12月11日　第２遺跡、集石遺構実測。第３遺跡、遺物分布図作成。

12月15日　第３遺跡、整った集石遺構検出。

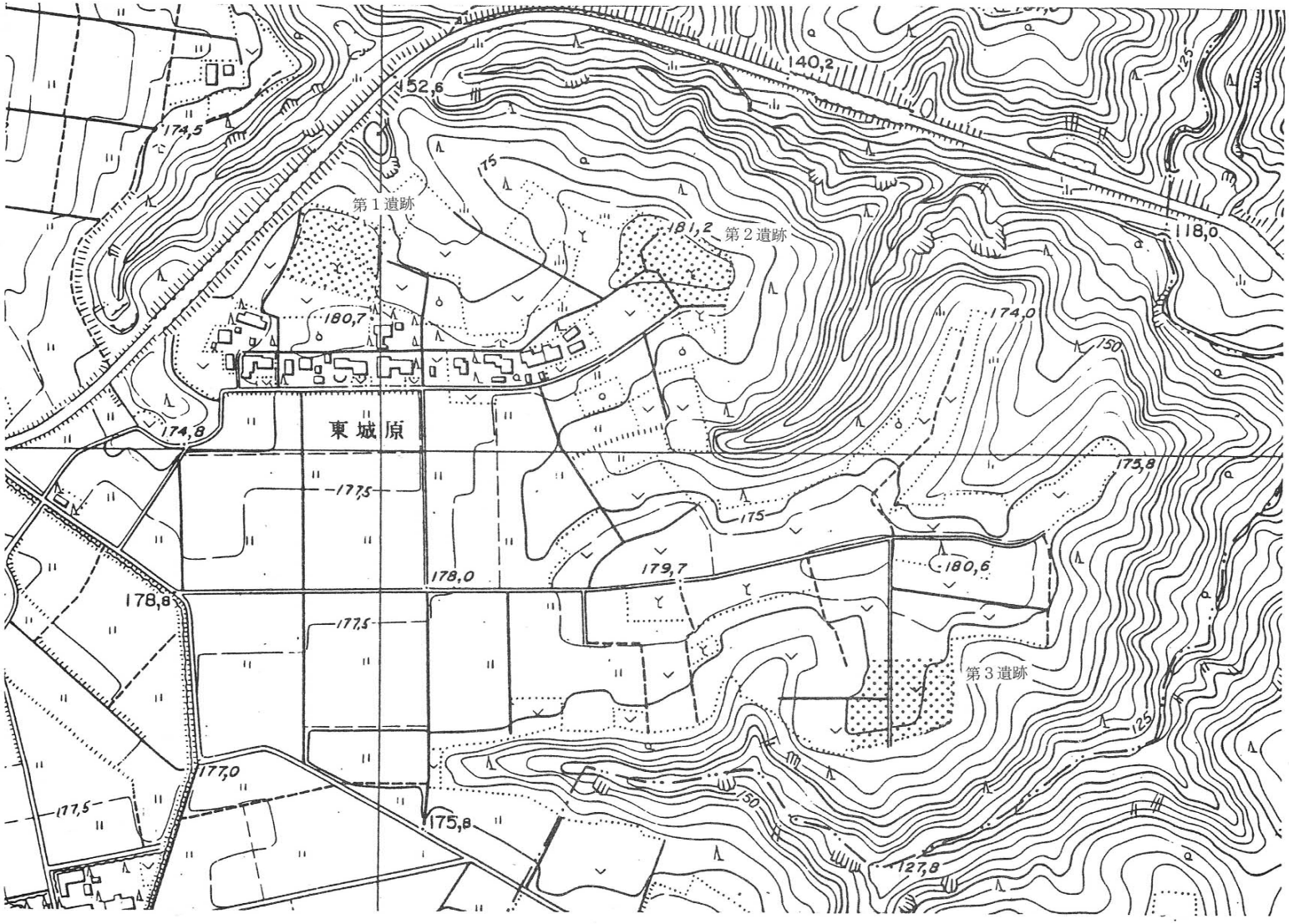
12月20日　発掘区全体図を作成の後、調査終了。

第３節　包含層の状態

東城原遺跡群における基本土層は、表土面下約300cm前後で確認されるＡＴ層と約40cmで確認されるアカホヤ層を鍵層とする。Ⅰ層の耕土は約20cmで、Ⅱ層の黒色土層は約20cmである。このアカホヤ層上の黒色土層は縄文時代前期以降の包含層として想定されるが、東城原遺跡群のいずれでも、該当層において遺構・遺物は確認されていない。Ⅲ層のアカホヤ層は約40cmの厚さがあり、下部には約10cmの厚さでいわゆる鬼界パミスの堆積が明瞭に見られる。Ⅳ層は厚さ約10cmのいわゆるカシワバンで、Ⅴ層は埋没表層とみられる厚さ約20cmの黒色土層である。トレンチャーによる撹乱は、おおよそカシワバンの下面から次のⅥ層にまで及んでいる。Ⅵ層が、厚さ約40cmの黒褐色土層で、縄文時代早期の包含層である。ただ、同一層内において細石器の出土が認められており、その理解が問題となる。以下はいわゆる小林軽石層からⅫ層に至るが、東城原第１遺跡では、ＡＴ層ではなく粗く固く締まった約33,000年前のいわゆる粟オコシ層である。本報告書に掲載されている新村、高山遺跡においては、ＡＴ層がみられるが、本遺跡において土層観察坑を設定した部分が、台地上の小さな谷地形に当たるためＡＴ層は開析されたものとみられる。



第１図　東城原第１遺跡基本土層図



第２図　東城原遺跡群位置図　（S＝1：5,000）

第Ⅱ章　調査の結果

第１節　東城原第１遺跡

１，概　要

第１遺跡は、トレンチャーによる撹乱が筋状に入り、所によっては縄文時代早期の包含層にも及び遺構の検出もはかばかしいものではなかった。遺物は、厚さ約40cmのⅥ層黒色土層で縄文早期土器と細石器が出土している。以下、新村、高山遺跡で確認されたⅩ、Ⅺ層相当層に包含される可能性のあるナイフ形石器などの旧石器時代の包含層についての発掘調査は、工事造成の深度が及ばないとの確認によって保留されている。したがって、細石器の出土からも充分に想定されるように、今後も周知の埋蔵文化財包蔵地として位置付けされるであろう。

検出した遺物は、縄文時代早期の押型文、貝殻文土器が中心であるが、出土量は少ない。石器では、石鏃７点のほか、掻器１点、細石核４点と細石刃があり、注目される初見の資料として一見石鏃形をしているが先端部が丸く、刃部等の整形が見られない磨製の異形石器がある。

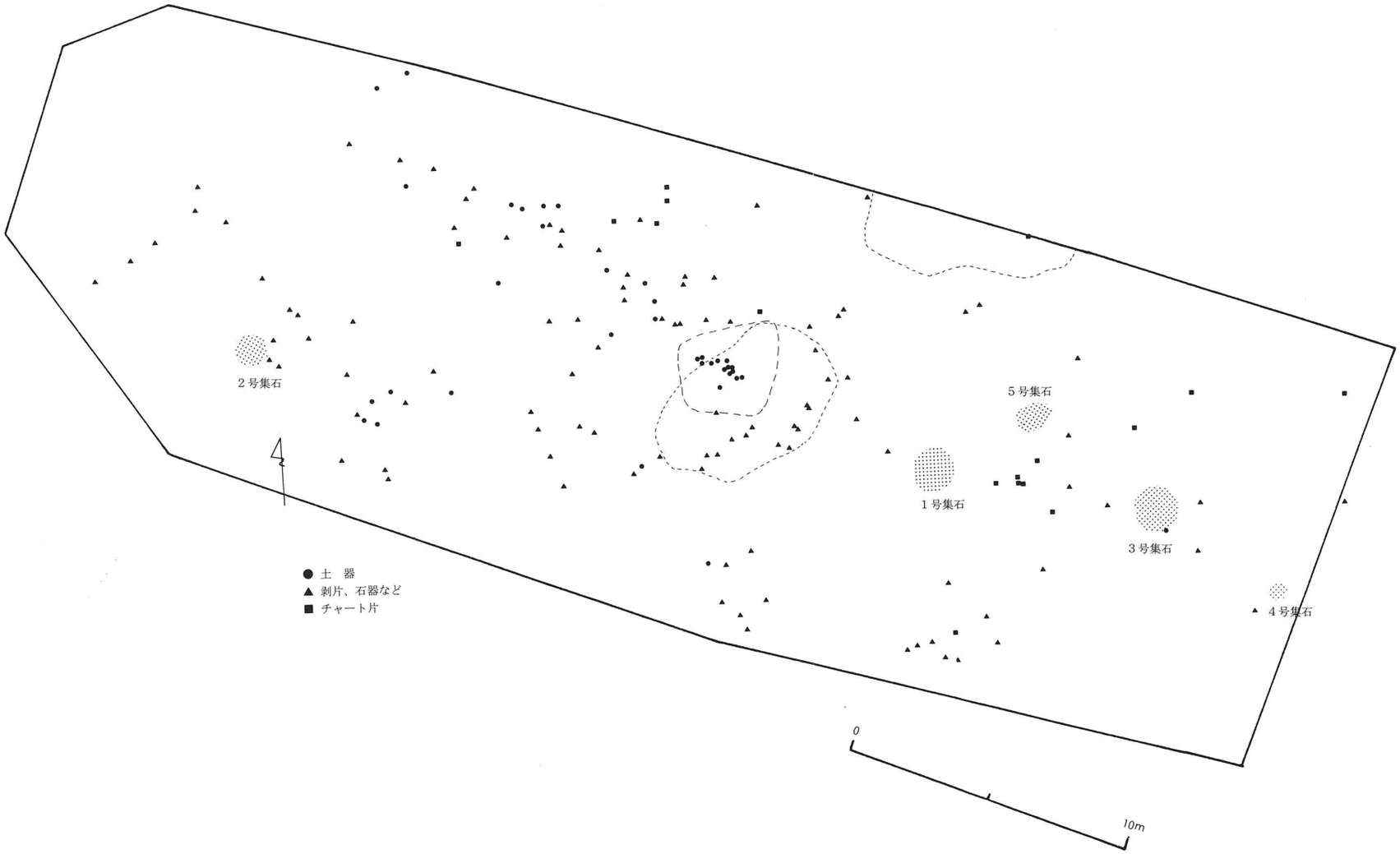
一方、遺構では焼石からなる「散石」と「集石」があり、集石遺構は全体で５基確認されている。

これらの遺構、遺物の出土は北側国道よりの地区に限られ、南側への拡張によって遺跡の広がりを求めたが、本来の小さな谷地形に当たり生活に適さない場所として広がりを持たないものと判断された。

２，遺　構

調査区のほぼ中央に焼石の散石がみられた。集石遺構は、その東側で４基、西側で１基が検出され、推定される旧地形のなかでは、北の国道側への大きな谷と南の小さな谷に挟まれた東西に延びる馬の背状の地形に生活が展開されていたものと思われる。

不幸にしてトレンチャーの撹乱がことに遺構のある場所で著しく、検出された集石遺構にまで撹乱がみられ、完全な形を伝えるものはなかった。また、集石遺構の掘り込みのはっきりしたものはなかった。いずれも比較的に小さな５cm大の礫石から構成される集石遺構で、後に延べる第２遺跡とは異なる印象を持った。



第３図　東城原第１遺跡遺物・遺構分布図

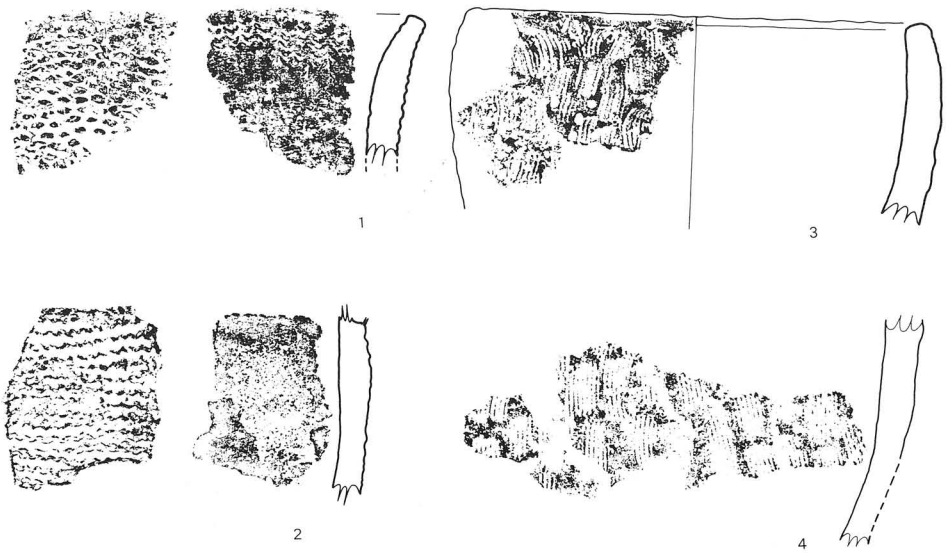
少ないながら土器片の集中は、中央の散石部分にみられ、また石器及び剥片もやはり散石周辺に集中し、集石遺構周辺にはわずかに散布が認められるに過ぎない。しいて集中部分を上げれば１号と３号集石遺構の間、および２号集石遺構周辺に剥片等は集中している。

３，遺　物

遺物の中で、土器の出土は散石の上面にほぼ集中している。第４図３・４は、第１遺跡で出土した土器の大半を占めるもので、復元は困難ながら一個体分にちかい破片が集中して出土している。器壁は厚く1.4cm程あり、短く押圧にちかい貝殻条痕が施されている。

押型文土器は、２点確認され、表面が楕円押型文で内面口縁端部に山形押型文が施された第４図１と山形押型文土器の第４図２がある。

石器では、出土層位が問題となる細石器が４点及び細石刃が出土している。第５図１が四角すい形で、２～４は船底型で、石材は１・３が砂岩、２が流紋岩、４がチャート質である。５・６の細石刃は１・３から剥離されたものとみられる。



第４図　東城原第１遺跡出土土器実測図

第５図７は、頁岩製の掻器で、正面形がＵ字を呈する。

また、初見にあたる第５図８の石器は、一見石鏃形であるが、刃部の形成はみられず、全面に磨き調整が施され、一短辺に切り込みがある。この時期には、いわゆる「トロトロ石器」と呼ばれる異形局部磨製石器の存在があるが、ここでは単に異形石器として扱っておきたい。

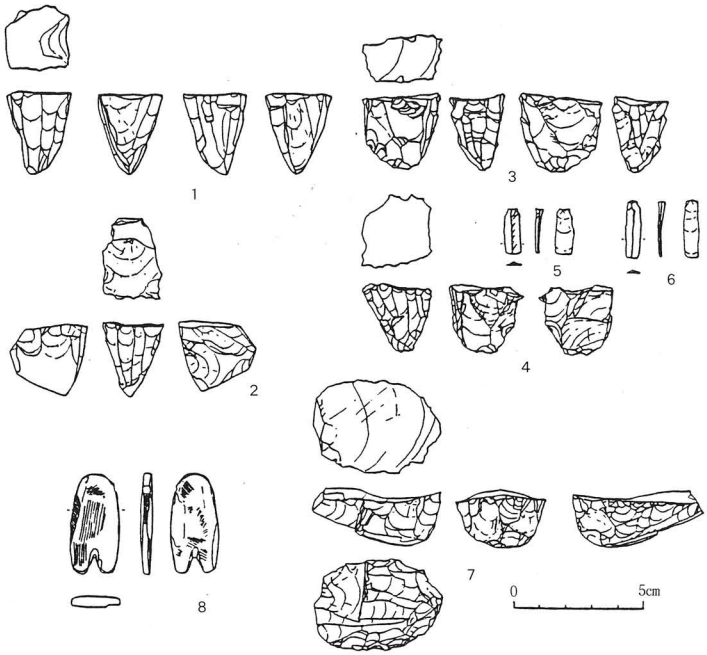
石鏃は７点出土しているが、２点が黒曜石で、ほかはチャート質の石材である。石鏃については、３遺跡を通して分類等の検討を加えて後述したい。

第２節　東城原第２遺跡

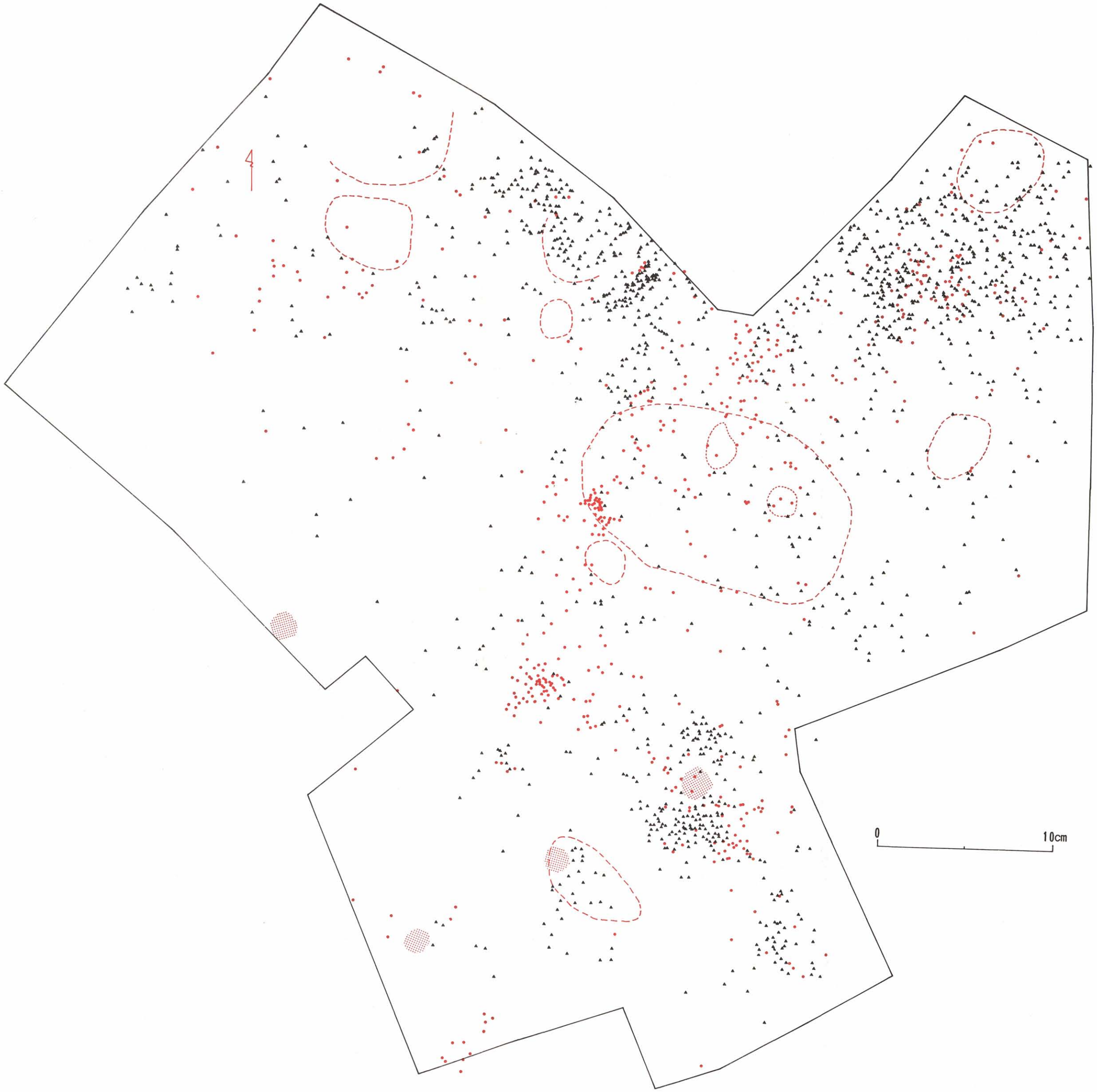
１，概　要

第２遺跡は、標高180ｍの南向きの緩やかな傾斜地に立地し、生活の場としての条件は、３遺跡の中では最も良好な場所である。

面的な発掘を目指したが、傾斜地の南で遺物の分布が途切れ、そのかわり１基だけ単独で整った形状の集石遺構が存在した。遺物及び焼石の分布は、傾斜地の最も高い部分を中心にみられた。



第５図　東城原第１遺跡出土石器実測図



第６図　東城原第２遺跡遺物・遺構分布図（赤は土器、黒は剥片・石器）

検出した遺構は、集石遺構２基と膨大な量の散石、及び散石下の２箇所に径３～４ｍの広がりでいわゆる集石遺構とは異なる礫石の集中が認められた。集石遺構を構成する礫は、10cm以上の比較的大振りの礫を用いているのに対して、散石及び散石下の集中した礫は、10cm以下の小振りないしは砕けた礫で構成されるという違いが認められている。

遺物の出土では、散石の途切れた地点で手向山式系の土器が倒立した状態で検出され、また周辺では多数の剥片が集中して認められた。また、押型文の大半は散石に伴い出土しており、多数の剥片も出土している。ほかにチャートの原石がみられ、細石刃も少数ながら検出されている。

２，遺　構

典型的な集石遺構は、２基検出され、３遺跡の中でも最も整った集石遺構であった。とりわけ１号集石遺構は、掘り込みも最深部で25cmあり、底面には長軸20cm大の扁平な石を敷いている。また、埋め土の中には細かな炭化物が含まれていた。

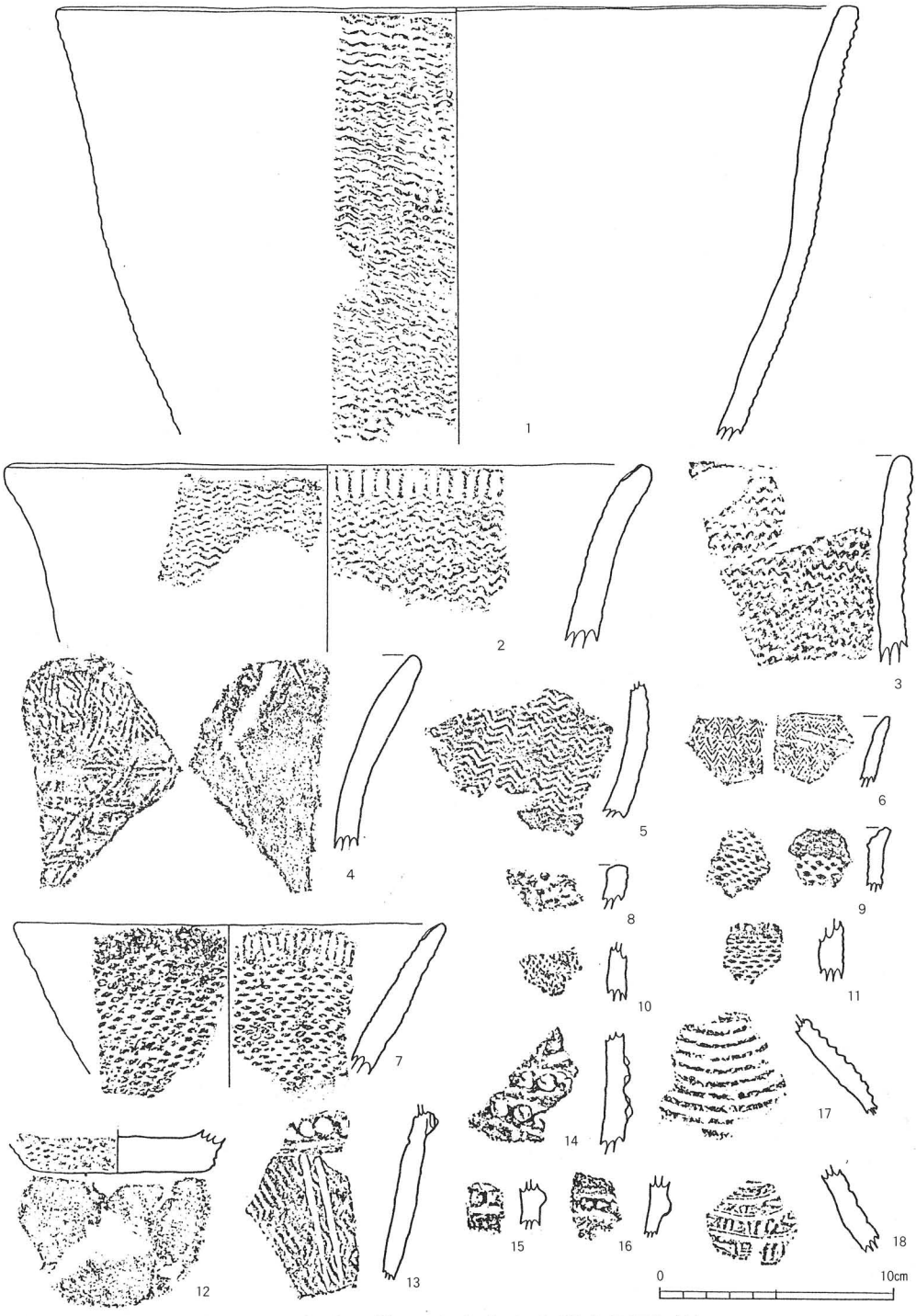
いわゆる竪穴住居跡など居住の遺構は検出されなかったが、土器片の密度の高い２～４ｍ程の集中部分は10cm程離れて２箇所に認められている。また、その２箇所には石器及び剥片の散布は多くはみられず、石器及び剥片の密度の高い集中部分は、大きくは３箇所に認められている。北の調査区境の２箇所の集中部分は散漫な状態であるが、南の集中部分は径８ｍ程の円形のまとまりを呈すると共に土器片の散布も同様に認められる。

３，遺　物

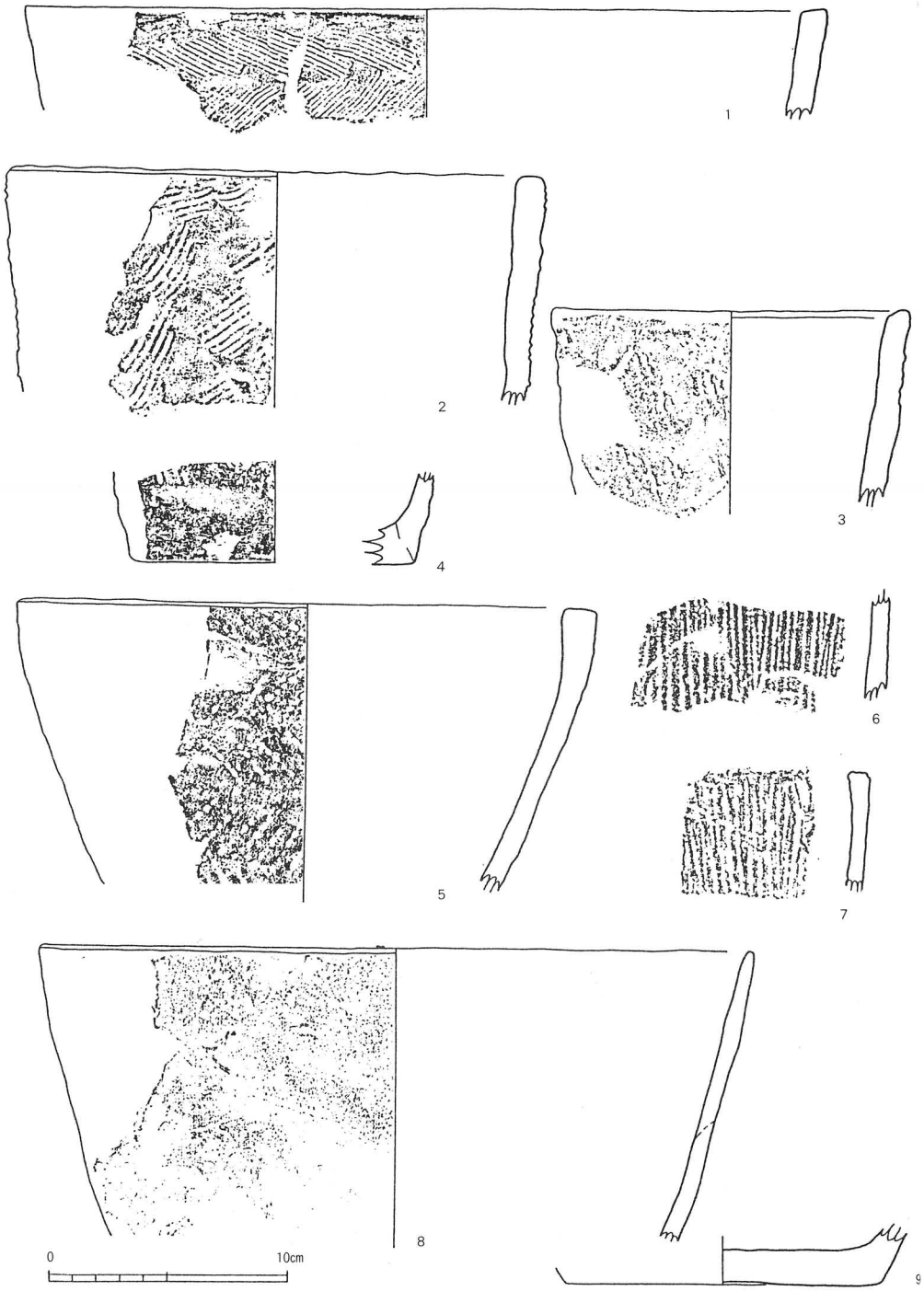
土器は、大きくは押型文系、貝殻文系、撚糸・縄紋系、無文系に分けられる。

第７図１～11は押型文土器である。山形（１～３・５・６）、楕円（７～11）、格子（４）のタイプが認められる。また、検出された押型文土器の多くは胎土の砂質が強く、色調も明るく黄橙色系である。１は口径34cmに復元される大型の押型文土器である。２・７は、山形、楕円の違いはあるが、口縁内面にいわゆる原体刻文と呼ばれる短条線を施す共通の技法が認められる。山形では６、楕円では10の紋様が緻密で、器壁も薄く小型の器形が想定され、用途などの違いが問題される。

13～16は刻みの見られる胴部片で、13は下位に撚糸文が認められ、いわゆる平栫



第７図　東城原第２遺跡出土土器実測図（1）



第８図　東城原第２遺跡出土土器実測図 (2)

式に分類される資料であろう。

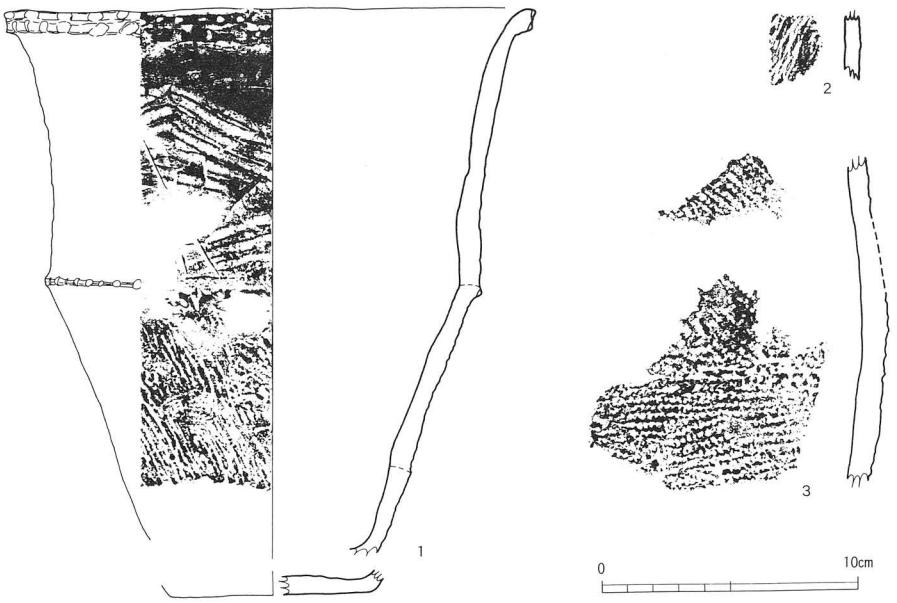
第８図１～７は貝殻文土器であるが、１が条痕、５が刺突を綾杉状に、３・６・７が刺突を条線状に施すものである。全体的な傾向としては、先の押型文土器に対し、胎土の砂質は少なく、雲母が含まれるのが特徴である。

８は無文土器で、胎土は比較的精選され薄手に仕上げられている。

第９図１は３遺跡の中で唯一完全形に復元できる資料であるが、底部は胴部下端部と直接接合面がないため実測図上でも切り離して示している。胴部の中程で「く」字形に屈曲し、口縁部にかけて緩やかに外反する。口縁部と胴部屈曲部が突帯下し、ともに押圧風の刻みが施されている。文様は胴部突帯の上部と下部で異なり、上部は撚糸文の上にやや幅広のヘラ描きが横位、斜位に施され、下部は撚糸文のみの施文である。胎土は精選され、焼成も良好な土器で、手向山式系に属するものとみられる。

他、第９図２は撚糸文、第９図３は縄紋を施す土器である。

一方石器類では、石鏃が36点出土している。黒曜石製は５点のみで、ほかはチャート質の石材である。分類等については後述する。



第９図　東城原第２遺跡出土土器実測図 (3)

第３節　東城原第３遺跡

１，概　要

第３遺跡は標高176mにあり、南向きのほぼ平坦地に立地している。遺跡の範囲は限られ標高179mの高い部分についての遺跡の広がりについて追求も行ったが、遺構・遺物の出土は見られず、南端の部分に遺跡の範囲は限られる。それは、縄文時代早期において現地形でみるより大きな谷によって台地の高い部分と遺跡の立地する南端部分が区切られていたためと判断される。

検出した遺構は、先の２遺跡と同じく集石遺構と散石であったが、２遺跡と比べて散漫な状態であった。

２，遺　構

散石は文字通り散漫で、集石遺構とみなせるものは、２基に留まる。１号集石遺構は、平均して10cm未満の比較的小振りな礫から構成される整った遺構であるが、下部の掘り込みは明瞭でない。

土器の出土の最も密集の高い集中部分は１箇所に認められ、やや散漫な部分は４箇所程認められる。また、石器及び剥片の密度の高い集中部分はおおむね３箇所に認められる。ここでも石器及び剥片の最も密集する部分では土器片の出土が薄く、土器の集中と石器及び剥片の集中には異なる地点を認めることになった。また、剥片の集中には黒曜石が多く見られている。

３，遺　物

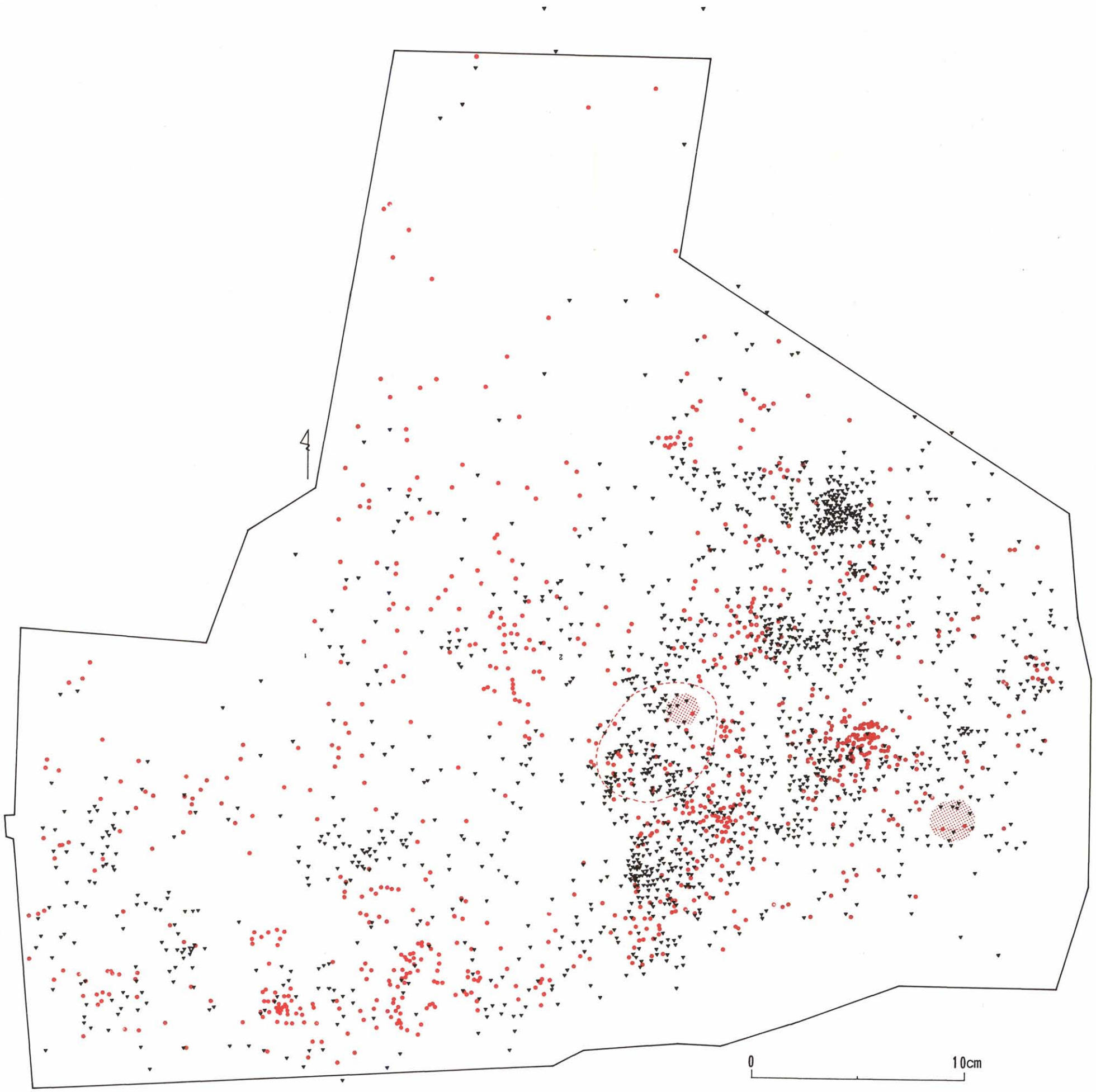
出土した遺物は押型文土器（第10図10）は少なく、いわゆる前平式土器（第10図１～４）、貝殻文系土器（第10図５～９）、ほかは無文土器（第10図11～18）で中心的に目立つものが無文土器である。

７は唯一山形口縁を成す貝殻刺突文土器である。

土器の胎土は、貝殻文系土器に雲母が含まれ、前平式土器は砂質が強く、無文土器は石英、角閃石を多く含むが精緻で、作りは無文土器が器壁も薄く仕上げられている。

石鏃は54点出土しているが、黒曜石が39点と圧倒的に多く注目されるし、小型の精巧な石鏃が主体を占めている点も注目される。このことについては後述する。

第10図　東城原第３遺跡出土土器実測図



第11図　東城原第３遺跡遺物・遺構分布図（赤は土器、黒は剥片・石器）

第Ⅲ章　考　　察

第１節　細石器の位置付け

第１遺跡の調査で問題となるのは、土器片に「共伴」した細石器の出土である。遺跡はゴボウ作付けのトレンチャーによる撹乱が著しく集石遺構の破壊もかなり進行していたが、散石に混在する細石器の出土した地点自体の撹乱はない。従って、最初に細石器を確認した際の下層から巻き上げられた可能性についての疑いは、まず打ち消される。ただし、出土層位について慎重に疑うとするならば、散石の形成をどのようにとらえるかに係わってくる。すなわち、土器片も細石器もいずれも散石上面を中心に確認されているが、散石の形成が集石遺構の礫の使用後の廃棄という行為の産物とすれば、形成時における多少の撹乱が伴うことが考えられる。その結果同一層位出土として確認されるに至った可能性はあるが、同一層位ととらえても当該期の「同一」には、数百年単位での幅が付与されることも考慮される。

細石器と土器の共伴の出土は、長崎県泉福寺洞穴、城ケ岳平子遺跡などで隆起線文土器や押型文土器、県内では岩土原遺跡での爪形文系土器との共伴が認められた例はある。しかし、第１遺跡で認められた押型文土器及び貝殻文系土器はそれらに比べ時期的に下るもので、また出土層位もアカホヤ層直下の縄文時代早期層と規定できる土層である。従って、このまま層位関係を認証することが出来るとすれば、県内でも最も新しい時期まで残された細石器の資料ということが出来る。

第２節　土器類の様相

第２遺跡で検出された手向山式系土器は、器形的にやや長細いものの胴部の屈曲から口縁部にかけて外反するプロポーション、胴部と口縁部に施される刻目突帯文などは手向山式の特徴を伝えるものである。しかし、胴部の上部と下部の文様要素にはかなりの異色性が認められる。この資料には押型文は見られず、上部の地文は撚糸文でありその上をヘラ描きがはしっている。押型文にしろ撚糸文にしろ、施文技法が回転施文であることを考えれば、文様施文意識の上での共通性を認めることができる。しかし、類例を求めたうえで新たな型式の範疇を設定するに足る特徴的な土器であることには変わりない。

また、第３遺跡での無文土器は、無文土器自体がこれまで余り取り上げられるこ

とがなく、県内でも注目されたことのない遺物として貴重な存在である。全体形が見れるものがないため充分な検討が出来ないが、傾向としては比較的胎土も精緻で丁寧に作られた印象を受ける。しかし、この傾向は必ずしもこれまで知られていた東九州での理解にスムースに受け入れられるものではない。無文土器を出土する遺跡によっては、厚手の無文土器の存在も知られている。

次に各土器の層位的関係ないしは編年の問題であるが、まず第１に、日向内陸部においてアカホヤ層下の縄文時代時代早期層を分層することは不可能に近い。わずか20～40cm程度の土層に千年単位の時間が堆積することになるが、本遺跡群においても層位的に判断できる材料はない。

しかし、３遺跡ごとの土器の出土量の違いはあるが、３遺跡を通じての共通の土器と独自の土器がある。共通の土器としては押型文及び貝殻文系土器が上げられる。しかし、第２遺跡では手向山式系土器の存在が目立ち、押型文土器を中心に幾分多様な土器が認められ、第３遺跡では無文土器の存在が目立ち、前平式土器が新たに加わる土器様相の違いが看取される。

第３節　石鏃の分類と傾向

土器に見る３遺跡間の傾向の違い以上に、際立った違いを見せるのが石鏃の形態と石材の在り方である。

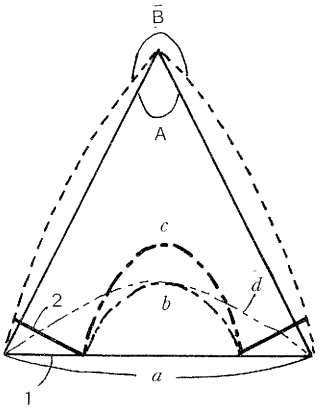
まず、注目されるのが第１遺跡からの石鏃の出土が７点と少ないこともありはっきりしたことは言えないが、第２遺跡と第３遺跡との間では、第２遺跡では黒曜石が約14パーセントと少なくチャートが大半を占めるのに対して、第３遺跡では黒曜石が約72パーセントと大半を占める。また、第３遺跡では、石鏃の製作を示す黒曜石の剥片などが多量に出土している。

次に形態上の問題では、大きくは三角形（A）と砲弾形（B）ともいうべき２側辺がやや膨らむ２種類がある。また、基部が抉りの無いタイプ（a）と、抉りの有るタイプがありその中は浅い抉り（b）と深い抉り（c）及び底辺全体の抉り（d）の４種が認められる。さらに、２底角部の加工が無いタイプ（1）と有るタイプ（2）の２種に分けられる。

第３遺跡で顕著に認められる石鏃の形態は、小型ないしは中型の三角形ないしは二等辺三角形の抉りの無いタイプ（A－a－1）と抉りの有るタイプ（A－d－1及び

A－b－2）である。前者、後者共54点中の約39パーセントを占める。つまりは全体の78パーセントがこの２種である。しかも前者ではその76パーセントが黒曜石製で、後者でも62パーセントが黒曜石製である。

こうした第３遺跡の様相に対し、第２遺跡では小型の石鏃は少なく中型ないしは大型の石鏃が多くを占める。その中で目立つものが、三角形の抉りの浅いタイプ（A－b－1）と深いタイプ（A－c－1）、砲弾形の抉りの浅いタイプ（B－b－1）と深いタイプ（B－c－1）である。



第12図　石鏃分類模式図

こうした石鏃の形態の差は、狩りによって獲得すべき対象物の違いによって考慮されたものであろうが、遺跡による明らかな石鏃の傾向の違いは狩猟という生活形態の違いにまで行き着く問題である。

表1　東城原第1遺跡出土土器観察表

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	器部	文様および調整 外面	文様および調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
4	1	UB-1	深鉢	口縁	楕円押型文	山形押型文の後ヨコナデ ヨコナデ	良好	10YR8/6黄橙色	10YR6/3にぶい黄橙色	1mm前後の石英を多量に含み、1mm前後の角閃石と、粉っぽい白色粒。 1～2mmの砂粒を少量含む。	
〃	2	〃		胴部	山形押型文	ヨコナデ、剥離	良好	5YR5/6明赤褐色 7.5YR5/3にぶい褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	2.5mm以下のうす茶、茶、白、透明、光る黒赤茶色の砂粒及び光る微粒を含む	
〃	3	〃	深鉢	口縁	貝殻条痕	横方向に貝殻条痕の後ナデ	良好	7.5YR3/1黒褐色(口唇部) 5YR4/6赤褐色	7.5YR3/1黒褐色 5YR4/6赤褐色	ごく細かい角閃石、1～2mmの石英、 1～3mmの白色粒(粉っぽい)を含む	
〃	4	〃		胴部	貝殻条痕 剥離	貝殻条痕の後ナデ(光沢あり)	良好	5YR5/8明赤褐色	7.5YR5/6明褐色 7.5YR4/3褐色	3mm以下のうす茶、白、灰、赤茶、茶、黒光る黒透明の砂粒及び光る微粒を含む	

表2　東城原第2遺跡出土土器観察表

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	器部	文様および調整 外面	文様および調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
7	1	UB-2		口縁～胴部	山形押型文	ナデ	良好	10YR7/4にぶい黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	黒く光る細長い粒子、白い透明な粒 白、黒、うす茶の粒を含む	
〃	2	〃	深鉢	口縁	ヨコナデ 山形押型文(角の丸い)	山形押型文(角の丸い)	良好	7.5YR5/4にぶい褐色	7.5YR5/4にぶい橙色	1～2mmの石英少し含む。0.5～3mmの白い砂粒多く含む	外面にスス付着
〃	3	〃	深鉢	口縁	山形押型文	ナデ	良好	10YR7/3にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	1～3mmの角閃石、1mm前後の石英 1～2mmの粉っぽい白色粒。2～4mmの砂粒を多く含む	
〃	4	〃	深鉢	口縁	山形押型文	風化	良好	7.5YR5/4にぶい褐色 10YR4/2灰黄褐色	7.5YR7/6橙色	1mm前後の石英を多く含み、角閃石 粉っぽい白色粒1～3mmの赤褐色粒を少量含む	全体にスス付着の痕跡有
〃	5	〃		胴部	山形押型文	ナデ	良好	7.5YR5/3にぶい褐色	7.5YR2/3極暗褐色 7.5YR3/3暗褐色	3mm以下～微細の白、白透明、うす茶、透明、黒、灰、光る黒の砂粒及び光る微粒を含む	外面にスス付着
〃	6	〃		口縁	山形押型文(部分的にヨコナデ)	山形押型文	良好	5YR4/6赤褐色	5YR5/6明赤褐色	1mm以下の白透明、黒く光る砂粒 及び光る微粒を含む	
〃	7	〃	鉢	口縁～胴部	ヨコナデ 楕円押型文	楕円押型文	良好	7.5YR5/8明褐色	5YR5/8明赤褐色 7.5YR5/8明褐色	0.5～2mmの白、灰色の砂粒を含む1mm前後の角閃石、石英を多く含む	
〃	8	〃	鉢	口縁	楕円押型文、風化	ナデ	良好	7.5YR5/4にぶい褐色	7.5YR5/4にぶい褐色	3mm弱の赤茶色の粒、2mm以下～微細の灰、赤茶、白、黒、茶、透明、黒く光る砂粒及び光る微粒を含む	
〃	9	〃		口縁	ヨコナデ 楕円押型文	楕円押型文	良好	5YR4/4にぶい赤褐色	5YR4/6赤褐色	3mm弱の赤茶色の粒、2mm前後の白色の粒、2mm～微細の赤茶、うす茶、光る黒、透明の砂粒及び光る微粒を含む	
〃	10	〃		胴部	楕円押型文	ナデ	良好	2.5YR5/3黄褐色	10YR6/4にぶい黄褐色	3mm前後の灰、うす赤色の粒2.5mmの前後の赤茶色の粒、2mm以下の白、灰、赤茶、うす茶金雲母、透明の砂粒及び光る微粒を含む	内面にスス付着か
〃	11	〃	鉢(平底)	底部	ヨコナデ	ナデ	良好	5YR5/4にぶい赤褐色	7.5YR6/4にぶい橙色	1～3mmの石英多含。1～3mmの角閃石、 1～4mmの粉っぽい白色粒を少量、1～2mmの赤褐色砂粒をごく少量含む	内面が黒変している
〃	12	〃	鉢(平底)	底部	楕円押型文	ナデ	良好	5YR6/6橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	1～2mmの角閃石、1mm前後の石英多数、 1～2mmの粉っぽい白色粒、1～3mmの砂粒を少量含む	

表2

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	器部	文様および調整 外面	文様および調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
7	13	〃		胴部	ヨコナデ、突帯上に刻みタテ方向の沈線と地様に条痕がある	ヨコナデ	良好	10YR6/3にぶい黄橙色(突帯部) 7.5YR4/2灰褐色(その他)	7.5YR5/4にぶい褐色(上部) 10YR6/2灰黄褐色(その他)	4mm前後の赤茶色の粒、3mm前後～微細の白透明、灰、赤茶、白、黒、透明、光る黒色の砂粒及び光る微粒を含む	外面の1部にスス付着
〃	14	〃		胴部	ナデ上の沈線 突帯の上に貝殻(?)による刺突文	ナデ	良好	10YR6/3にぶい黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	2mm前後～微細、白、灰、黒、茶、光る黒、透明の砂粒及び光る微粒を含む	
〃	15	〃		胴部	ヨコナデ、突帯	ナデ	良好	5YR6/6橙色	5YR6/6橙色	3mm前後のうす茶の粒、2mm以下の赤茶、うす茶、灰、透明、黒、白色の粒及び光る微粒を含む	
〃	16	〃		胴部	ヨコナデ、突帯	ヨコナデ	良好	5YR6/6橙色	5YR6/6橙色	3mm前後の茶色の粒、2mm以下の白、灰、黒、赤茶、光る黒、透明の砂粒及び光る微粒を含む	
〃	17	〃		胴部	凹線	表面はあばた状を程す 剥離	良好	10YR7/4にぶい黄橙色 5YR7/4にぶい橙色	2.5YR7/3浅黄色	2mm以下の黒色の粒を含む	
〃	18	〃		胴部	山形押型文の上を半載 竹管条痕文	ヨコナデ、剥離	良好	10YR7/4にぶい黄橙色	2.5YR5/4黄褐色	5mm前後の白、灰色の粒2mm～微細の黒、茶、灰、透明の砂粒及び光る微粒を含む	
8	1	〃	深鉢	口縁～胴部	ヨコナデ 貝殻条痕(>型)	ヨコナデ	良好	10YR7/3にぶい黄橙色 10YR2/2黒褐色(黒変部)	2.5Y8/4淡黄色 10YR2/2黒褐色(黒変部)	1～2mmの石英、1mm弱の角閃石多く含む、1～2mmの白、茶色の砂粒を含む	外面にスス付着 両面が黒変
〃	2	〃	深鉢(円筒)	口縁～胴部	ヨコナデの後斜方向に貝殻条痕、口唇部にナデ	剥離、ナデ	良好	7.5YR5/4にぶい褐色	5YR5/4にぶい赤褐色 5YR4/2灰褐色	1～3mmの金雲母と粉っぽい白色粒 1～4mmの砂粒多含	
〃	3	UB-2	深鉢(円筒)	口縁～胴部	貝殻刺突文	ナデ 口唇部からヨコナデ	良好	10YR6/3にぶい黄橙色	10YR5/2灰黄褐色	1～3mmの金雲母、白色、その他の砂粒、ごく細かい石英を多く含む	
〃	4	〃	深鉢	底部	ヨコナデの後貝殻条痕ヨコナデ	ヨコナデ	良好	7.5YR5/4にぶい褐色	7.5YR5/4にぶい褐色	1mm前後の石英、金雲母1～2mmの粉っぽい白色粒1～3mmの白っぽい砂粒を多く含む	内面にスス付着
〃	5	〃	深鉢	口縁～胴部	ヨコナデ 貝殻刺突文(くの字模様)	ナデ、風化	良好	10YR5/2灰黄褐色	2.5YR5/1黄灰色	1mm前後の白い砂粒、石英を多く含む 1～2.5mmの金雲母含む	外面にスス付着
〃	6	〃		胴部	タテ方向の貝殻刺突文	＼方向のナデ	良好	7.5YR7/6橙色 7.5YR6/6橙色	7.5YR3/2黒褐色 2.5Y4/2暗灰黄色	3mm前後の白色の粒、2mm～微細の灰、うす茶、黒、白、光る黒、透明の砂粒及び光る微粒を含む	
〃	7	〃	角筒	口縁	口唇部にケズリ タテ方向に貝殻刺突文	ヘラケズリ(一)の後ナデ	良好	7.5YR3/2黒褐色	7.5YR3/2黒褐色	1～2mmの石英をかなり多く含み、1～2mmの砂粒を少しと5mm角の石を含む	楔状貼り付けかもしれないけど貼り付け面不明
〃	8	〃	深鉢	口縁～胴部	ヨコナデ、縦方向にナデ	ヨコナデ 表面に凹凸がみられる	良好	10YR5/4にぶい黄褐色 7.5YR6/6橙色	7.5YR6/6橙色 10YR4/3にぶい黄褐色	1～4mmの白、茶色の砂粒を含む。1～3mmの石英、0.5m大の角閃石多く含む	内面に黒変あり
〃	9	〃	鉢(平底)	底部	ヨコナデ	ナデ	良好	5YR5/4にぶい赤褐色	7.5YR6/4にぶい橙色	1～3mmの石英多含。1～3mmの角閃石、1～4mmの粉っぽい白色粒を少量。1～2mmの赤褐色砂粒をごく少量含む	内面に黒変あり
9	1	〃		口縁～胴部底部	2段に圧痕文 突帯の上に刻み(?)	ナデ	良好	10YR6/3にぶい黄橙色	10YR5/2灰黄褐色	黒く光る粒、透明な粒 白、うす茶の粒を含む	突帯のすぐ上と口縁部にスス付着
〃	2	〃		胴部	縄文(?)	ナデ	良好	10YR7/4にぶい黄橙色	10YR7/6明黄褐色	1mm～微細の白、灰、うす茶、黒、光る黒透明、白透明の砂粒及び光る微粒を含む	
〃	3	〃		胴部	ナナメ方向の撚糸文 ヨコ方向の撚糸文 剥離	ヨコナデ	良好	10YR7/4にぶい黄橙色 10YR4/3にぶい黄褐色	10YR2/2黒褐色 10YR5/3にぶい黄褐色	5mm～微細の白透明の粒、3mm前後の赤茶の粒、3mm～微細のうす茶、灰、白、赤茶、黒、光る灰、光る黒、透明の砂粒及び光る微粒を含む	内面の1部にスス付着

表3　東城原第3遺跡出土土器観察表

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	器部	文様および調整 外面	文様および調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
10	1	UB-3	深鉢	口縁～胴部	押圧文、刺突文 貝殻腹縁刺突文、ナデ	ナデ、風化	良好	10YR6/3にぶい黄褐色 10YR4/2灰黄褐色	2.5Y5/2暗灰黄色	1～5.5mmの白、灰、茶色の砂粒大変多く含む。1mm前後の石英角閃石を少し含む	内面にスス付着
〃	2	〃	鉢	口縁	刺突、横方向に条痕	ヨコナデ	良好	7.5YR6/6橙色 10YR5/3にぶい黄褐色	7.5YR5/8明褐色	細砂粒0.5～2.5mmの角閃石、石英多く含む。1～6mmの白、灰、茶色の砂粒を含む	
〃	3	〃	鉢	口縁	横方向に条痕	ヨコナデ、風化	良好	10YR7/6明黄褐色	10YR5/2灰黄褐色	細砂粒0.5～1mmの角閃石多く含む 1～2mmの白、灰色の砂粒含む	
〃	4	〃	鉢	口縁	横方向に条痕	ヨコナデ	良好	7.5YR7/8暗めの黄橙色	10YR7/6明黄褐色	細砂粒1mm大の石英多く含む。1～4mmの白、茶の砂粒含む。1mm以下の角閃石少し含む	口唇部付近にスス付着
〃	5	〃	深鉢	口縁	ヨコナデ、斜方向に条痕	ていねいなヨコナデ	良好	10YR4/2灰黄褐色	2.5Y5/2暗灰黄色	細砂粒0.5～3mmの白っぽい砂粒大変多く含む、ごく細かい角閃石1mm前後の石英含む	
〃	6	〃	深鉢	口縁	ナデの後縦方向に波形の貝殻腹縁条痕文	ヨコナデ	良好	7.5YR5/6明褐色	7.5YR5/6明褐色	1mm前後の白色の砂粒大変多く含む2～4mmのものもある1mmの石英1mm弱の金雲母・角閃石を含む	
〃	7	〃	深鉢	口縁	縦方向に波形(約3cmずつで切れている)貝殻腹縁条痕文	ヨコナデ	良好	7.5YR6/6橙色	10YR5/3にぶい黄褐色	1mm弱の白色の砂粒2～3mmの白茶色の砂粒を含む。1mm前後の石英・金雲母を含む	
〃	8	〃	深鉢	口縁	ヨコナデの後、横、斜方向に貝殻刺突文、	ヨコナデ、凹凸あり	良好	7.5YR5/6明褐色 7.5YR4/3褐色	10YR4/6褐色	白色の細砂粒1mm弱の石英、角閃石も含む	
〃	9	〃		口縁	向きがちがう2つの斜方向の貝殻刺突文、ヨコナデ	ナデ	良好	10YR5/6黄褐色	7.5YR5/6明褐色	3.5mm前後の赤、茶、白、透明の粒、2mm以下の白透明、金雲母、白、茶、黒、うす茶、灰透明の砂粒及び光る微粒を含む	
〃	10	〃	鉢	口縁	口唇部にヘラ工具で縦方向に刻み ナデ、山形押型文	山形押型文、剥離	良好	2.5Y8/3淡黄色	10YR7/4にぶい黄橙色	0.5～2mmの角閃石、1mm前後の石英、1～2.5mmの砂粒(白、茶)含む。	
〃	11	〃	深鉢	口縁～胴部	押圧文、貝殻腹縁刺突文 刺突文、ナデ	ナデ、風化	良好	10YR6/3にぶい黄橙色	2.5Y5/2暗灰黄色	1～5.5mmの白、灰、茶色の砂粒大変多く含む。1mm前後の石英、角閃石を少し含む	
〃	12	〃	深鉢	口縁	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	5YR5/8明赤褐色	7.5YR6/6橙色 5YR6/6橙色	1mm弱の黒、白っぽい砂粒、石英、角閃石含む 2～3mmの茶色っぽい砂粒含む少し	
〃	13	〃	深鉢	口縁	ヨコナデ	粗いミガキ、風化気味	良好	5YR5/8明赤褐色	2.5YR5/6明赤褐色	1mm以下の石英・白っぽい砂粒含む	
〃	14	〃	深鉢	口縁	ヨコナデ 表面にゆるやかな凹凸あり	ヨコナデ	良好	5YR7/8暗めの橙色 10YR6/4にぶい黄褐色	7.5YR6/6橙色 10YR5/2灰黄褐色	ごく細かい石英・角閃石含む 白、黒っぽい細砂粒含む	
〃	15	〃	深鉢	口縁	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	10YR4/6褐色 10YR2/2黒褐色	7.5YR6/6橙色	1mm前後の石英、角閃石少し含む 1mm弱の白、灰、茶の砂粒含む 2～3mmの白い砂粒もある	
〃	16	〃	深鉢	口縁	ヨコナデ 表面にゆるい凹凸がある	ヨコナデ、横方向に条痕がみられる。風化	良好	7.5YR6/6橙色	10YR6/6赤黄褐色 5YR6/6暗めの橙色	細砂粒1mm大の石英、白茶色の砂粒含む ごく細かい角閃石含む	
〃	17	〃	深鉢	口縁	ヨコナデ	ミガキ、斜方向のキズ	良好	5YR5/8明赤褐色	7.5YR4/3褐色	1mm以下の石英、角閃石少し含む 白、黒、茶っぽい細砂粒含む	
〃	18	〃	深鉢	口縁	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	7.5YR4/4褐色 10YR5/4にぶい黄褐色	5YR6/8橙色 2.5Y5/2暗灰黄色	ごく細かい角閃石、1mm前後の石英含む 1mm大の白、黒の砂粒含む	

表4　石鏃計測表

単位：cm

番号	出土遺跡	全長	幅	厚さ	抉り 幅	抉り 深さ	先端角度	重さ	石材	破損状態
1	UB-1	1.82	1.2	0.41	0.65	0.3	61.5	0.6	黒曜石	
2	〃	2.1	1.75	0.4	0.5	0.6	—	1.25	黒曜石	先端 右側脚部
3	〃	2.4	1.8	0.5	—	0.9	70.5	0.9	黒曜石	左側脚部
4	〃	1.6	1.3	0.35	0.8	0.3	56	0.5	チャート	左側脚部
5	〃	1.9	1.3	0.5	0.9	0.3	56.5	0.85	チャート	
6	〃	2.5	1.9	0.35	1.7	0.65	54.5	1.15	チャート	
7	〃	1.9	2.1	0.35	0.6	0.6	60	0.875	チャート	
8	UB-2	1.9	1.3	0.3	—	0.6	68	0.5	黒曜石	左側脚部
9	〃	2.6	1.8	0.5	—	0.6	62.5	1.75	黒曜石	右側脚部
10	〃	2.1	1.0	0.3	—	0.75	53	0.55	黒曜石	左半分
11	〃	1.9	1.0	0.3			53	0.35	黒曜石	右下 裏面剥離
12	〃	0.4	2.1	0.5			79	1.9	黒曜石	左側脚部
13	〃	1.2	1.0	0.3	—	0.2	68.5	0.15	チャート	右側脚部
14	〃	1.3	1.4	0.4	0.5	0.3	71	0.4	チャート	
15	〃	1.2	1.7	0.4			—	0.75	チャート	先端 右側脚部
16	〃	2.0	1.5	0.3	—	0.4	66.5	0.9	チャート	右側脚部
17	〃	1.9	1.2	0.4	0.5	0.3	72.5	0.8	砂岩	
18	〃	2.3	1.65	0.3	0.65	0.4	64.5	0.75	砂岩	
19	〃	2.9	2.1	0.55	1.0	0.5	82.5	0.3	チャート	
20	〃	2.1	1.6	0.5	0.6	0.7	—	1.05	チャート	先端
21	〃	2.4	1.5	0.35	—	0.7	62.5	1.2	チャート	左側脚部
22	〃	2.4	1.6	0.25	0.4	0.7	74	0.895	チャート	右側脚部
23	〃	2.8	1.3	0.2			67	0.6	チャート	左側脚部
24	〃	3.0	1.7	0.4	—	1.0	84	1.4	チャート	右側脚部
25	〃	1.5	1.4	0.5	—	0.5	68.5	0.55	チャート	右側脚部
26	〃	1.7	1.5	0.5	0.7	0.5	72.5	0.7	チャート	
27	〃	2.0	1.4	0.4	1.0	0.4	66.5	0.75	チャート	
28	〃	2.2	1.7	0.4	0.7	0.6	65.5	0.75	チャート	
29	〃	2.0	1.9	0.4	1.1	0.7	—	0.9	チャート	先端
30	〃	2.4	1.7	0.4	1.0	0.7	49	0.9	チャート	

表5　石鏃計測表

単位：cm

番号	出土遺跡	全長	幅	厚さ	抉り 幅	抉り 深さ	先端角度	重さ	石材	破損状態
31	UB-2	2.7	1.8	0.4	—	0.9	60.5	1.1	チャート	左側脚部
32	〃	2.7	2.0	0.4	—	1.0	58	1.3	チャート	右側脚部
33	〃	1.2	1.5	0.3	0.4	0.5	71	0.25	チャート	
34	〃	1.7	1.5	0.4	—	0.6	90	0.6	チャート	右側脚部
35	〃	1.8	1.3	0.4	1.4	1.0	101	1.025	チャート	
36	〃	1.8	1.8	0.2	—	0.8	—	0.6	チャート	先端 左側脚部
37	〃	1.9	1.45	0.35	—	1.1	—	0.7	チャート	先端 左側脚部
38	〃	1.7	1.4	0.4			—	0.6	チャート	先端
39	〃	1.9	1.6	0.6			—	1.65	チャート	先端
40	〃	2.9	1.25	0.5			62.5	1.9	チャート	
41	〃	1.7	1.45	0.4	0.6	0.2	81	0.9	砂岩	
42	〃	1.6	1.5	.04	0.8	0.5	90	0.8	チャート	
43	〃	2.0	1.2	0.4	0.7	0.3	60	0.6	チャート	
44	UB-3	0.95	0.61	0.2			80.5	0.15	黒曜石	
45	〃	1.0	1.0	0.2			75	0.175	黒曜石	
46	〃	1.1	1.1	0.3			78.5	0.05	黒曜石	
47	〃	1.15	1.15	0.2			72.5	0.175	黒曜石	
48	〃	1.2	0.98	0.2			81	0.3	黒曜石	
49	〃	1.2	1.3	0.3			79.5	0.3	黒曜石	
50	〃	1.35	1.2	0.3			73	0.3	黒曜石	
51	〃	1.23	1.0	0.3	1.0	1.5	83	0.35	黒曜石	
52	〃	1.4	1.3	0.4			75	0.45	黒曜石	
53	〃	1.45	1.35	0.3			74	0.375	黒曜石	
54	〃	0.9	1.35	0.2			68	0.3	黒曜石	
55	〃	1.4	1.25	0.3			66	0.3	黒曜石	
56	〃	1.1	1.0	0.3			67	0.3	黒曜石	
57	〃	1.6	1.05	0.39			65	0.45	黒曜石	左側脚部
58	〃	1.56	1.0	0.2	1.1	0.15	70.5	0.35	黒曜石	
59	〃	1.8	1.3	0.51			74.5	1.0	黒曜石	
60	〃	1.05	0.7	0.2	—	0.21	61.5	0.1	黒曜石	右側脚部

表6　石鏃計測表

単位：cm

番号	出土遺跡	全長	幅	厚さ	抉り 幅	抉り 深さ	先端角度	重さ	石材	破損状態
61	UB-3	1.18	0.65	0.2	0.75	0.1	44.5	0.1	黒曜石	
62	〃	1.2	1.3	0.2	1.0	0.2	83	0.3	黒曜石	
63	〃	1.39	0.8	0.29	—	0.18	53	0.2	黒曜石	右側脚部
64	〃	1.35	0.85	0.4	0.65	0.15	—	0.375	黒曜石	先端 左側脚部
65	〃	1.5	0.7	0.3	—	0.21	57.5	0.35	黒曜石	左側脚部
66	〃	1.48	1.05	0.3	0.85	0.23	65.5	0.45	黒曜石	右側脚部
67	〃	1.55	1.1	0.3	—	0.45	35	0.35	黒曜石	左側脚部
68	〃	1.6	0.99	0.21	0.8	0.43	51.5	0.25	黒曜石	
69	〃	1.72	1.12	0.3	1.0	0.35	64	0.45	黒曜石	
70	〃	1.8	1.4	0.4	0.9	0.35	75	0.775	黒曜石	
71	〃	1.11	1.1	0.3	—	0.4	—	0.3	黒曜石	先端 右側脚部
72	〃	1.4	1.29	0.35	0.9	0.3	—	0.7	黒曜石	先端
73	〃	2.35	1.42	1.1	2.2	0.25	73	1.75	黒曜石	
74	〃	2.4	1.45	0.34	—	0.5	79.5	1.25	黒曜石	左側脚部
75	〃	1.25	1.78	3.1	0.8	0.28	—	0.95	黒曜石	先端
76	〃	2.1	1.5	0.4	0.9	0.55	—	1.25	黒曜石	先端
77	〃	1.7	1.1	0.3			—	0.9	黒曜石	先端 右側脚部
78	〃	2.02	1.6	0.5			115.5	1.75	黒曜石	
79	〃	2.71	1.9	0.75			85	3.2	黒曜石	
80	〃	1.45	1.05	0.35			76	0.5	黒曜石	両脚部
81	〃	0.99	1.1	0.3			—	0.375	黒曜石	先端 両脚部
82	〃	1.75	1.2	0.35			82	0.85	黒曜石	左側脚部
83	〃	0.8	1.0	0.2	0.9	0.15	90	0.15	チャート	
84	〃	0.95	0.8	0.25	0.9	0.15	79.5	0.2	チャート	
85	〃	1.2	1.0	0.3	—	0.1	70	0.3	砂岩	右側脚部
86	〃	1.29	0.1	0.25	1.0	0.2	58	0.275	チャート	左側脚部
87	〃	1.35	1.0	0.3	0.8	0.15	60.5	0.35	砂岩	
88	〃	1.4	1.25	0.31	0.9	0.15	80	0.65	チャート	
89	〃	3.1	1.0	0.4	0.83	0.1	66	0.55	砂岩	
90	〃	1.5	1.35	0.35	—	0.12	81	0.8	チャート	左側脚部

表７　石鏃計測表

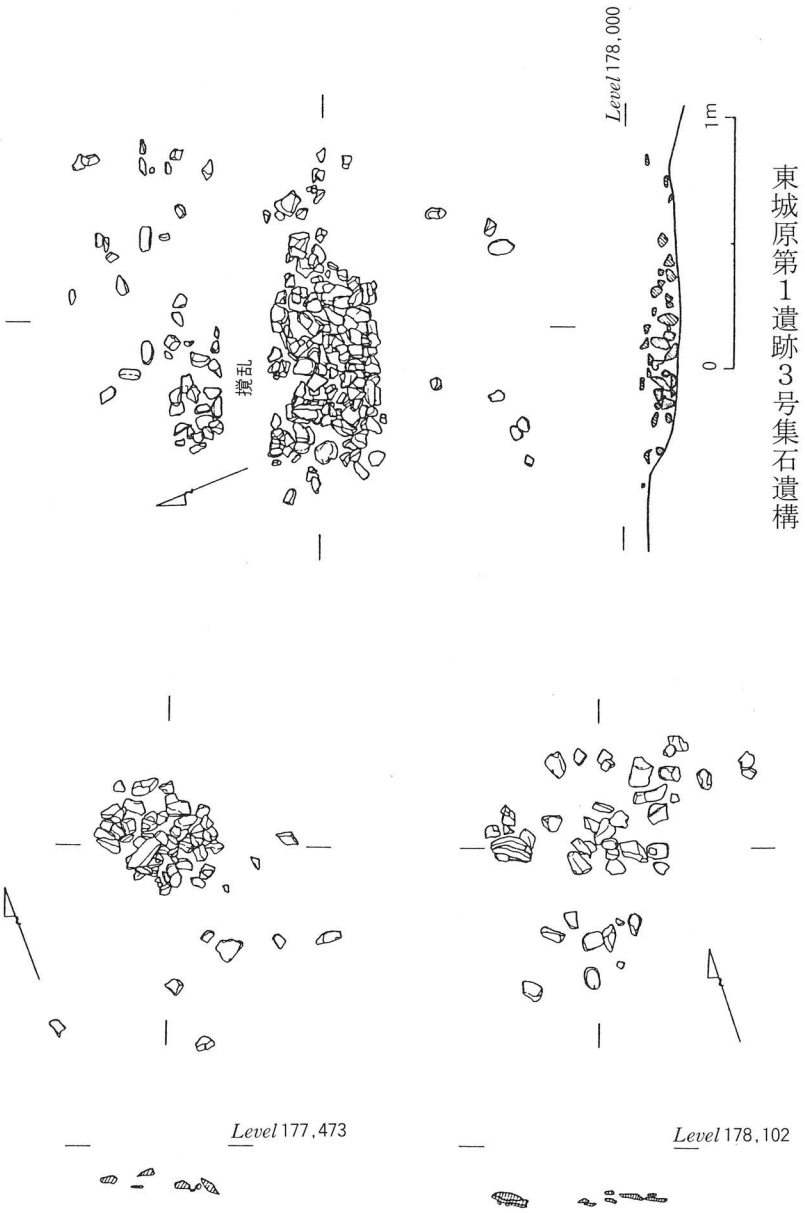
単位：cm

番号	出土遺跡	全長	幅	厚さ	抉り		先端角度	重さ	石材	破損状態
					幅	深さ				
91	ＵＢ-3	1.75	1.05	0.4			82.5	0.8	砂岩	
92	〃	1.85	0.9	0.4			75	0.6	砂岩	左側脚部
93	〃	2.15	1.0	0.45			82	0.75	チャート	
94	〃	1.5	1.3	0.45	1.4	0.2	—	1.25	砂岩	先端
95	〃	1.6	1.53	0.5			—	1.55	砂岩	先端
96	〃	1.5	1.0	0.3	—	0.5	—	0.4	チャート	先端 左側脚部
97	〃	2.4	1.2	0.35	1.05	0.3	58.5	1.25	砂岩	

東城原第１遺跡１号集石遺構

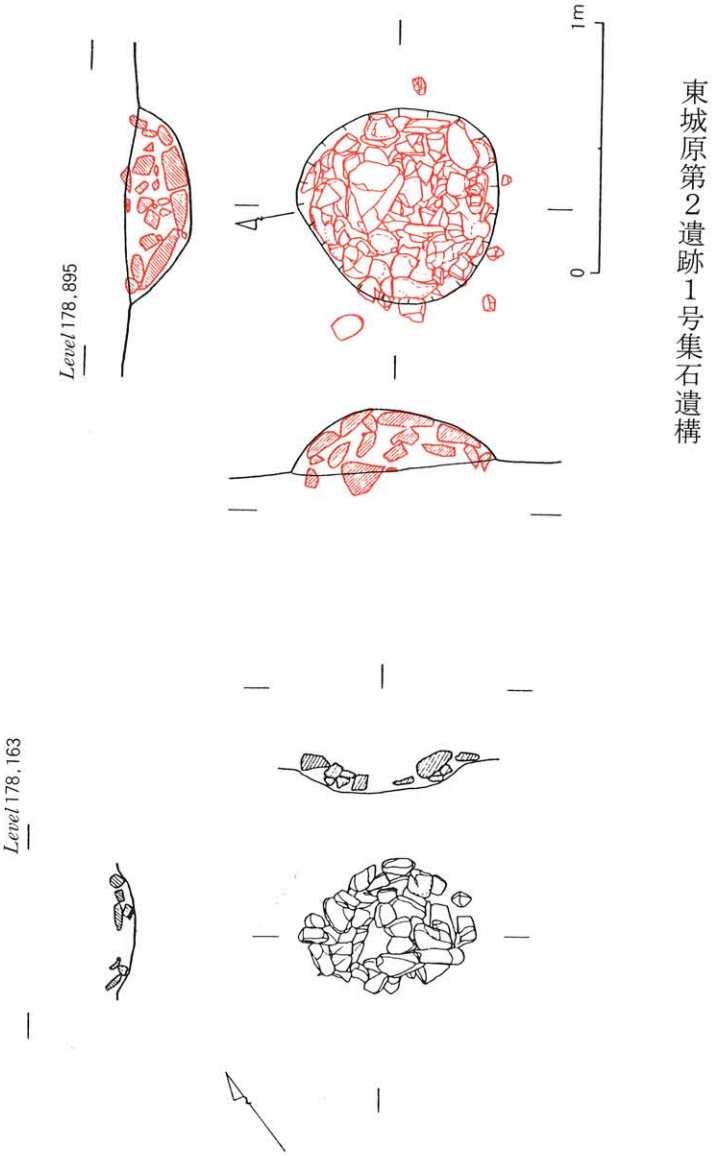
東城原第１遺跡２号集石遺構

第13図　集石遺構実測図 (1)



東城原第１遺跡４号集石遺構　　東城原第１遺跡５号集石遺構

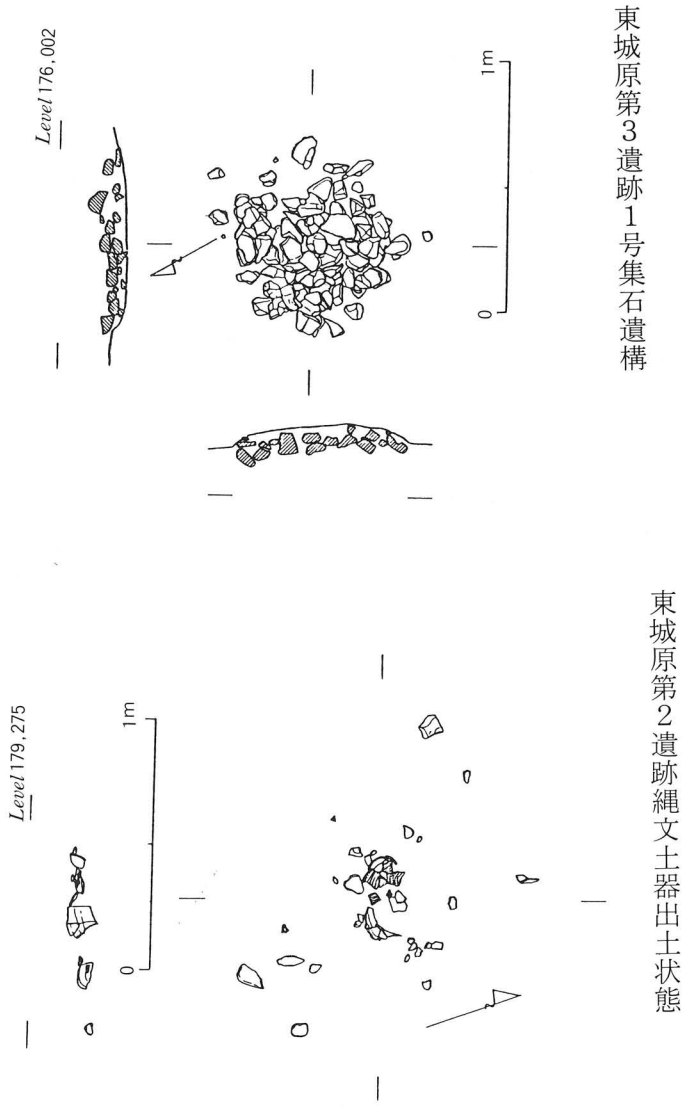
第14図　集石遺構実測図 (2)



東城原第2遺跡1号集石遺構

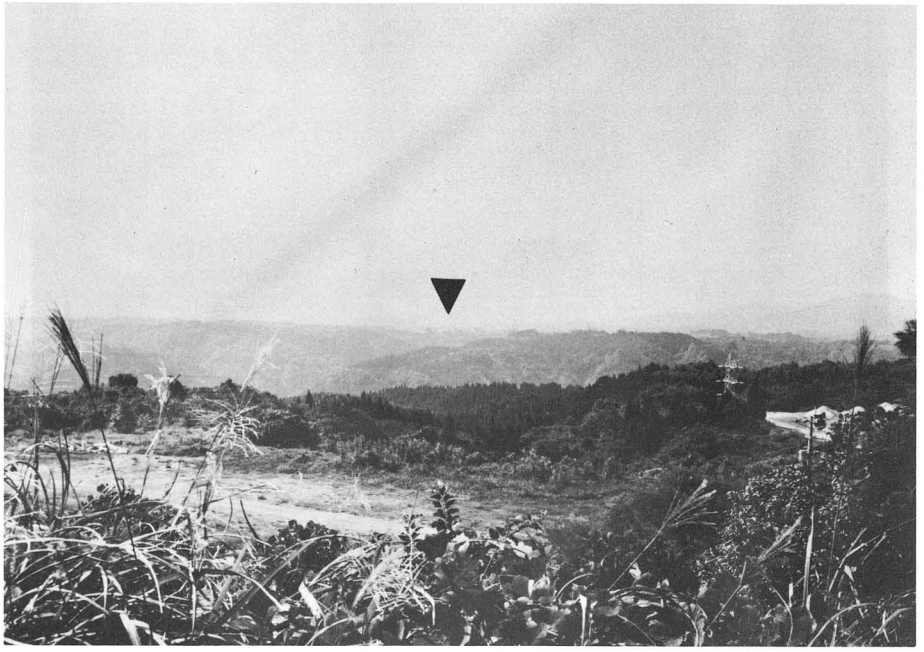
東城原第２遺跡２号集石遺構

第15図　集石遺構実測図(3)



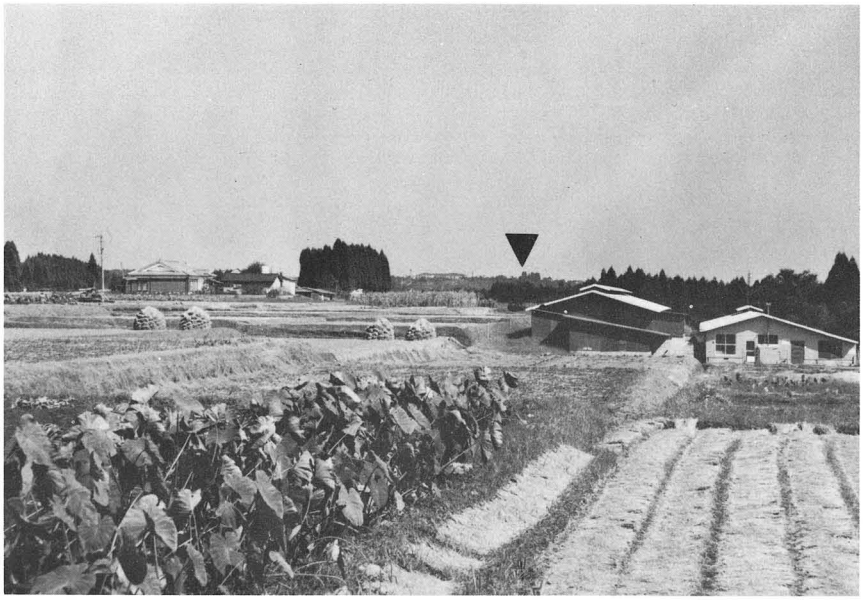
第16図　集石遺構及び縄文土器出土状態実測図

図　　版



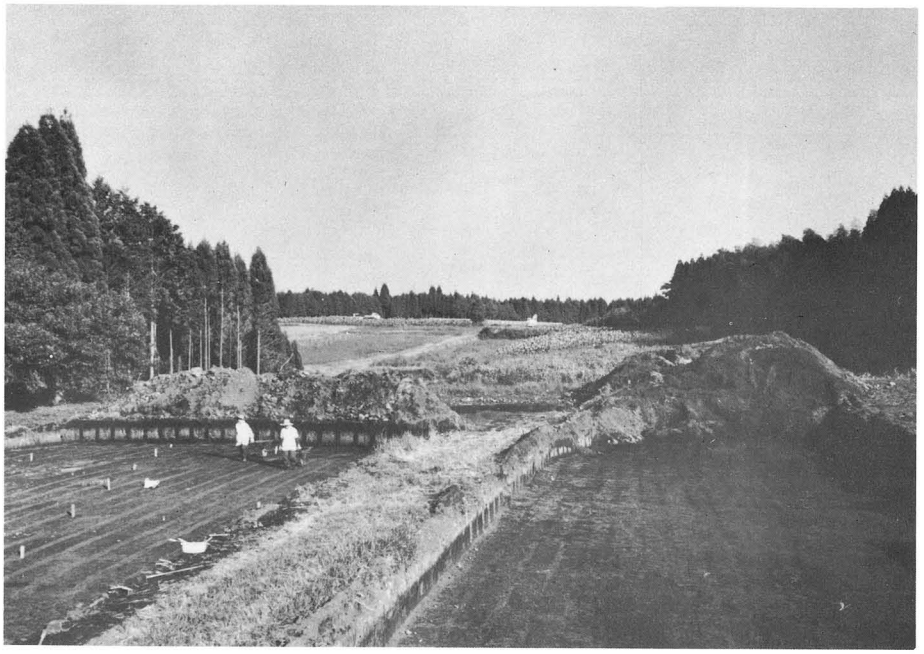
東城原遺跡群遠景（高原カントリークラブから西をみる）

東城原第 1（右）、第 2（左）遺跡遠景



東城原第 3 遺跡遠景

基本土層断面

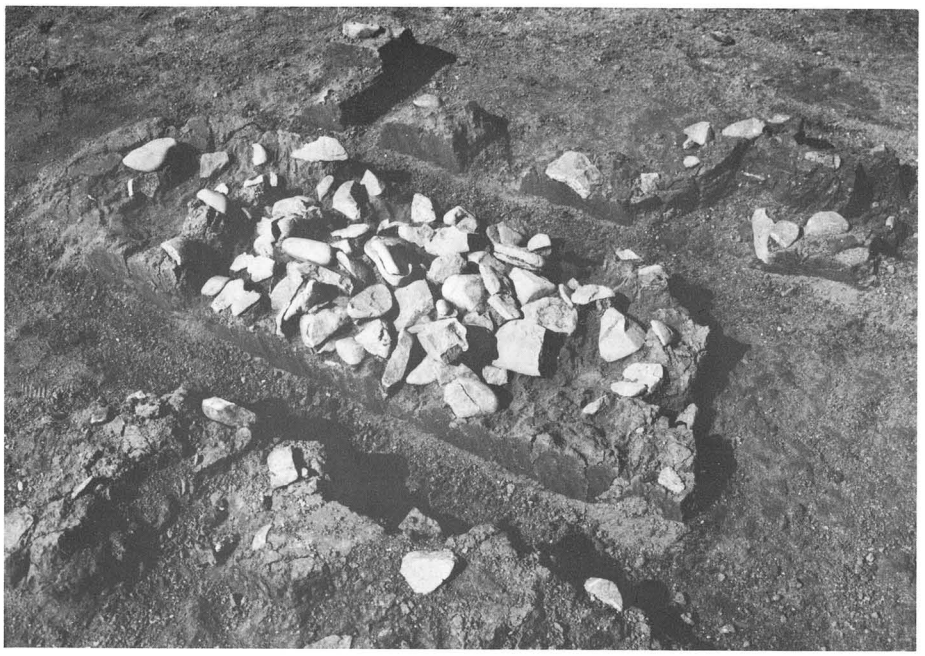


東城原第１（手前）、第２（奥）遺跡近・遠景

東城原第１遺跡全景

東城原第１遺跡西半分の状態（東から）

東城原第１遺跡東半分の状態（東から）

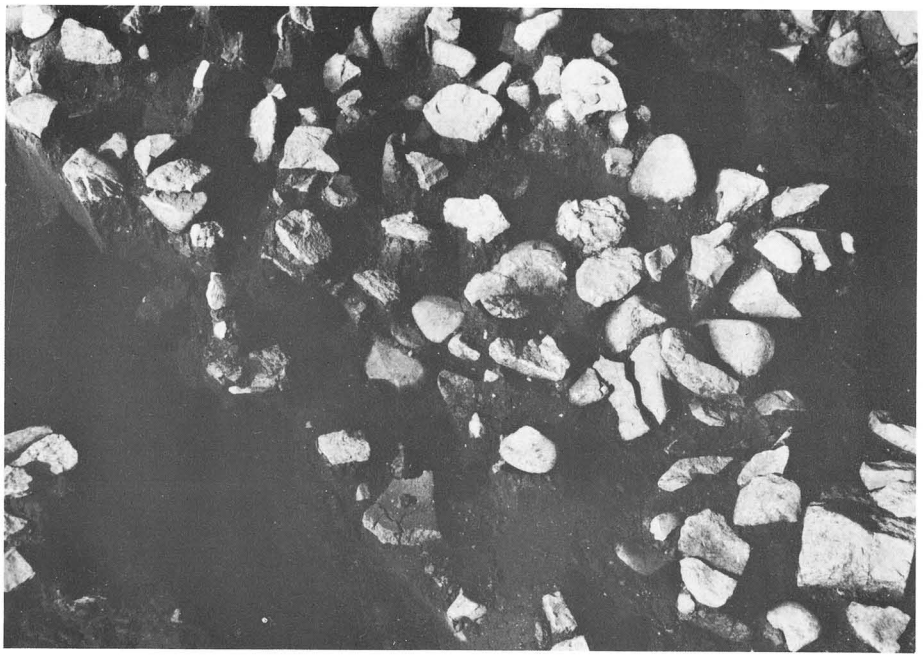


東城原第1遺跡1号集石遺構

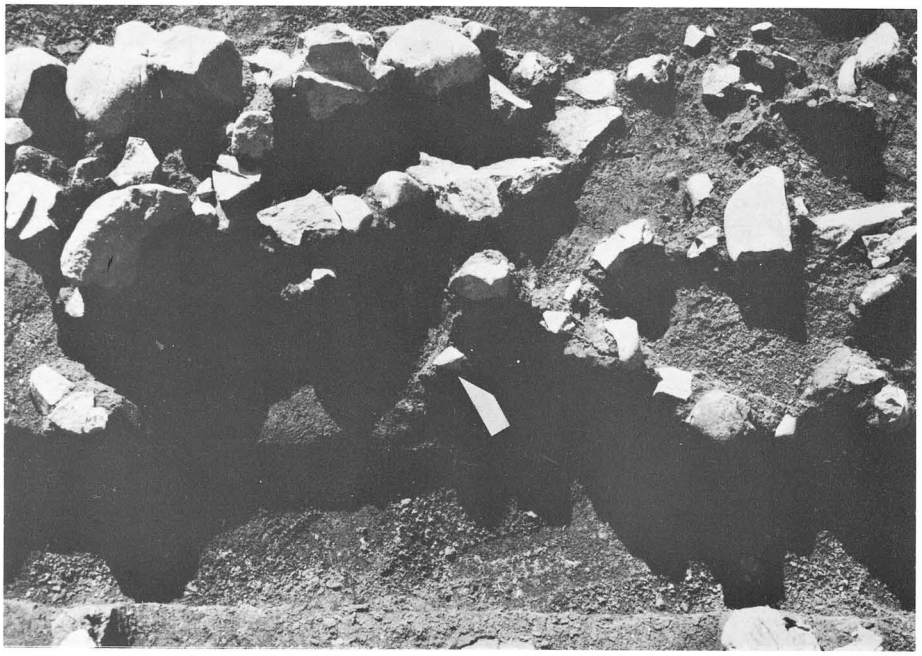
東城原第1遺跡2号集石遺構

東城原第 1 遺跡 3 号集石遺構

東城原第 1 遺跡 4 号集石遺構

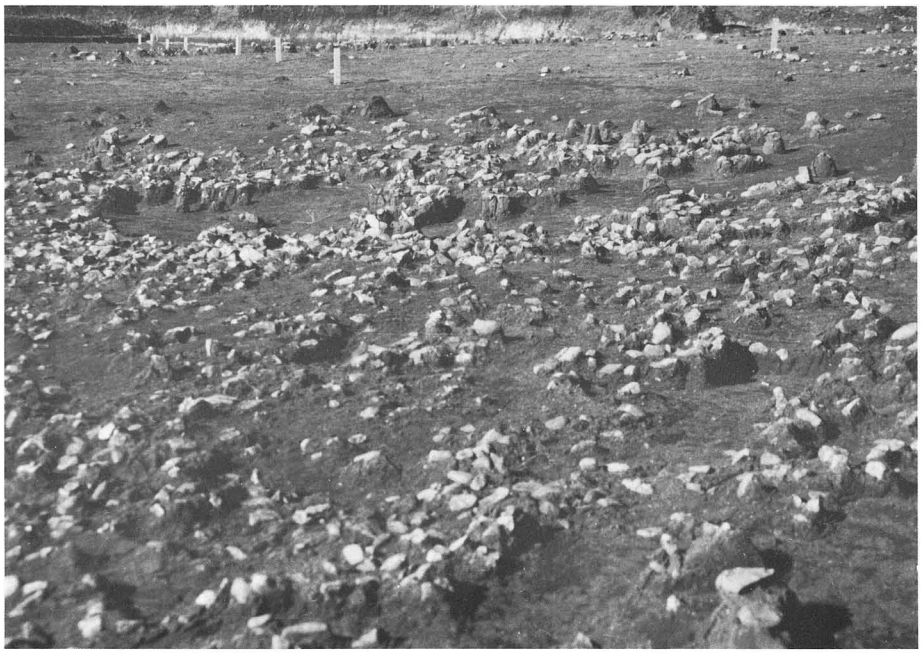


東城原第 1 遺跡縄文土器（第 6 図 1 ）出土状態



東城原第 1 遺跡細石核（矢印）出土状態

東城原第 2 遺跡近景

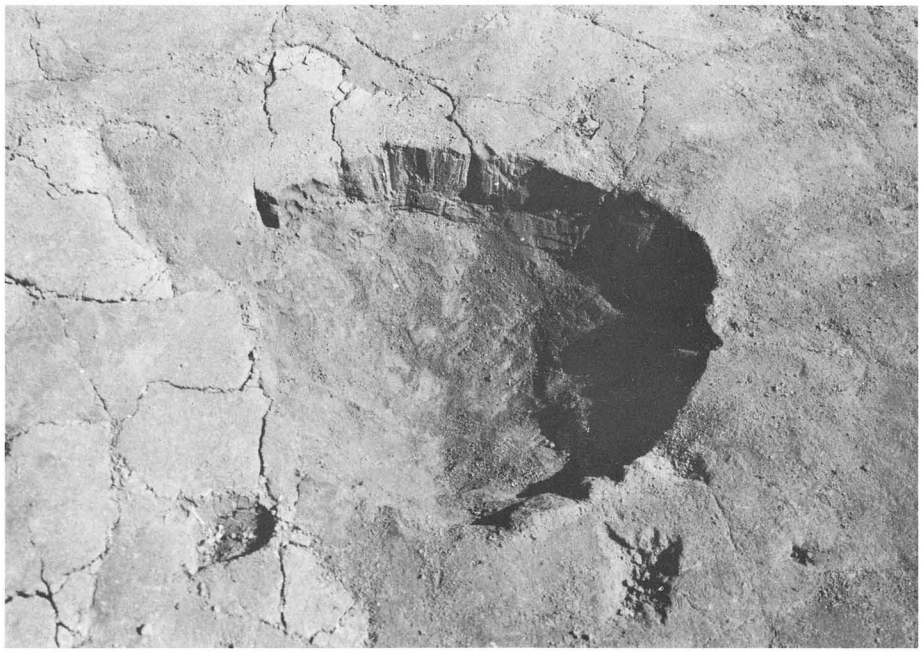


東城原第 2 遺跡散石の状態

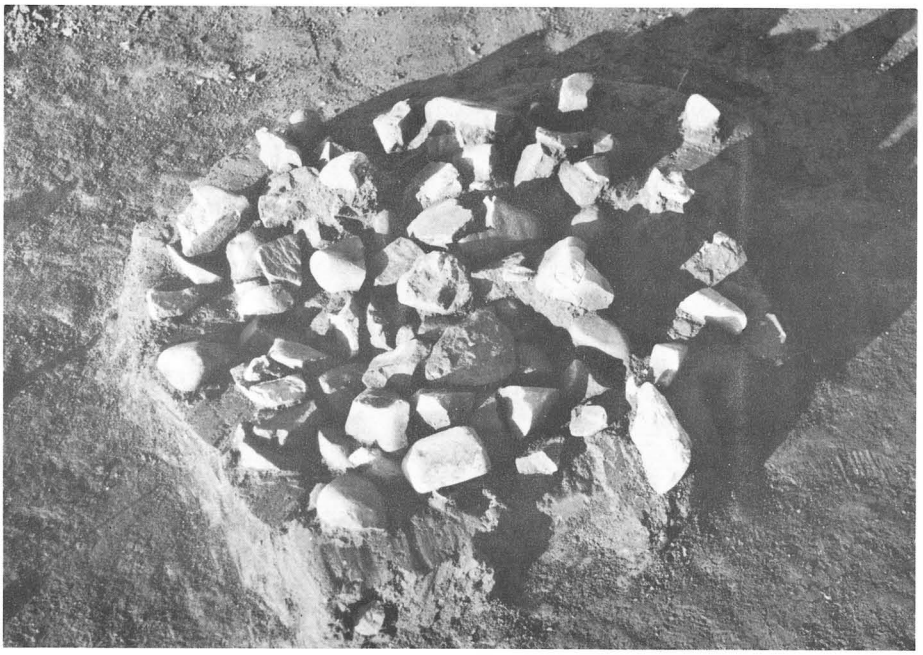
散石除去後検出された集石の状態

東城原第 2 遺跡 2 号集石遺構

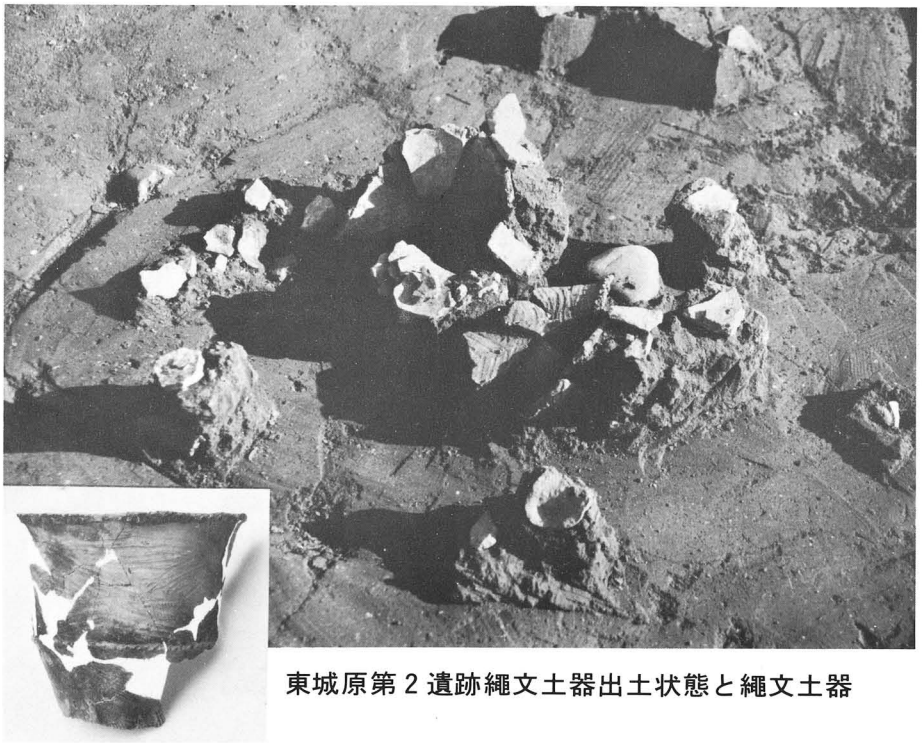
東城原第２遺跡１号集石遺構



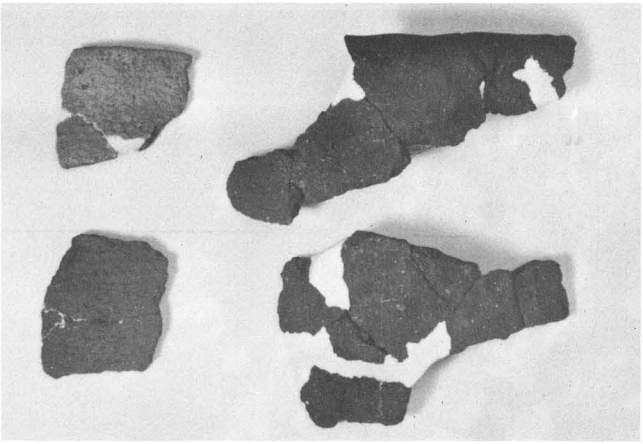
１号集石遺構礫除去後の掘り込み



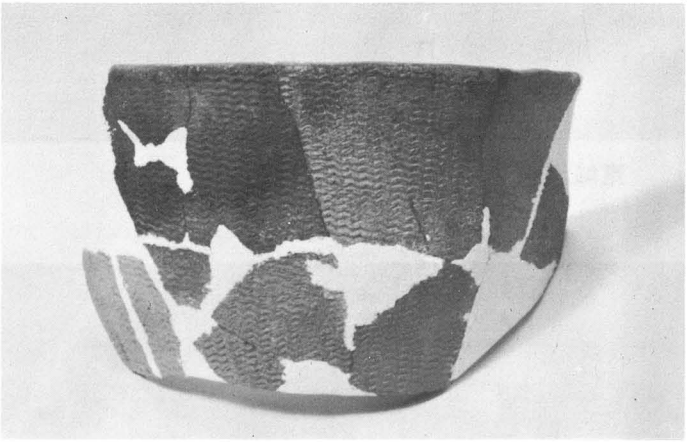
東城原第３遺跡１号集石遺構



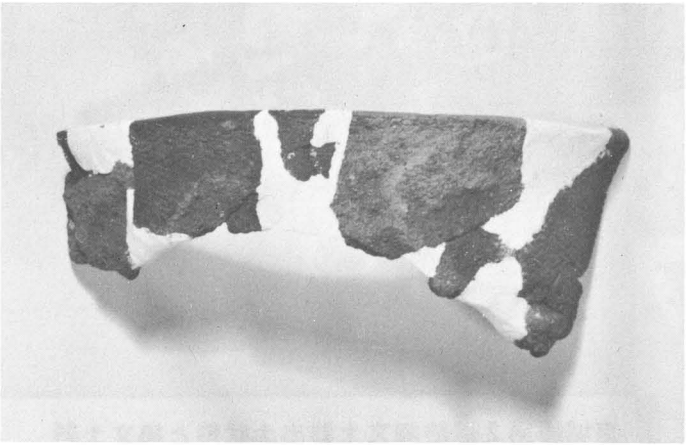
東城原第２遺跡縄文土器出土状態と縄文土器



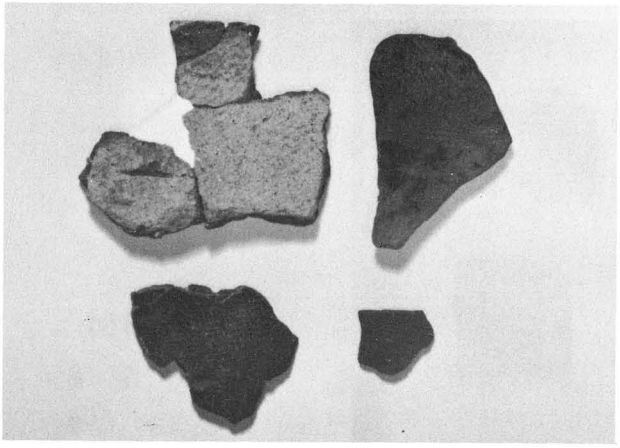
第４図
１　３
２　４



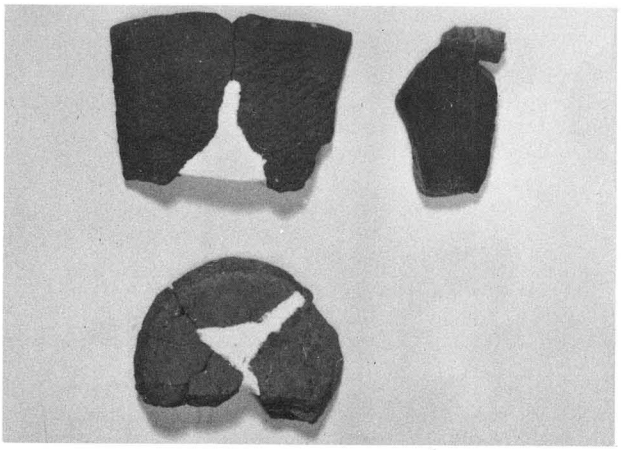
第７図１



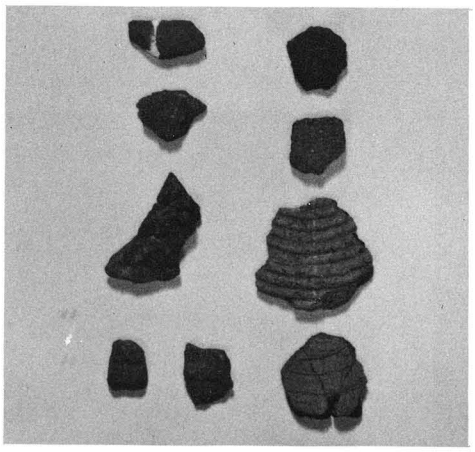
第７図２



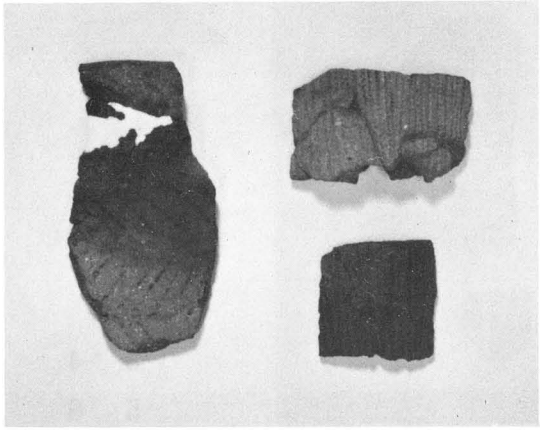
第７図
３　４
５　６



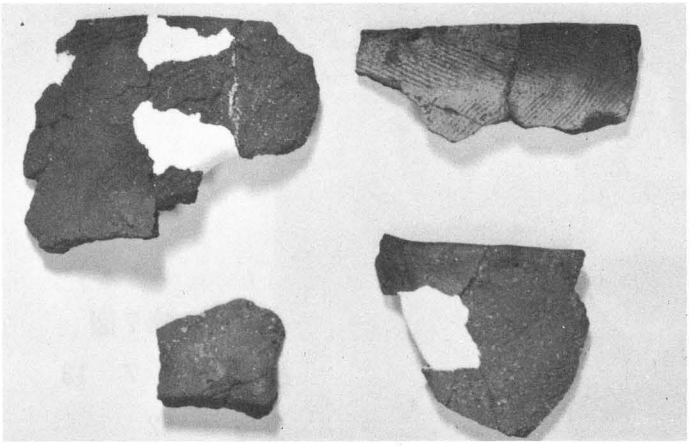
第７図
７　13
12



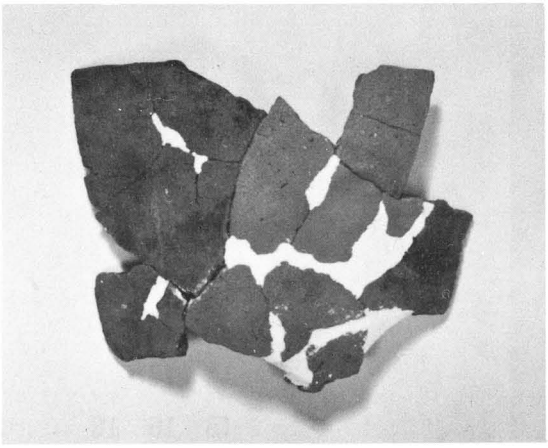
第７図
８　９
10　11
14　17
15　16　18



第８図
５　６
７

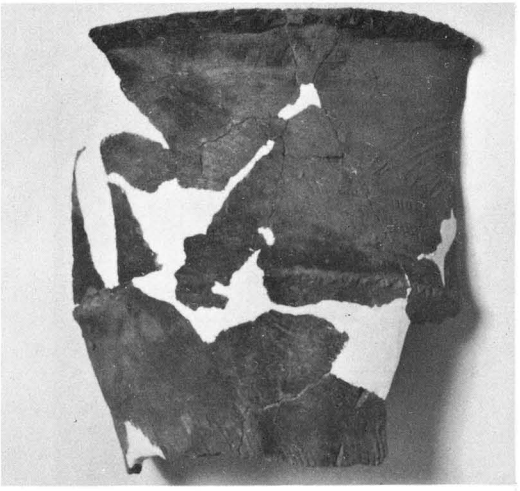


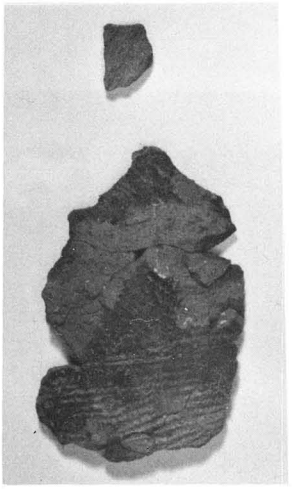
第８図
２　１
４　３

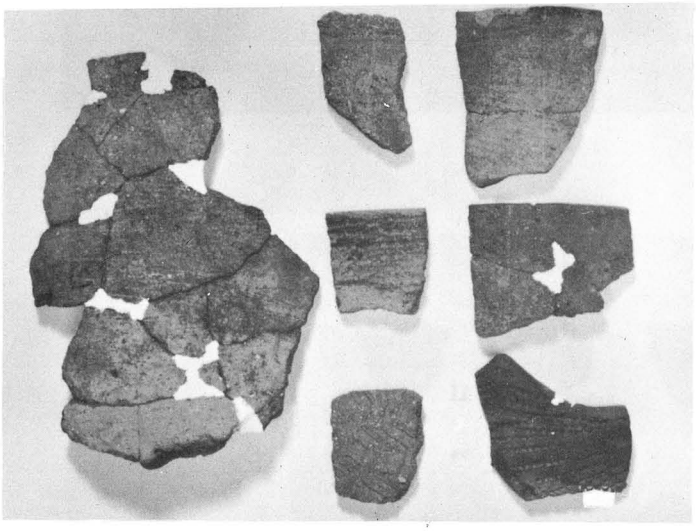


第８図
８　９

図版15







第９図

1　2

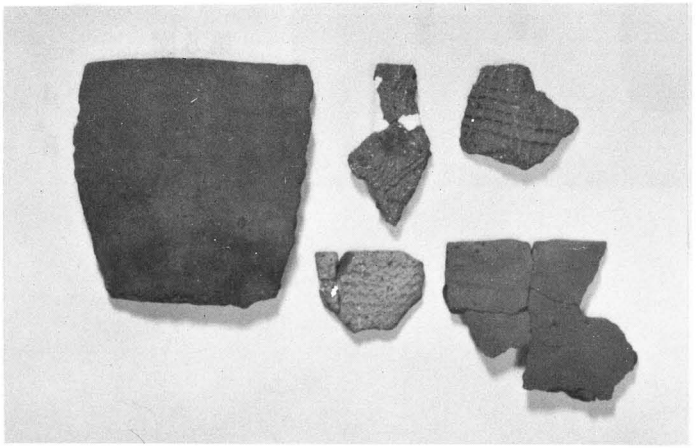
3

第10図

　　2　3

1　4　5

　　6　9



第10図

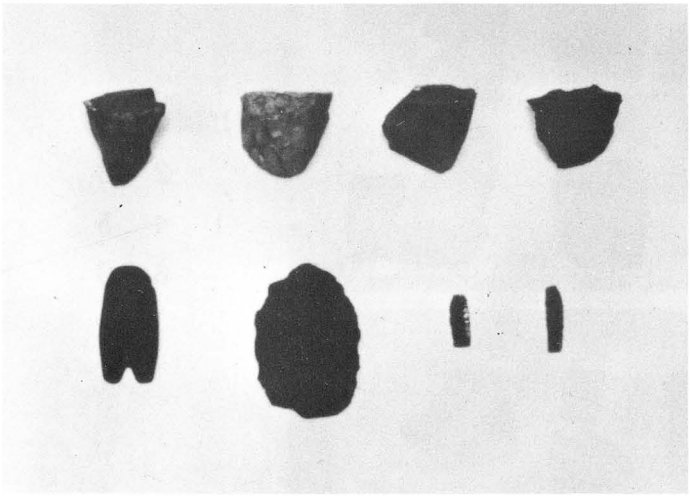
　　7　8

11　10　12

図版16

第

図



第５図

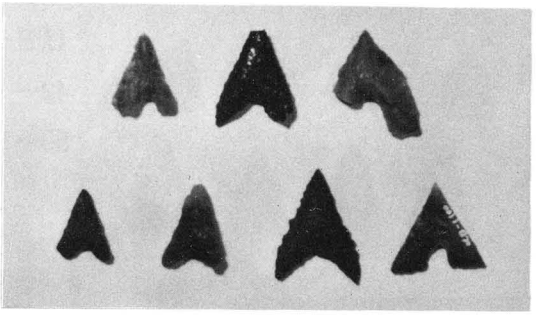
1　2　3　4

5　6　7　8

図版17

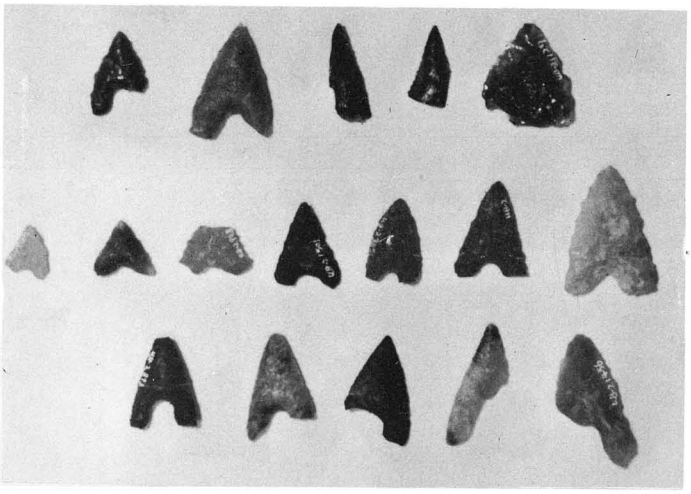
UB-1

1→
4→

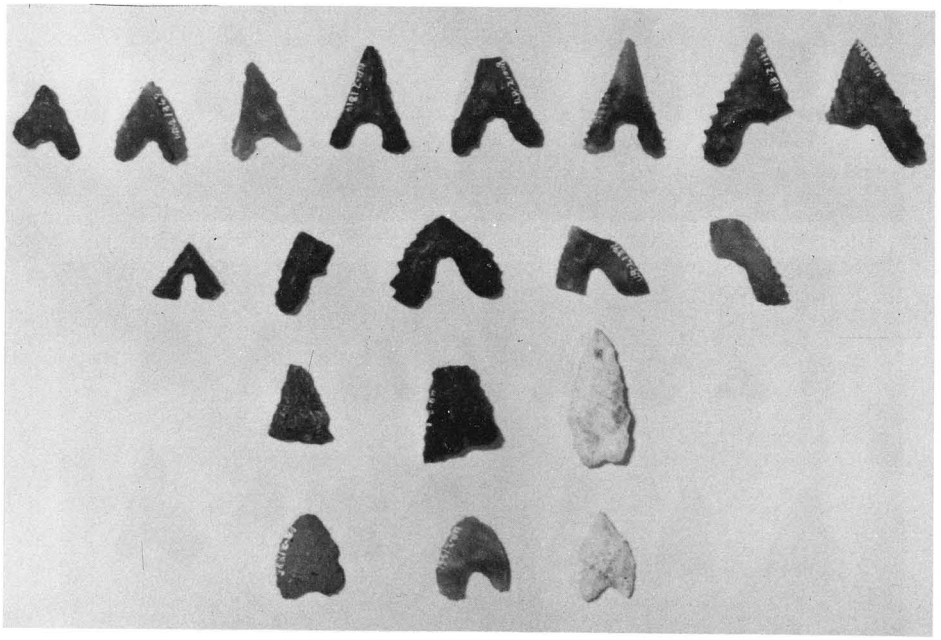


UB-2

8→
13→
20→



25→
33→
38→
41→

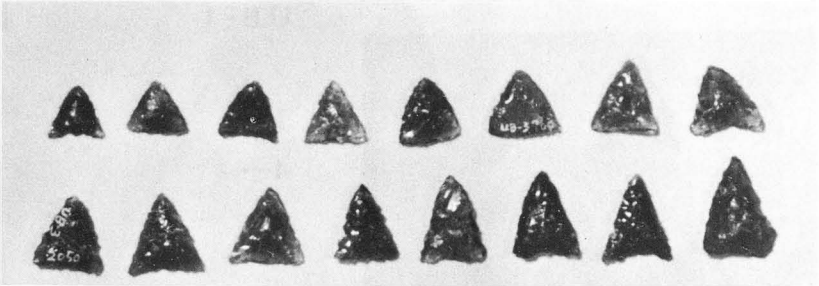


図版18

ＵＢ－３

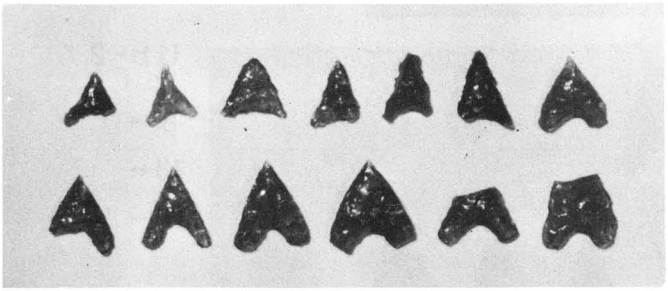
42→

50→



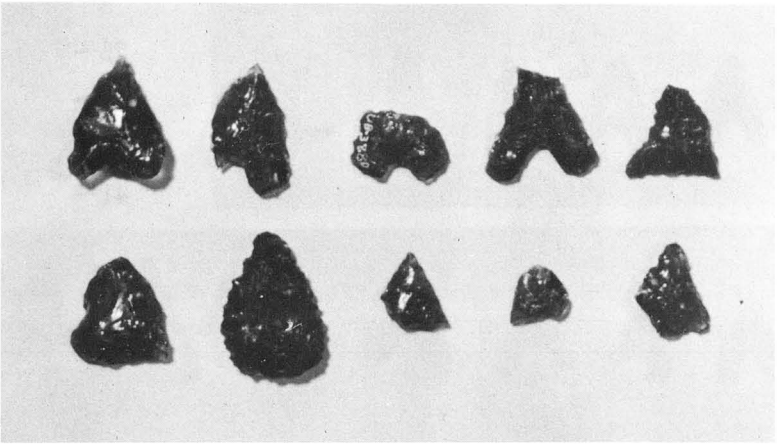
59→

67→



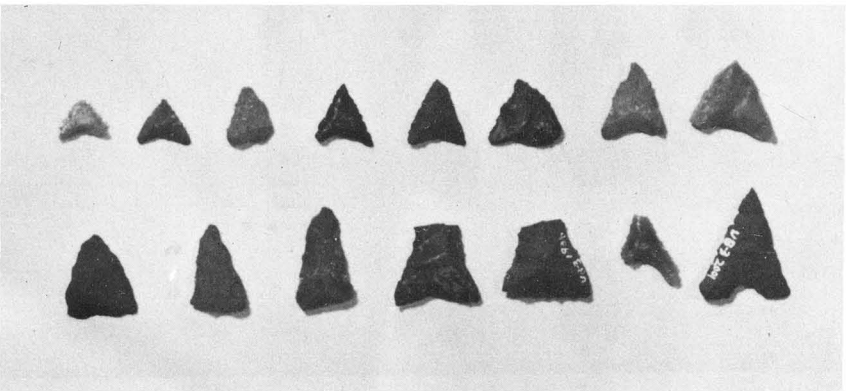
73→

78→



83→

91→



紙屋城址遺跡

本 文 目 次

第１章
第１節　調査の概要 …… 105
第２節　紙屋城と調査区の概要 …… 105
第３節　層　　位 …… 106

第２章　調査の結果
第１節　Ａ－１区の調査 …… 108
１．遺　　構（1.2.3号土壙・柱穴） …… 110
２．遺　　物（青磁・白磁・染付・瓦質土器・土師皿） …… 111
第２節　Ａ－２区の調査 …… 112
１．遺　　構 …… 115
２．遺　　物 …… 118
第３節　第２空堀 …… 123
第４節　第３空堀 …… 126
１．　第３空堀南区出土遺物 …… 127
２．　第３空堀出土遺物 …… 128
第５節　Ｂ－１区の調査 …… 129
１．遺　　構 …… 129
第６節　Ｂ－２区の調査 …… 135
１．遺構と遺物 …… 137
①　１号竪穴住居 …… 137
②　１号竪穴住居出土遺物 …… 137
③　２号竪穴住居 …… 142
④　２号竪穴住居出土遺物 …… 143
２．遺　　物 …… 148

挿　図　目　次

第１図　紙屋城〝郭〟配置図 …… 105
第２図　紙屋城址遺跡基本土層図 …… 106
第３図　紙屋城址遺跡全図 …… 107
第４図　１号土壙実測図 …… 108
第５図　Ａ－１発掘区遺構配置図 …… 109
第６図　Ｐｉｔ.1・17断面図 …… 110
第７図　２号・３号土壙実測図 …… 110
第８図　Ａ－１区出土土師器実測図 …… 112
第９図　Ａ－１区出土遺物実測図 …… 113
第10図　Ａ－２発掘区遺構配置図 …… 114
第11図　１号竪穴住居実測図 …… 115
第12図　１号土壙実測図 …… 115
第13図　１号土壙出土遺物実測図 …… 115
第14図　柱根の遺存する柱穴 …… 116
第15図　掘立柱建物実測図（１号・２号） …… 117
第16図　Ａ－２区出土輸入陶磁器（青磁・白磁・染付）実測図 …… 119
第17図　Ａ－２区出土陶器（壷・火鉢）・土錘・石鍋実測図 …… 120
第18図　Ａ－２区出土土師皿実測図 …… 121
第19図　第２・３空堀・土塁現況図 …… 123
第20図　紙屋城址第２空堀・土塁断面図 …… 124
第21図　紙屋城址第３空堀・土塁断面図 …… 125
第22図　紙屋城址第３空堀実測図 …… 126
第23図　第３空堀南区出土国産陶磁器実測図 …… 127
第24図　第３空堀南区出土輸入陶磁器実測図 …… 127
第25図　第３空堀出土遺物 …… 128
第26図　紙屋城址遺跡Ｂ－１発掘区遺構配置図 …… 130
第27図　１号掘立柱建物実測図 …… 131

第28図　2号掘立柱建物実測図 …… 131
第29図　3号掘立柱建物実測図 …… 132
第30図　4号掘立柱建物実測図 …… 132
第31図　5号掘立柱建物実測図 …… 133
第32図　6号掘立柱建物実測図 …… 133
第33図　7号掘立柱建物実測図 …… 134
第34図　8号掘立柱建物実測図 …… 134
第35図　紙屋城址遺跡B－2区遺構配置図 …… 136
第36図　紙屋城址遺跡B－2区1号竪穴住居実測図 …… 138
第37図　1号竪穴住居出土遺物実測図 …… 139
第38図　1号竪穴住居出土石器実測図 (1) …… 140
第39図　1号竪穴住居出土石器実測図 (2) …… 141
第40図　2号竪穴住居出土石器実測図 …… 141
第41図　2号竪穴住居実測図 …… 142
第42図　2号竪穴住居出土遺物実測図 …… 143
第43図　1号掘立柱建物実測図 …… 144
第44図　2号　〃 …… 145
第45図　3号　〃 …… 145
第46図　4号　〃 …… 146
第47図　5号　〃 …… 146
第48図　6号　〃 …… 147
第49図　7号　〃 …… 147
第50図　B－2区出土白磁・染付実測図 …… 148
第51図　B－2区出土坏・擂鉢実測図 …… 148
第52図　紙屋城〝郭〟配置図 …… 150

表　目　次

表　1　A－2区出土土師坏・皿計測表 …… 121
表　2　紙屋城検出掘立柱建物分類表 …… 154

第１章

第１節　調査の概要

昭和62年度県営圃場整備事業漆野原地区にともなう埋蔵文化財発掘調査としておこなった紙屋城址遺跡発掘調査は、紙屋城域内に所在する圃場整備対象耕地（第１・２・３郭）について実施した。調査地は第１郭の２箇所（B－１・B－２区）、第２空堀および土塁、第２郭の１箇所（A－１区）、第３空堀、第３郭の２箇所〔A－１区・第４空堀（仮称）〕である。

第２節　紙屋城と調査区の概要

紙屋城址遺跡は西諸県郡野尻町大字紙屋にある中世山城である。城跡は５つの郭を北から南に「S」字状に連続させて城域を形造る典型的な連郭式山城で、第１空堀から主郭まで約1,370mある。各々の郭は東西南面は険峻な急崖によって隔てられその急落する谷部には、東側、南側に秋社川、西側は城谷川が流れている。尾根部あるいは平坦部を断ち切って各郭部を区切っている空堀は、北端の第１空堀から、５郭直前の12空堀まで、12条を数える。第１空堀から第３空堀までは、平坦面を人工的に堀り切って構築されたもので、主郭側すなわち南側に土塁が構築されていたものと考えられるが、現在明瞭に残っているものは、第２空堀に付随する第２土塁のみとなっている。第５空堀から第12空堀は自然地形を巧みに利用したもので、急落する狭溢な谷部で断絶している。

第１図　紙屋城〝郭〟配置図

第１郭…第１空堀と第２空堀間にあって、約61,300㎡の面積を有し、各郭部のなかでもっとも広い。B－１区・B－２区の２つ発掘区である。

第２郭…第２空堀と第３空堀間にあって、11,100㎡の面積がある。郭内西側には舌状の平坦面があって、法性寺跡といわれて

いる。調査としては、第２空堀、第２土塁の農道となって断ち切られる部分について、断面の調査を行なっている他、A－１区発掘区を設定している。

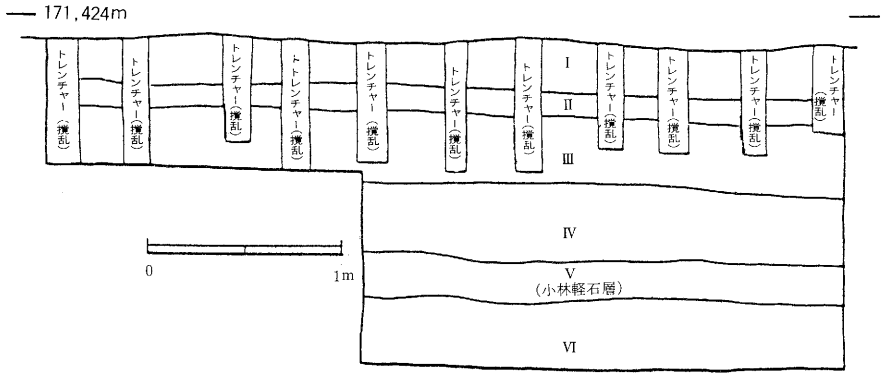
第３郭…第３空堀と第４空堀間にあって12,500㎡の面積がある。南端にA－２区発掘区を設け、第３空堀についても調査を実施している。

第４郭…第７空堀と第８空堀間にあって、7,500㎡の面積がある。主郭であるとおもわれる。通称、〝井戸平〟（ツリンデラ）といわれ、城跡に関連する井戸跡が残る。調査対象外区である。

第５郭…５ケ所の郭のうち最大の面積を有し、41,250㎡ある。５つの郭部のうち、もっとも標高が低く、平均標高160mほどである。調査対象外区である。

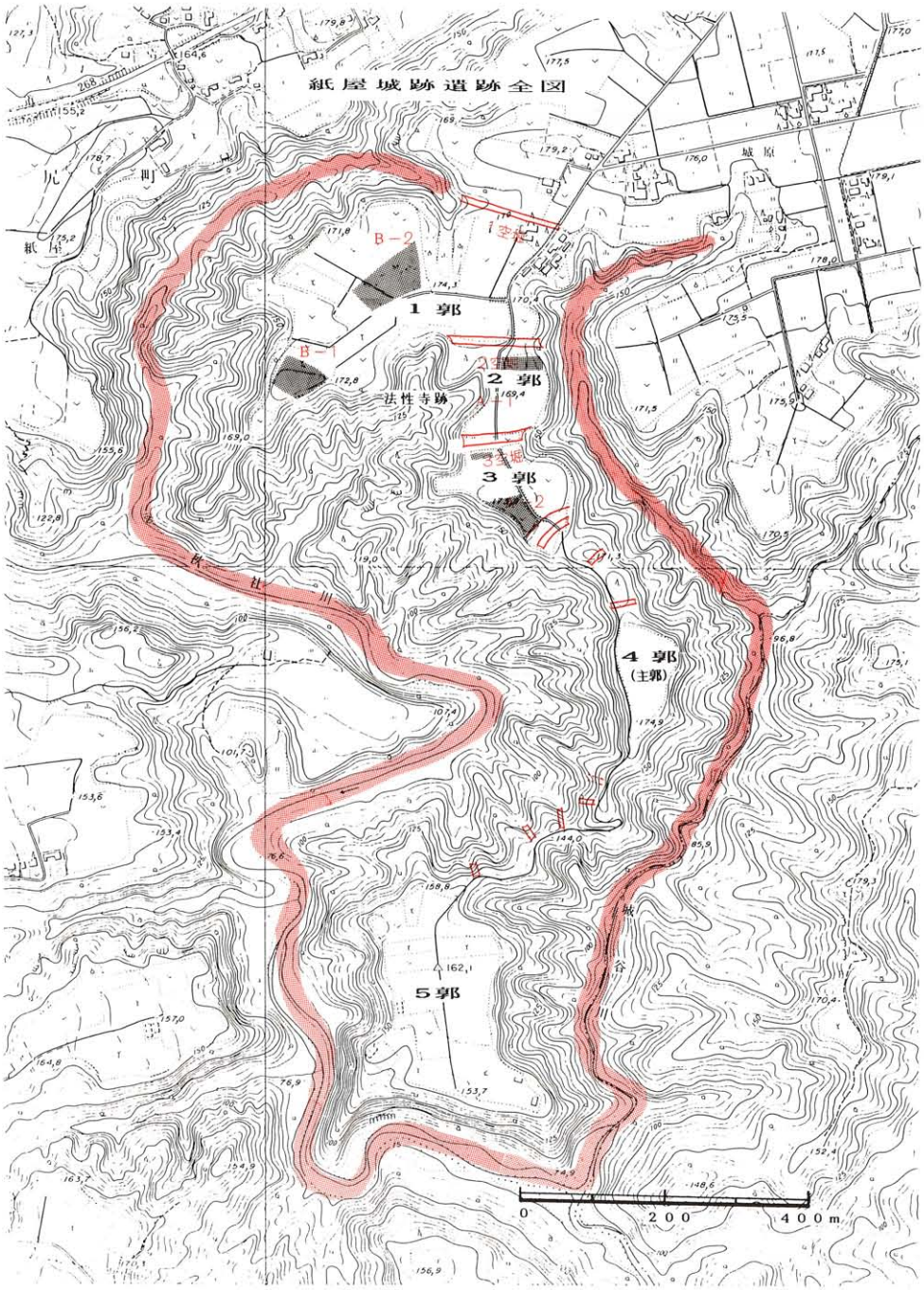
第３節　層　　位

紙屋城址遺跡の全発掘区の層序は、少なくとも考古学的な対象となる土層面までは、基本的には同一とみてさしつかえないものである。ここでは代表的な一例としてB－２区の土層断面図を掲載する。



I 層……赤ホヤ火山灰層である。降下火山灰層とおもわれ、最下層に比較的大粒のオレンヂハミス粒を含んでいる。橙色をしている。
II 層……漆黒粘質土。堅くしまる黒色帯。断面はテカテカ光る。III 層との層界は不明瞭でボーッとしている。
III 層……黒褐色土。極めて堅くしまっている。乾燥すると不規則にヒビ割れる。白色小粒を多く含む。
IV 層……暗褐色土。粘性のある堅くしまった層である。小粒のオレンヂハミスを時に含む。
V 層……灰褐色土。小林軽石層である。拇指大のオレンヂ色のハミスを多く含む。堅くしまっている。上下層との層界は極めて明瞭である。
VI 層……褐色粘質土。粒子の細かい粘土である。他層に比較してやわらかい。灰色の卵大ブロックを時に含み、赤橙色微粒をみる。
なお I 層はB.P6,000年～B.P6,300年前、V 層はおよそB.P12,000年前に降下したとされる火山灰層である。

第２図　紙屋城址遺跡基本土層図（A－２区）1／40



第3図　紙屋城址遺跡全図

第２章　調査の結果

第１節　Ａ－１区の調査

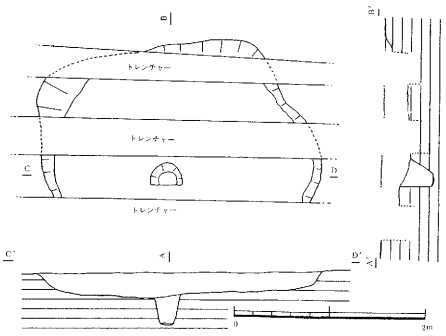
第２空堀と第３空堀にかこまれる部分、すなわち第２郭と考えられる範囲のうち比較的原地形の残存している部分、第２空堀付随の土塁から南へ20mに位置する1,206㎡を調査対象とした。調査区は東西に長く、第２空堀（第２土塁）に平行しており、西にゆるく傾斜している。赤ホヤ上層で剥いだ面は、東西方向に全発掘にわたってトレンチャーが通っており柱穴等の遺構を少なからず損傷している。

検出された遺構は、不定形の土壙、多数の柱穴である。柱穴のなかには、礫を充填するものが数個ある。柱穴中より出土した陶片、土師器片により、紙屋城址に関連した遺構であると考えられるが、掘立柱建物、その他の明確な施設をつかめていない。

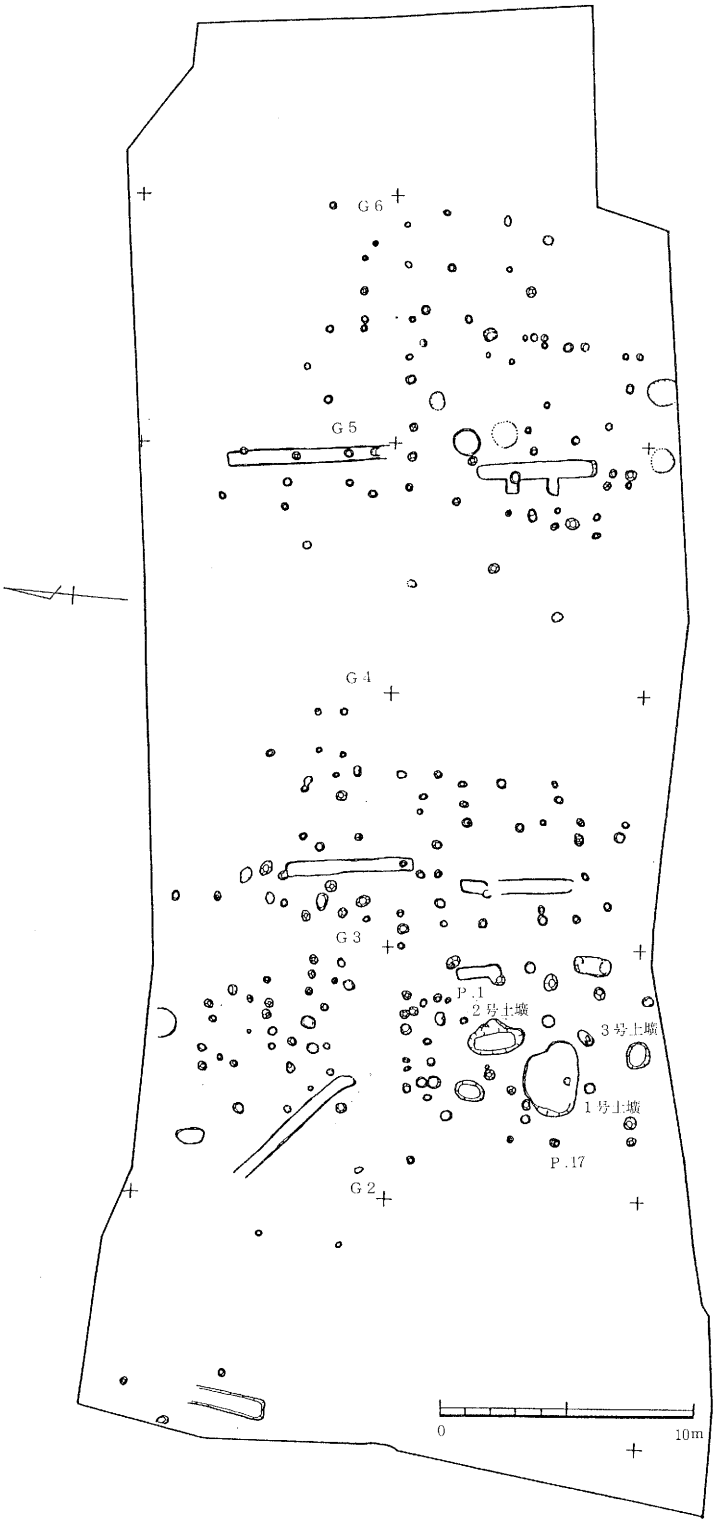
Ａ－１区から第２土塁間は、土取りのため深く削平されており（約１ｍ）調査対象としていない。

柱穴は約250を数える。そのうち遺物を埋土中に含むものが29個ある。内訳は土師器の坏、あるいは皿と考えられる小片を含むものが11個（Ｐ1．4．10．11．12．13．14．19．27．34．35)、うち明確に糸切り底と認められる小片を含むものが２個ある。（Ｐ34．Ｐ35）古銭（洪武通宝）はＰ10で一点出土している。陶磁器片を含む柱穴がもっとも多く14個ある。（Ｐ5．7．8．15．16．17．18．22．24．26．28．29．30．31)、その他、凝灰岩と焼礫を柱穴いっぱいに充填するもの（Ｐ1．17)、焼礫を含むもの（Ｐ24．25）などがある。

その他、不整形状の土壙がみられるが、いずれも性格不明である。



第４図　１号土壙実測図



第５図　Ａ－１発掘区遺構配置図（1／300）

1．遺　構

①１号土壙（第４図）

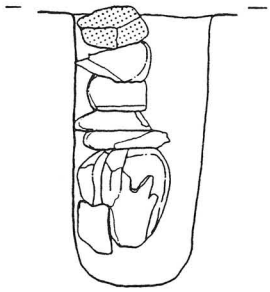
長軸2.98m、短軸1.68m（現長）、深さ28cmを測り、不整な円形を呈する。土壙２に隣接している。南よりのピットは、この土壙とは時期を異にするものである。

②２号土壙（第７図）

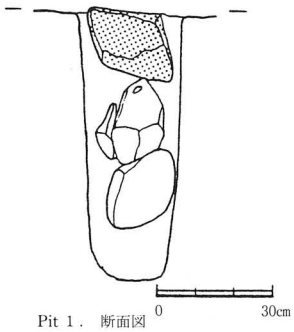
長軸2.36m、短軸0.62mの不整形長楕円形の平面形をもち、２つのPitが西側端を切っている。土壙底は長方形プランを呈して、長辺2.0m（推）、短辺0.62mを測る。検出面からの深さ89cmある。埋土中からは何らの遺物も検出していない。

③３号土壙（第７図）

長軸1.07m、短軸0.94m、深さ0.3mを測り、平面形不整楕円形を呈す。土壙底に拳大の砂岩円礫が一点あり、底はカシワバン（第５層）となる。



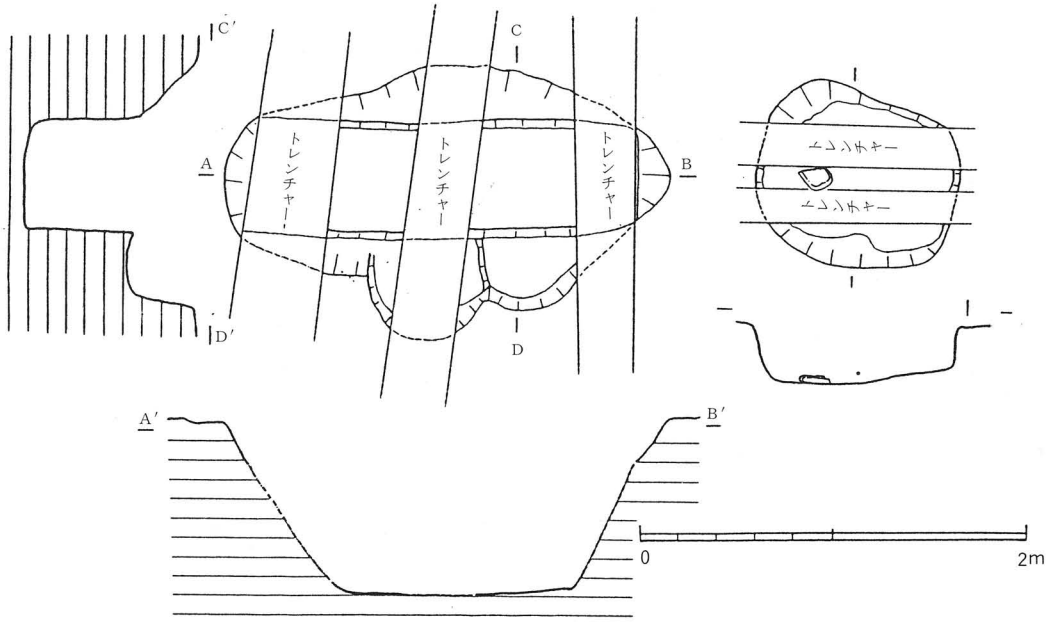
Pit .17断面図（1/20）



Pit 1．断面図

（スクリントーン部分は軟質凝灰岩・他は焼けた砂岩）

第６図　Pit1.17断面図



第７図　２号・３号土壙実測図A－１区１／40

④柱穴１．（第６図）

Pit １は直径28cm、深さ71cmを測るもの。中に砂岩（硬質）円礫が２点、うち上位にあるものは小さな窪みがある。いずれも焼礫で赤褐色を呈する。最上部は軟質凝灰岩（通称灰石）がのる。検出面は赤ホヤ火山灰層で、カシワバン層まで掘られている。埋土は細粒の赤ホヤブロックの混るサラサラした暗褐色土である。礫は意図的に投入、あるいは組み込まれたものとおもわれる。

⑤柱穴17．（第６図）

Pit 17は長径37cm、深さ73cmを測る。Pit 中に人為的につまれたとおもわれる礫が詰まっている。底には18cm×26cm大の楕円礫が立てられて、合計８点くらいの破砕礫がつまれる。すべて熱を受けて赤化している。最上位は軟質凝灰岩である。

２．遺　物

①青磁（第９図１）

口径10.5cmと小形の青磁稜花皿。完形ではないが、口縁から底部まで遺存する。焼きが不良で、不透明な灰緑色の釉色を呈する。見込は露胎で黒褐色をしている。15世紀後半から16世紀中葉にかけてのもの。

②白磁（第９図２）

白磁皿の底部である。高台脇まで施釉あり、高台内は露胎となる。

③染付（第９図３．４．５．６．７．８．９）

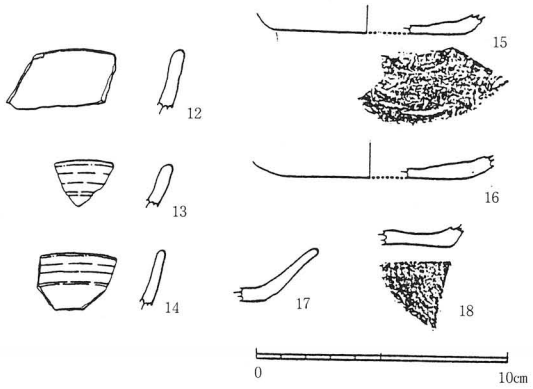
３．は景徳鎮窯系の染付碗。推定口径9.0cmを測る。15世紀末から16世紀中葉。５．は同じく景徳鎮窯系碗の高台内部で〝大明年造〟銘がみえる。16世紀。6.はこれも景徳鎮窯系、染付蓮子（レンツー）形碗である。外面縁部に波涛文、腰部に蕉葉文がめぐる。15世紀末から16世紀中葉。７．は染付碁笥底皿。見込に花文、外面腰部に蕉葉文あり。畳付部は露胎となるが、内は施釉している。15世紀後半から16世紀中葉。景徳鎮窯系である。８．はピット中より出土した染付皿。内外側面に蓮弁文を陽刻している。16世紀前半から中葉。景徳鎮窯系である。９．は小形の染付皿、これもピットから出土したもの。見込に玉取獅子文、外面は唐草文であり。内側は釉がやや不透明。高台内は施釉され、露胎は畳付部のみとなる。15世紀末から16世紀中葉とおもわれる景徳鎮窯系。

④瓦質土器（第９図11.）

印花文を施した火鉢かとおもわれる。内外面、黒灰色。内面は粗いナデ仕上げである。

⑤土師皿（第８図12. 13. 14. 15. 16. 17. 18）

12～18は土師皿である。いずれもPit中から出土した。18は糸切底。15はヘラ切り底を呈す。

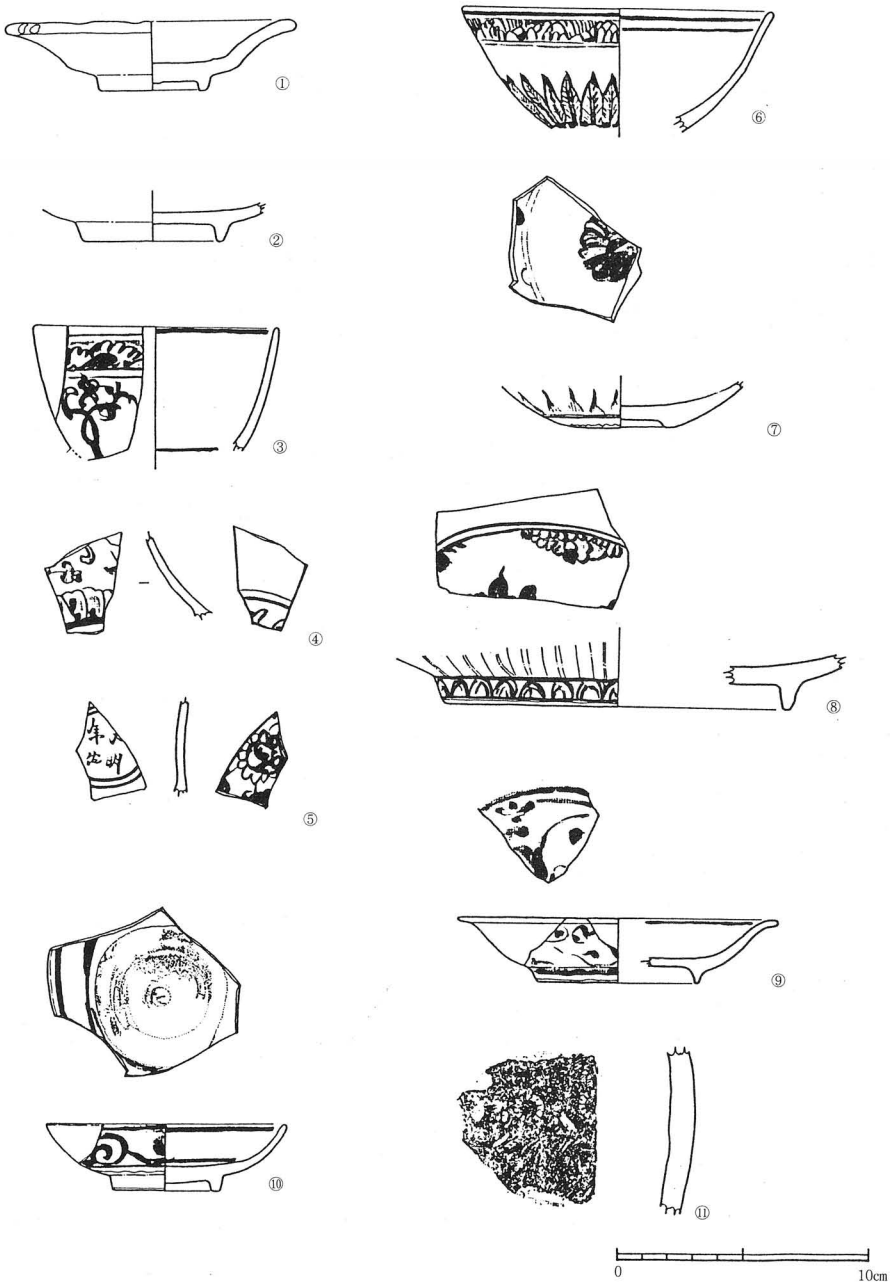


第８図Ａ－１区出土土師器実測図（１／３）

第２節　Ａ－２区の調査

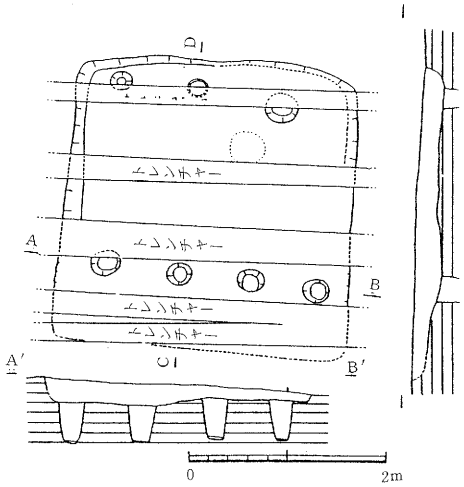
Ａ－２区として調査を実施した箇所は、第３空堀と第４空堀によって区切られた第３郭と考えられる約12,500㎡のなかの南端部に位置している。これは、Ａ－１区から南に約230m離れており、標高は173.8mあって第３郭のなかでは最も高く、したがって原地形を最もよく残している箇所であると考えられた。試掘によれば、予想されたとおり、耕作土下の赤ホヤ火山灰層をはじめとする基本層位は残存し、全面にわたるトレンチャー痕を除けば最良の状態であった。なお、この発掘区を除く第３郭の他の部分は程度に差こそあれ、幾ばくかの削平を受けて遺構、遺物の包含層まで深く削平されている。

調査は、重機によって耕作土を全面にわたって剥ぎ、後に人力によって赤ホヤ面まで下げて遺構、遺物の検出にあたっている。遺構は主に南側を中心に、柱立柱建物、柱穴、土壙を中心とする遺構を検出し、中央部付近において竪穴住居（おそらく中世）一軒が検出されている。遺物は輸入陶磁器（染付）、国産陶器、土師器（坏類）が中心で、いずれも、直接的に城址に関係する遺構、遺物である。

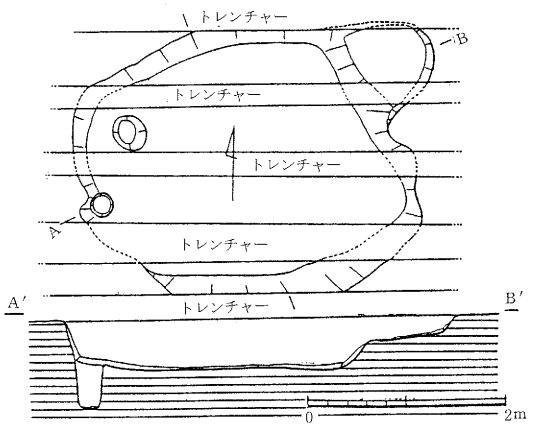


第９図　紙屋城址Ａ－１区　出土遺物実測図（１／３）

第10図　A－2発掘区遺構配置図（1／400）



第11図　1号竪穴住居実測図（1/40）

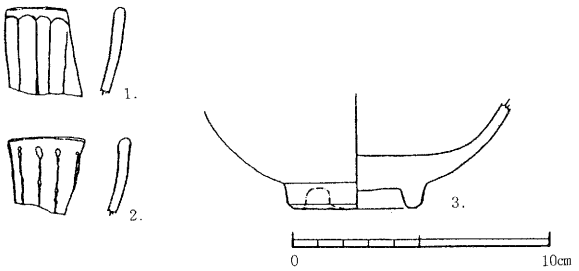


第12図　1号土壙実測図（1/40）

1．遺　構

①1号竪穴住居（第11図）

A－2区　一辺290cmを測る正方形の竪穴住居址である。全体を南北方向にはしる幅25～40cmのトレンチャー5本によって切られており西辺は検出できていない。検出面（赤ホヤ上層）から床面までの深さ10～25cmほどあり、中央から南東寄り径35cmの範囲で焼土面を検出している。柱穴は、西側に4孔、東側に3孔平行してみられ、それらは径25cm、深さ約40cmとほぼ同形を呈する。柱穴埋土は明灰褐色のサラサラしたもので、炭化粒を若干含む。本住居址においては、埋土、床面、柱穴のいずれにも遺物を検出していない。

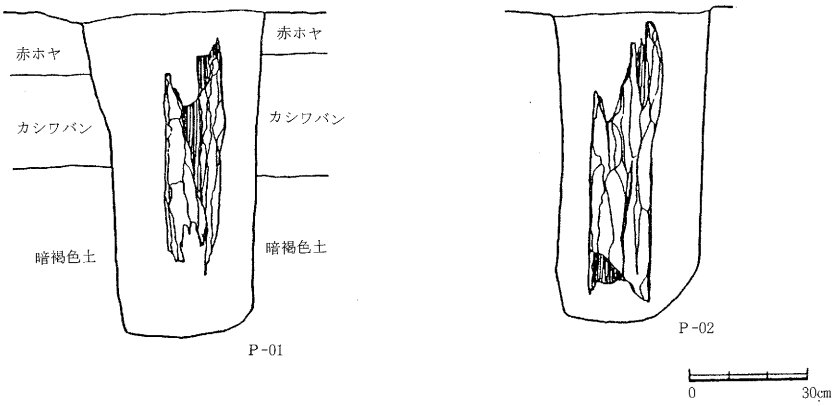


第13図　1号土壙出土遺物実測図（1/3）

②1号土壙（第12図）

発掘区の北西端で検出された不整楕円形の土壙である。これも、東西方向5本のトレンチャーで切られている。埋土は明赤褐色の粘性の少ない土壌で、赤ホヤ層との見極めが曖昧であった。規模は長径3.55m、短径2.7m（推）ある。東側に深さ30cmの半円形の張り出しがあって段をつくり、床面はフラットとなって、深さは約60cmある。床面西側隅に柱穴が2孔みられる。

埋土中に、青磁片3点が出土している。(13図）これらの青磁片は、いずれも二次的加熱を受けて釉が変質している。しかし、この土壙の埋土、あるいは床面、壁面等には火を受けた形跡は見受けられない。土壙自体の機能・性格は不詳である。



第14図　柱根の遺存する柱穴（A－2区）

③柱根を残す柱穴（第14図）

発掘区の南側、ＳＢ１・２近くで検出した柱根を遺存する柱穴である。Ｐ.１は、径45cm、深さ82cmの柱穴で柱穴底はフラット、赤ホヤ・カシワバンをつらぬいて暗褐色の粘質層まで穿たれている。柱根は中心部がすでに腐ってなくなり、外皮のみ遺存して円筒状となる。遺存長約60cm、径15cmである。柱穴埋土は、赤ホヤの混在する黒褐色土で粘性の少ないものである。Ｐ.2は、Ｐ.1とほぼ規模を同じくし、径40cm、深さ83cmである。この柱根も同じく、円筒状に遺存して、長さ75cm、径18cmを測る。柱穴埋土もＰ.1と変わらない。(樹種同定については末尾分析結果を参照されたい。)

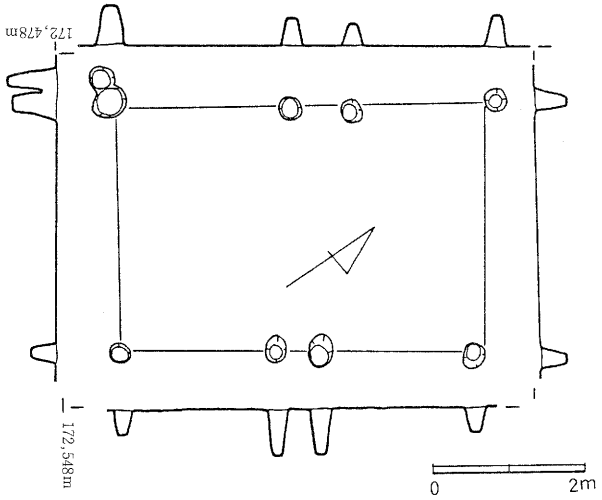
A－2区

④一号掘立柱建物（第15図）

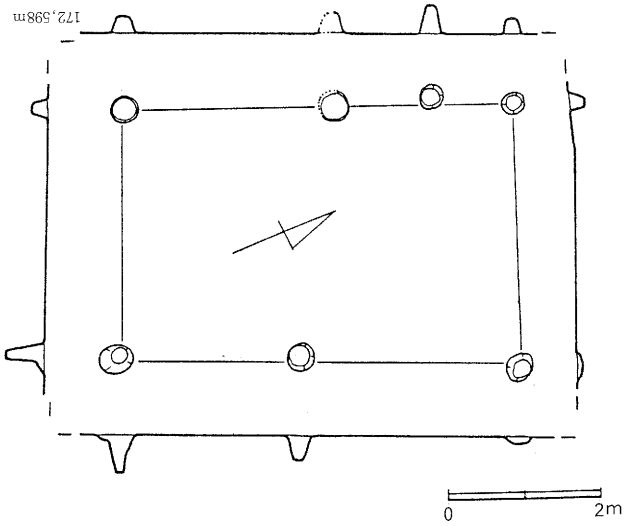
発掘区の南寄りにあってＳＢ２に隣接する。３間×１間の建物であるが桁行の中央柱２本が極めて接近して建てられており、その２本も西側桁と東側桁のそれとでは対応せずややずれている。柱穴の径28～34cm、深さ35～64cm。桁行の柱間寸法は0.8m（中央の２柱間）と2.0mで全長5.2m、梁間は3.3mを測る。桁行方向N55°Ｅ、床面積17.16㎡である。

⑤二号掘立柱建物（第15図）

ＳＢ１の西隣りにあって、桁行方向がＳ67ＥとＳＢ１よりにやや北にふれる。２間×１間の建物で、規模はＳＢ１とほとんど同じである。桁行の中央柱が東側と西側とでは対応せず、これもややずれがみられる。柱穴径の平均30cm、深さ20～54cmを測る。桁行の柱間寸法は2.4mと2.9mで全長5.2cm、梁間は3.2m（南側）と3.5m（北側）で床面積は17.16㎡である。



1号掘立柱建物



2号掘立柱建物

第15図　掘立柱建物実測図（1号・2号）1/100

2．遺　物

①１号土壙出土遺物

青磁碗（13図1.2.3）

1.口縁部を欠き、腰から底部が遺存する。外側にも、見込にも陽刻、陰刻文なし。畳付、高台内が露胎となる。二次的加熱も受けており、釉は艶がなく磨ガラス状で明灰緑色を呈す。高台は面取りされており、高さも比較的高く、見込の器厚は1.3cmと肉厚である。

2.3.口縁部のみ遺存する。線刻によって蓮弁を表現するもので、３．はさらに簡略化したものとおもわれ、蓮弁間のつながりがない。いずれも、口縁部は丸く、その厚さは器厚よりも厚くつくられている。これ等も二次的加熱をうけており、２．は灰褐色、３．は明灰色で、内外に貫入が著しい。

②Ａ－２区発掘区内出土遺物（遺構にともなわないもの）

青　磁

稜花皿（1.2.3.4）

第16図1.～4.は青磁稜花皿である。いずれも小破片で、全形は推定である。1.2.4.は内に陰刻花文がみえる。3.は内に花文なく、釉は褐色に発色し、胎土に白色粒が混入している。1.2.3.は内外に細かな貫入がみられるが、4.にはみられない。

碗（5.6）

5.は青磁碗片。内に陰刻花文。6.は線刻による剣先蓮弁文碗の腰部。内に線彫文があり、内外に貫入がみられる。15世紀後半～16世紀中葉。

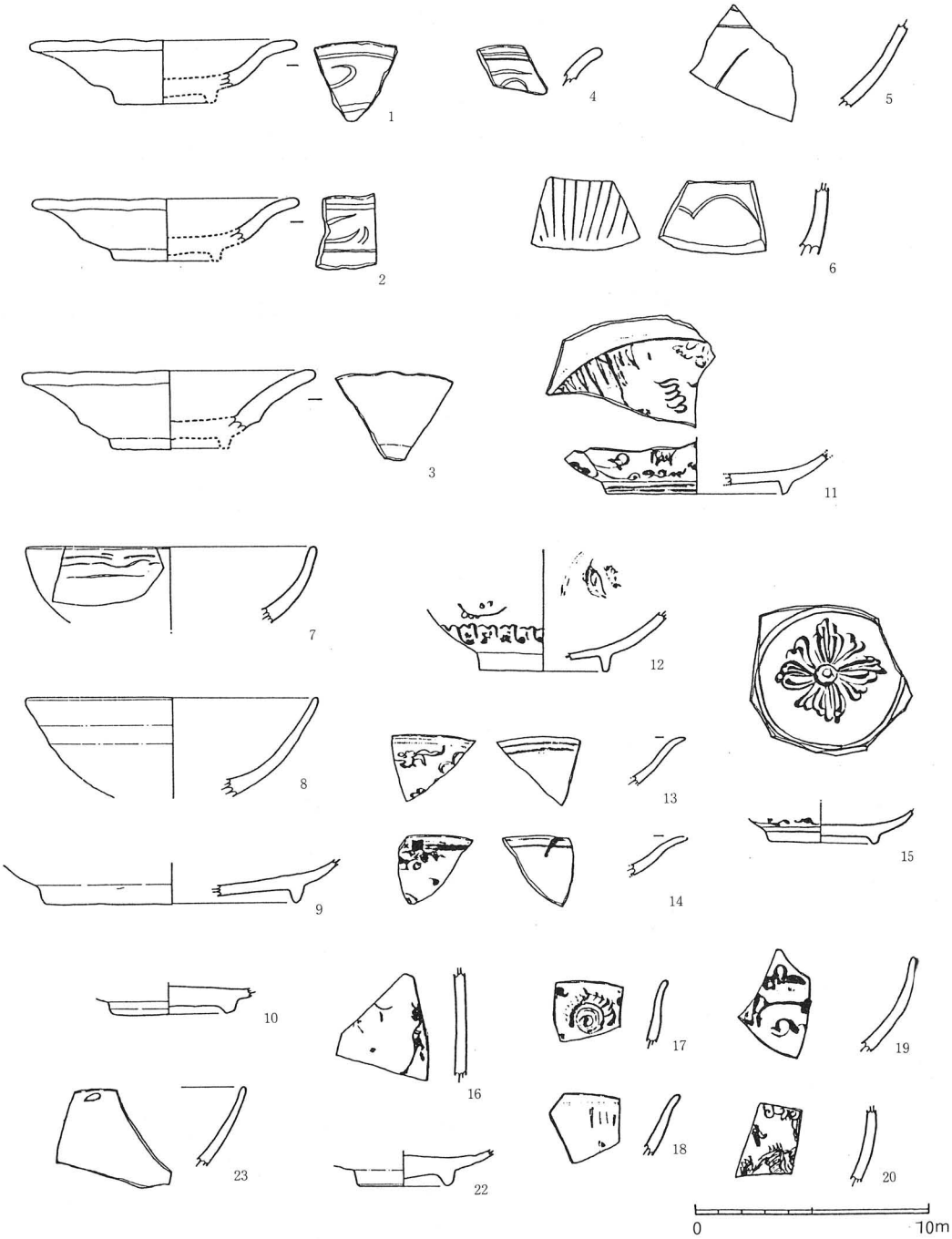
白　磁（7.8.9.10）

白磁碗(8)

8.は復元口径11.6cmを計測する白磁碗。端反りのない口縁端をもち、外面にケズリ痕が段になって残る。

白磁皿（7.9.10）

7.は推定口径11.7cmのやや深めで、高台の高い器形をもっとおもわれる白磁皿。Ｂ－２区でほぼ完形に復元できる同形が出土している。口縁外側直下に波状の線彫文が施される。釉は艶があり、乳白色に発色している。9.は底部のみ遺存するもので、底径10cmである。畳付のみが露胎で、見込、高台内ともに施釉される。15世紀後半～16世紀頃にあたる景徳鎮窯系である。10.はこれも底部のみ遺存。底径4.4cmを測る。



第16図　A－2区出土輸入陶磁器（青磁・白磁・染付）実測図（1／3）

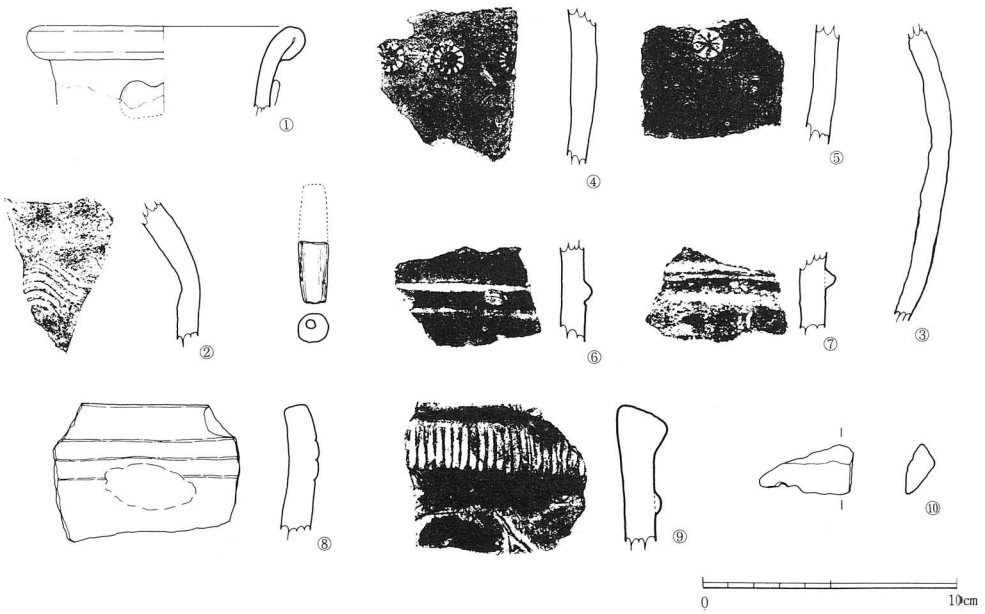
釉は一部、畳付をこえて高台内にまでおよぶ。高台は比較的低いつくりである。15世紀後半から16世紀におよび福建・広東系である。

染　付（11.～20.）

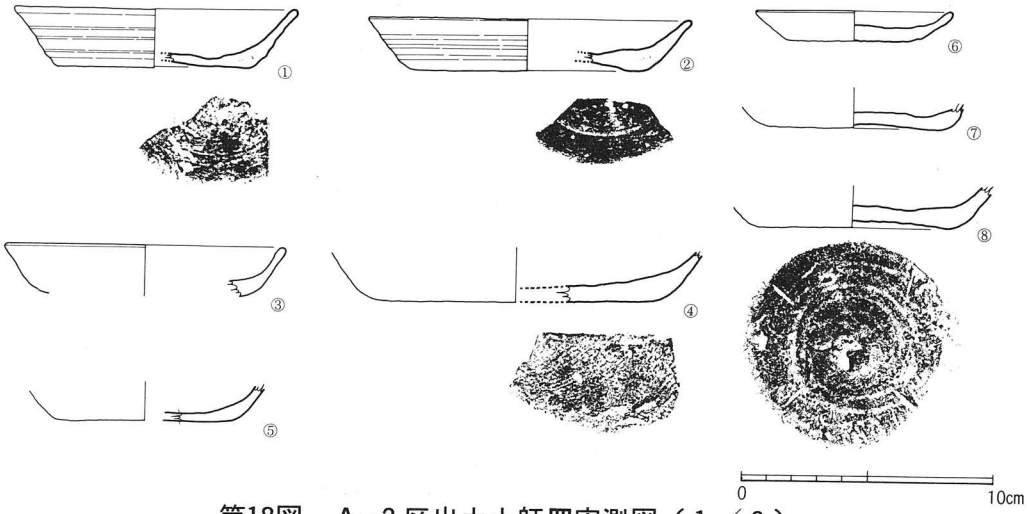
11.は底部のみ遺存。底径7.2cm。見込みに魚藻文、外に唐草文。畳付のみ露胎である。15世紀後半～16世紀中葉。景徳鎮窯系である。12.は染付碗。蓮子碗形を呈するもので、腰部に蓮弁文が巡り、見込付近に草文が描かれる。13.14.は染付皿で、口縁はゆるく外反している。13.は、玉取獅文様の一部か。14.は草花文の一部かとおもわれる。15.は見込に大きな十字花文が描かれる。畳付のみ露胎で、高台内にも施釉される。16.は15世紀後半～16世紀中葉の染付皿で、文様は騎馬である。17.20.は玉取獅文を描くもので、器形は皿である。18.は文様不詳。19.は草文の碗かとおもわれる。22.は染付皿の底部で、16世紀の福建・広東系である。見込と腰部から高台、畳付、高台内にかけて露胎となる。

ルリ釉椀（23）

23.は内外にルリ色の釉がかかる碗。口縁外側に米粒大の胎土がくっついている。16世紀前半～16世紀中葉の景徳鎮窯系。



第17図　A－2区出土陶器（壺・火鉢）・土錘・石鍋実測図（1／3）



第18図　A－2区出土土師皿実測図（1／3）

図／番号	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色　調	底部切り離し	備　考
18/1	坏	(10.9)	(7.55)	2.35	浅黄橙(Hue 10 YR 8/3)	回転ヘラ切り	
18/2	坏	(12.2)	(9.0)	2.0	浅黄橙(Hue 10Y R 8/3)	回転ヘラ切り	
18/3	皿	7.6	5.2	1.3	橙（Hue 5 YR 7/6)	ヘラ切り	ほぼ完形
18/4	坏	—	(7.2)	—	にぶい橙（Hue 5 YR 7/4)	ヘラ切り	
18/5	坏	(10.9)	—	—	橙（Hue 7.5 YR 7/6)	—	
18/6	坏	—	(11.4)	—	浅黄橙（Hue 7.5 YR 8/4)	糸切り	
18/7	坏	—	7.6	—	にぶい橙(Hue 7.5 YR 7/4)	回転ヘラ切り	底部遺存
18/8	坏	—	(7.0)	—	橙（Hue 5 YR 7/6)	ヘラ切り	

表(1). A－2区出土土師坏・皿計測表

土師器

A－2区より出土した土師器には坏と皿がある。出土地点は発掘区の南西端にかたよって出土する傾向にあり、細破片が多く出土した。口径、あるいは底径が推定復元できるものは数少ない。底部の切り離しにはヘラ切り（回転）と糸切り離しがあり、ヘラ切り離し整形による底部出土の比率が高い。

坏（18図．①～⑤.⑦⑧）

①は口径（復元）10.6cm、器高2.3cm。器底壁が薄くやや上げ底の底部から口縁端まで直線的に外反するもの。底部はヘラ切り離し（回転）である。②はむしろ皿にちかく、口径（復元）12.3cm、器高2.1cmの上げ底、ヘラ切り離し（回転）である。⑦⑧もほぼ同程度の法量を測る底部でいずれも上げ底となっている。⑧の底部は完形でヘラ切り離し（回転）痕が明瞭にのこっている。④は比較的大法量の口径をもっと推定されるもので、他と異質である。平底の底部に糸切り離し痕がみえる。

皿

口径7.2cm、器高1.25cmを測る平底の底部からゆるく直線的にたちあがる小皿でほぼ完形である。

A－2区では、青磁、白磁、染付等の輸入陶磁器の他、少量の国産陶器・土師坏、土錘が出土している。いずれも遺構にともなわないものがほとんどであり、しかも小片が多い。

出土した地点は発掘区西端に集中する傾向にあった。

中世陶磁

備前焼の壷・甕類が出土している。①は口径8.1cm（復元推定）の壷の口縁部で、ゆるく外反する短頸に下部がやや角ばった玉縁の口縁がつく。頸部に貼り付けで耳を３～４ケ所設ける。内面ヨコナデ痕、外面は褐色の鉄釉である。2.壷の肩部付近で櫛描の波状文がみられる。外面暗灰色を呈し、釉は施されていない。3.は壷あるいは甕の胴部片、１㎜～５㎜大の白色粒・砂粒を含む。内面はやや凹凸がある。外面灰褐色（7.5ＹＲ5／2）を呈する。

瓦質土器

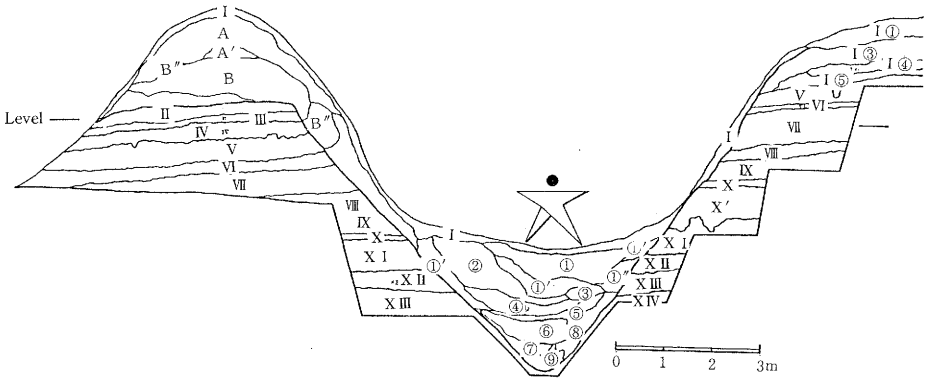
瓦質のものでは、火鉢が出土しているが全形を把握しうる破片はない。また出土量も極めて少量である。4.5.は口縁直下付近かとおもわれ、スタンプによる花文列が横位に配列される。4.は0.5㎜前後の砂粒、ガラス質粒を含む。外面暗赤褐５ＹＲ3／2、内面黒褐５ＹＲ2／1。５は0.5㎜大の砂粒の他、0.5～1.0㎜大のガラス質粒を含む。なお、5.はＰ.3中よりの出土である。6.7は同じく火鉢の口縁下の突帯部付近である。6.の突帯は、断面半円形で付近はツヤがある。7.は断面三角形で角ばっている。6.は外面黒色N2／0、内面黒褐2.5Y3／1、7.は外面黒褐５ＹＲ2／1、内面黒色10ＹＲ1.7／1。

第19図　第２・３空堀・土塁現況図

第３節

第２空堀（20図）

第１空堀から南へ約195mの位置にあり、ほぼ東西方向に穿たれている。全長約130m、幅12m（横断面部分）、深さ5.0m（横断面部分の現掘底まで）を測り、現況では断面「U」字形状を呈している。第２空堀・土塁は、農道が貫いている東側の一部を除き、紙屋城址のうちでもっとも、構築当時の原況をとどめているものとおもわれ、空堀の南縁に沿って築かれている土塁も極めて良好に遺存している。第２空堀・土塁は圃場整備後も保存されることになっているので、新たに設けられる新農道部分のみ調査している。横断面（20図）により、第２空堀・土塁を観察すれば、空堀断面は、約80°の「V」字状を呈する薬研堀である。南側土塁から、堀底までの高さ7.8mを測り、堀底は2.6mにわたって土砂が13層にわたってレンズ状に埋っている。南縁の土塁は、土塁頂から下へ2.0mまで、第20図のⅡ層上までが盛土となっている。とくに土塁盛土B層は拳大の赤ホヤブロックが極だつ層であり、明らかに人為的に盛られている。盛土それ自体は、版築等の構築法はとられておらず、比較的やわらかく盛られている。



※人は身長160cm

I　褐色土(Hue 7.5 YR 4/6)－表土・草木根多し、サラサラして粘性なし。

- I①　黒褐色土(Hue 7.5 YR 3/2)上部草根多い。表土
- I②　黒褐色土(Hue 7.5 YR 3/2)混赤ホヤ小粒のサラサラしてしまりのないもの
- I③　極暗褐(Hue 7.5 YR 2/3)比較的粒細かく、しまっている。断面にやや光沢あり。
- I④　黒色土(Hue 7.5 YR 2/1)粒子こまかく、しまっている。軽石小粒を希に含む。
- I⑤　黒褐土(Hue 7.5 YR 2/2)大きな赤ホヤブロックを所々に含む。ややしまった黒土である。

畑土がおされてきたもの。

II　暗褐色土(Hue 7.5 YR 3/4)－よくしまった土壌で、小粒(1.0m大)を含む。土塁が構築される以前の表層とおもわれる。

III　にぶい黄褐色土(Hue 10 Y R 4/3)－粒子こまかく、やわらかい。均一な層となる。

IV　黒褐色土(Hue 10 YR 2/2)－よくしまった均一な層で断面は光沢がある。

V　黄橙色土(Hue 7.5 YR 8/8)－赤ホヤ層である。サラサラして粘性なし。

VI　黒褐色土(Hue 7.5 YR 3/1)－ひじょうにかたくしまり、粒子が細かい、断面に光沢がある。

VII　暗褐色土(Hue 10 YR 3/4)－暗褐色土ににぶい黄褐色土が雲状に入る。かたくしまる。上層から下層へ漸次色調が明るくなる。

VIII　灰オリーブ土(Hue 5 YR 6/2)－小林軽石層である。灰オリーブ色をしているが、アカホヤに似た黄橙色土大粒、明褐色大粒を含む。

IX　明黄褐色土(Hue 10 YR 6/6)－ひじょうに軽くしまった層で、茶色の小粒が混じっている。

X　黄褐色土(Hue 2.5 YR 5/4)－かたくしまた層で、小粒を多く含むものの粘性もある。

X′　明黄褐色土(Hue 10 Y R 7/6)－おそらく軽石の風化した層で、粘性もある。

X I　明黄褐色土(Hue 10 YR 7/6)－大粒の小礫曽層である。黄色、明褐色、灰色、黒色の小粒がぎっしりつまっている。

X II　浅黄橙色土(Hue 10 YR 8/4)－ひじょうに粘性が強い。軽石が風化したもので粘土化している。

X III　浅黄橙色土(Hue 10 YR 8/3)－ひじょうに粘性が強い。X II 層よりめだって粒(斑点状)が大きい風化軽石層である。

第2空堀（南土塁）土層

A　褐色土(Hue 7.5 YR 4/4)やや粘性あるもののフカフカした褐色土が、盛られている。ブロック状になっている部分が多い。

A′　にぶい黄褐色土(Hue 10 YR 5/3) A層に赤ホヤ粒が混入している部分である。

B　橙(Hue 7.5 YR 6/6)赤ホヤのブロック盛られた層であり、ブロックは大は拳大となり、褐色土がその間に少量混じっている。

B′　明褐色土(Hue 7.5 YR 5/6)赤ホヤの粒子に褐色土が半々に混じる部分である。

B″　明褐色土(Hue 7.5 YR 5/8)赤ホヤブロックに褐色土が多く混じっている部分である。

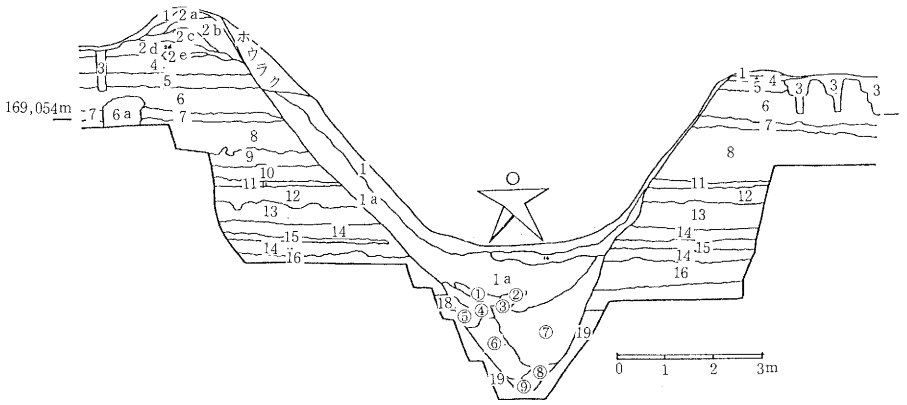
C　灰褐色土(Hue 7.5 YR 4/2)中くらいの粒子の褐色土で、やや粘性、赤ホヤブロックを所々に含んでいる。

以上、A～C層が人為的に盛られた土塁部分である。

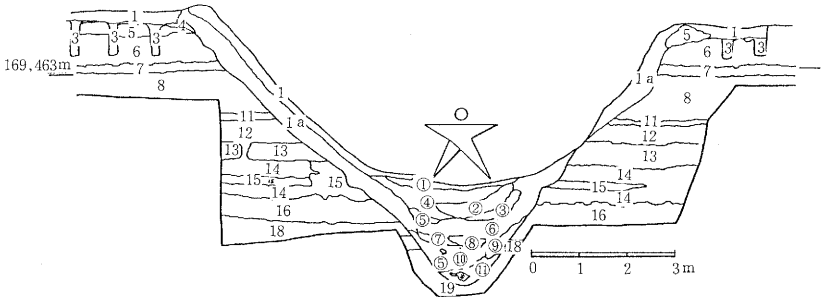
D　黒褐色土(Hue 7.5 YR 3/1)草根の多いサラサラした褐色土である。

- ①　暗褐色粘質土(Hue 10 YR 3/3)粒子はやや粗いが粘性が強く、断面は光沢をはなつ、草根がめだつ。
- ①′　黒褐色粘質土(Hue 10 YR 3/2)粒子は粗く、①にくらべて粘性が弱い、草根が入る。
- ①″　黒褐色粘質土(Hue 10 YR 3/3)粒子が細かく、やや粘性がある。
- ②　褐色土(Hue 10 YR 4/4)粘性のつよい、中粒土、断面は光沢をもつ。
- ③　暗褐色土(Hue 10 YR 3/3)①″にちかいが、それより粒子がさらに粗い。
- ④　黒褐色土(Hue 10 YR 3/2)混小礫土で、1.0cm大の小礫(軽石)が多く混ざる。レンズ状に入る。
- ⑤　灰黄褐土(Hue 10 YR 4/2)④ににて、小礫を若干含む、色調がやや明るい。
- ⑥　黒褐色土(含赤ホヤ土)(Hue 10 YR 3/1)サラサラした黒褐色土に、大きな赤ホヤブロックが入る。左側に多く混入
- ⑦　褐色土(Hue 10 YR 4/4)細粒子のやや粘性土⑥との層界が明瞭である。
- ⑧　にぶい黄褐色土(Hue 10 YR 5/4)細粒子の粘性の土、堀の斜面に沿って入る。
- ⑨　灰黄褐粘質土(Hue 10 YR 4/2)粘性のつよい均一粒子土で、堀の最下底埋土である。

第20図　紙屋城址第2空堀・土塁断面図（1／160）



紙屋城址第３空堀第１断面図（1/160）



紙屋城址第３空堀第２断面図（1/160）

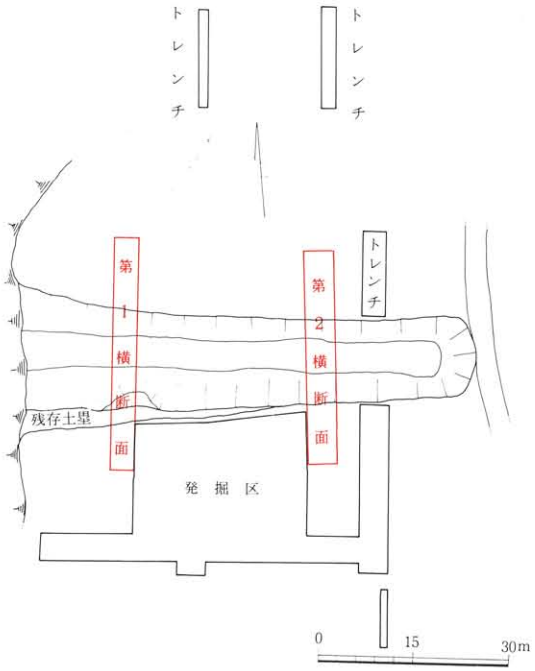
1　褐色土（Hue 7.5Y R 4/6）－表土であり、草木根多し、サラサラして粘性弱。
1 a　褐色土（Hue　YR　/　）－基本的には１層と同じであるが、草木根少なく、４層、５層の拳大ブロックを含んでいる。V字溝を直接被う土である。
2 a　明赤褐色土（Hue 5 YR 5/6）－レンズ状に入る、サラサラして粒子均一。
b　赤褐色土（赤褐 Hue 5 YR 4/8）－〃　〃
c　黒褐色土（黒褐 Hue 5 YR 3/1）－〃　上部に赤ホヤブロックを含む。
d　橙色土（橙 Hue 5 YR 6/8）－〃　サラサラして、ねばりけがない。
e　灰褐色土（灰褐 Hue 5 YR 6/2）－〃　やや粘性。
　　土塁として構築されたものである。
3　カクラン土－ごぼう作付用のトレンチャー（帯状に深耕する農機）あとである。１層の褐色土、４層の赤ホヤ、５層の黒褐色土、６層の褐色土が粒状に平均に混り、フカフカしている。
4　黄橙色土（黄橙 Hue 7.5 YR 8/8）－サラサラして粘性なし、乾燥すると堅く塊をつくる。赤ホヤ層である。最下層約1.5cmの厚さで、比較的粒子の粗い（5.0m平均）層となる。
5　黒褐色土（黒褐 Hue 7.5 YR 3/1）－いわゆるカシワバンである。ひじょうに堅くしまっており、粒子も細かい。やや粘性がある。３層との層界が明瞭である。
6　褐色土（にぶい褐 Hue 7.5 YR 5/4）－全体ににぶい褐色を呈するが、それは明褐色土（明褐 Hue 7.5 YR 5/6）を基調に褐色土（褐 Hue 7.5 YR 4/6）がブロック状、あるいは雲状に混じった状態である。
6 a　暗褐色土（暗褐7.5 YR 3/4）－ブロック状の褐色土は、明褐色土に比して、粒子粗く、かたくしまっている。やや粘性をもつ。
　　６層のかたくしまった褐色土ばかりの落ち込みである。
7　灰オリーブ色土（(灰オリーブ Hue 5 Y 6/2）－小林軽石層である。全体色は灰オリーブ色を呈するが、赤ホヤに似た黄橙色大粒（1.0cm前後）、明褐色大粒（0.8cm前後）を多く含み、これが本層の特徴となっている。その他に透明、白色、黒色小粒（1.0mm平均）を包含し、全体にひじょうに堅くしまっている。粒間の土壌は比較的粘性がある。
8　明黄褐色土（明黄褐 Hue 10 YR 6/6）－やや粘性のある明黄褐色が縦方向を中心としたブロック状に分布する。縦方向にキレツが入る性質がある。下層はやや明るくてしまりのない明黄褐色土となる。
9　にぶい黄橙色土（にぶい黄橙 Hue 10 YR 7/4）－ひじょうに堅くしまったにぶい黄橙色土層であり、粘性は大である。上層との層分は不鑿となる。土層中に７層にみたような黄橙色粒、明褐色粒、灰色軽石粒を、比較的多く含む。
10　明黄褐色土（明黄褐 Hue 10 YR 7/6）－粒子はやや粗く、赤ホヤ火山灰層に似るが、中に黄色、明褐色、灰色、黒色の多数の小粒がぎっしりつまっている。小粒は平均して5.0mm大である。
11　明黄褐色土（明黄褐 Hue 10 YR 6/8）－土層を構成する粒子は、10層と同じであるが、いずれも大粒（8.0mm～10mm）となり、ぎっしりつまる。乾燥すると美しい黄色（Hue 2.5 Y 8/6）となる。
12　赤褐色火山礫粒土（赤褐 Hue 2.5 YR 4/6）－0.2cm～0.3cm大の火山礫粒がいっぱいつまっている。
13　赤褐色火山礫粒土（にぶい赤褐 Hue 2.5 YR）－0.5cm～1.0cm大の火山礫粒がいっぱいつまっている。乾燥すると白色化し、層全体が白色帯となる。
14　橙色土（橙 Hue 7.5 YR 6/8）－粘性のある粒子の細かい土に、橙色の風化軽石小粒、同じく浅黄橙色の風化軽石小粒、および黒色砂粒を含む。
15　浅黄橙色土（浅黄橙 Hue 10 YR 8/4）－上記14層と基本的には同一であるが、浅黄橙色の風化軽石を多く含むので、上記より明るい色調となる。粘質である。
16　橙色＋浅黄橙色土－14層の粒子がさらに大きくなり（1.0～1.5cm）。浅黄橙色風化軽石と橙色風化軽石のまだら模様を呈する。風化してかなり粘性をもっている。
18　灰白色土（灰白 Hue 10 YR 8/1）－軽石が風化堆積したのもので灰白色を呈す。つぶすとザラザラするが、つよい粘性もある。
19　黄橙色土（黄橙 Hue 7.5 YR 7/8）－粒子が細かく均一である。つよい粘質をもつ。

第21図　紙屋城址第３空堀・土塁断面図（１／160）

第４節　第３空堀

紙屋城址第３空堀は、第１空堀より南へ約300m、第２空堀からは同じく南へ130mのところにあって第２空堀に平行して穿たれており、東西の深い谷を結んでいる。第３空堀は、南北約300m、東西約100mの「S」字状に広がる平坦部の、東西に狭い部分、ウエストラインにあたるくびれ部分、すなわち両脇から谷がのびてきている地形を選択して南北面を断ち切る形で穿たれており、全長（東西）95mある。現況は、幅約３mの農道を挟んで東側約半分はすでに埋められて耕地となり、土塁も跡形をとどめていない。西側の残存部空堀は、長さ（東西）48m、幅（南北９～12m、深さ４m～６mを測り、西側端に幅広く、東に向って徐々に狭くなる。堀の横断面を観察するために、第１、２切断面を設定している。（第22図）第１横断面をみると、現況では「U」字形を呈するのであるが、原形は「V」字堀、すなわち薬研堀である。「V」字の角度は約78°、堀底までの深さ6.8m～8.3mを測る。また、第１横断面では、南側にわずかに残存する土塁を観察できる。残存土塁は、西端から東へ向って長さ25m、幅２m（最大）、高さ0.8cm（最大）ほどある。

第２横断面は、第１横断面より角度が広く（82°）、現地表面からの深さ5.7m～6.0mを測る。第１横断面の堀底と第２横断面の堀底レベル差は1.69mあって西側谷部にむかってゆるやかに傾斜する。

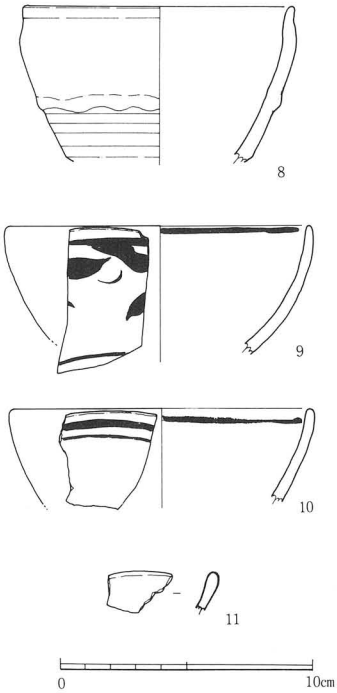


第22図　紙屋城址第３空堀実測図（1/1200）

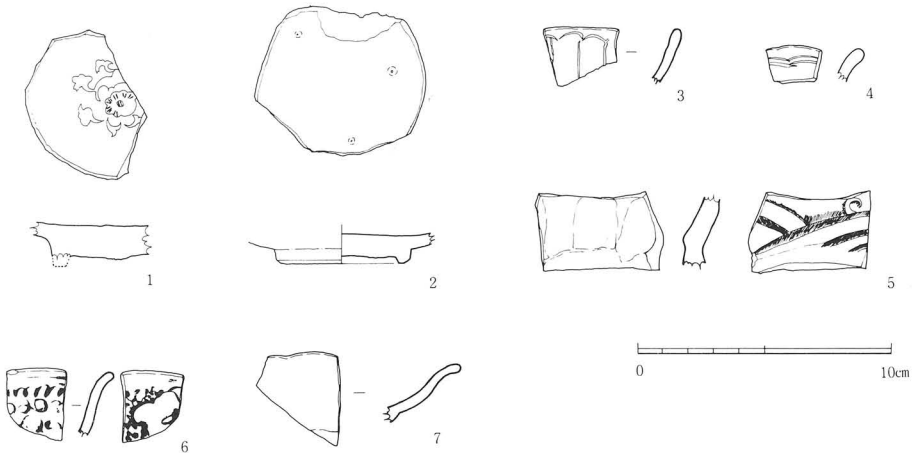
1．第３空堀南区出土遺物（第24図）

いずれも表土中からの出土で遺構に伴っていない。輸入陶磁器のほか、肥前系の陶磁器、瀬戸美濃系の陶磁碗がみられる。

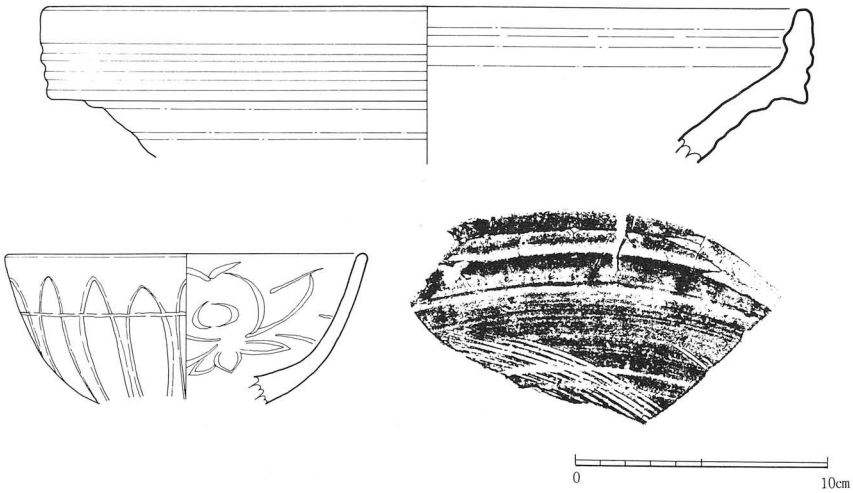
青　磁．　1.は青磁碗の底部片。見込に印花文。高台脇まで厚い施釉、緑灰色に発色して貫入がみられる。高台内無釉で同心円状に削る。2.は青磁皿。高台径5.4cm。見込に三ケ所、重ね焼きのハリ痕を残す。高台は面取られ、釉は畳付をこえて高台内に流れ込んでいる。3.は、青緑灰色で貫入のある線彫り蓮弁文碗の口縁片。4.は稜花皿の口縁小片。釉は青枯草色に発色し、表、裏ともに貫入がみられる。15世紀後半から16世紀中葉の製品。5.は器種不明。内面は露胎で指頭圧痕、外面は青緑色の釉が厚くかかり、陰刻草文あり。火入類かとおもわれる。



第23図　第３空堀南区出土国産陶磁器実測図（１／３）



第24図　第３空堀輸入陶磁器実測図（１／３）



第25図　第３空堀出土遺物

染　付.　6.は染付碗口縁。内に松文、外に渦巻文が施される。釉は透明感があってツヤがある。景徳鎮窯産とおもわれる。

白　磁.　7.は口縁を稜花状に造る皿である。表面のツヤは鈍い。内外に貫入がみられる。

２．第３空堀出土遺物

青磁蓮弁文碗

焼きがよく、釉は緑色に美しく発色する。推定口径13.6cmを測り、腰から高台部を欠いている。外側の蓮弁は、幅広く陽刻されているが、中央に鎬は表現されない。蓮弁は比較的肉太に刻れているが、盛り上がりはやや曖昧である。口縁から外側約2.3cmのところに一条の刻線が入っている。見込みには陰刻で大きな蓮弁文が施される。釉は厚くかかっており、貫入はまったくみられず艶やかである。胎土は明灰白色で、細かな間瞭がある。

擂　鉢

推定口径29.2cmを計測する備前焼の擂鉢片。口縁外側に２条の段（３条の凹線）をもつ幅3.7cmの口縁帯をもち口縁内側にも一条の低い凸線がある。間壁忠彦氏編年のＶ期にあてられる。焼きは極めて堅調である。